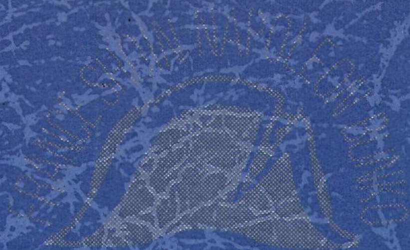
FRANCE SHOIN NAPOLEON BUNKO

必殺あそび人

花の大江戸捕物帳





Hissatsu Asobinin

Hana no Ooedo Torimonochoh

必殺あそび人

花の大江戸捕物帳

紅くりす

画 猫島 礼

フランス書院



ナポレオン文庫

必殺あそび人

花の大江戸捕物帳

●もくじ







挿画＝猫島　礼





卓

花のお江戸の
遊び人。



明日香

グラマラスな18歳
の岡っ引き。



千代

団子屋の
看板娘。



菜美姫

卓にほの字の
可愛いお姫さま。



早苗

小料理屋を経営する
22歳の若後家。



志乃

超色っぽい
うなぎ屋の女将。



ルリ大夫

軽業団を率いる
美少女。



小雪

卓を助ける美貌
の化け猫。



必殺あそび人

花の大江戸捕物帳

まえがき　わたしを食べて♡

いきなりだけど、質問でーす。『食わずぎらい』って言葉、知ってる？
その意味はね、「やだやだ」って言いながら恋人のペニスをお口に頬張ってみたら、「あら？　これってけっこうおいしいかも」
と、おフェラがすっかりお気に入りになってしまうことよ。
……ハッ！　いけない。わたしったら、現国のテストには恥ずかしくって絶対書けないような答えを言ってしまったわ。ごめんね。こんなの、誰にも言っちゃダメよ。
本当の意味は「チャレンジする前に、最初からダメだと思ってあきらめること」なの。
あなたは『チャレンジ精神』って持ってる？
今回、くりすは初めて時代劇にチャレンジしてみたの。時代劇が苦手な人でも、『食わ

ずぎらい』しないで読んでみてね。

主人公は遊び人の卓（たく）さん。もちろん、美女に美少女だけじゃなくて、めっちゃ色っぽい化け猫に可愛い団子屋の看板娘、そして町娘に姿を変えた麗（うるわ）しのお姫さまも出てきちゃうのだ。そうだ、子象のパオパオも出演するのよ。

……ひゃあ！　あなたったら、ひょっとして子象と美少女がエッチするんじゃないか？　なんて想像しなかった？　や〜ん、えっちぃ！

わたし、パオパオのファンだから、そんなエッチなことは絶対させないもんっ！　そのかわり、卓さんがたっぷり頑張ってくれちゃうわよ。

「こいつをたっぷりしゃぶってくんな」

卓さんは、極太のものを誇らしげに突きだしてわたしに命令する。

ああ〜ん。そんなにたくましいものを見せつけられたら、もう黙ってなんかいられないわ。身体が自然と動いて、青筋の立ったペニスに両手を近づけてしまう。こんなに大きなものをお口の中に入れるのかなと思うと、興奮で胸がドキドキしてきちゃうわ。

「ねぇねぇ、たっぷり舐めたら、入れてくれる？」

「そうだな。それじゃ、ちぃとばかし準備をしてやるから、そこに寝るがいいや」

粋でいなせな遊び人の卓さんは、顎をしゃくって命令する。

わたしが言われたとおりにすると、シックスナインの体勢になって、股間からそそり勃っている極太棒を上の唇に突きつけてくる。最初に亀頭の先割れから吹きだしている透明な液をペロッと舐めあげると、口の中に不思議な味がひろがる。

「あふッ……やんッ」

いやだわ、彼の舌がくりすの大切なところにいきなり触れてきたわ。舌の先でピンク色の花びらをかきわけるようにして、花奥から溢れている蜜を味わいはじめる。

「いい味だな。ずいぶんとうまいスケベ汁を持ってるじゃねぇか」

「そんなの知らないっ」

どーして男の人って、こういう時にエッチなことを言うのかしら？　恥ずかしくて顔が火照ってきちゃう。聞こえなかったふりをして、もっともっとペニス舐めちゃおう。

「こんだけ濡れてりゃ、パオパオのチ×ポでもぶちこめそうだな。どうだ、あいつとしっぽりずっぽりやってみるか？」

「やだやだやですっ！　わたし、パオパオとはプラトニックな仲なのよ。お願いだから、アソコに入れるのは卓さんのにしてぇ」

「わかったわかった。それじゃ、まず最初にケツの穴を洗ってやろう」

くりす、「え？」と言ったきり、絶句しちゃった。

「ケツ……じゃなくて、お尻の穴を洗うってことは、まさか……」
「そうだ。このギヤマンの水鉄砲で浣腸してやるぜ。そうすりゃ、前でも後ろでもチ×ポをたっぷりぶちこめるようになるからな。覚悟しとくがいいぜ」
卓さんがフッと笑って着物の片袖を脱ぐと、その下から目にも鮮やかな紅椿(べにつばき)の入れ墨がこぼれでる。
ああ、なんて見事な紅椿なの！
ぼうっと見あげていたら、卓さんはわたしの太腿をつかんで左右に大きく割りひろげた。そしてガラスでできた水鉄砲の先端をくすんだピンク色のすぼまりに突きつけてくる。
「ああ、そんな……。イヤイヤ、そんなの入れないで」
なんて口では言っていても、わたし、いい男と数字の計算には、めちゃめちゃ弱いのよ。本当は熱く燃える瞳で見つめられただけで抵抗できなくなってしまうの。もぉダメだわ。お願いだから、くりすを食べて♡　乳房もアソコも唇も、全部全部、食べてね。『食わずぎらい』は許さないゾ。丸ごとぜーんぶ食べちゃうまでは、居残りでーす！
ではでは、くりす&くりすのお話を、楽しんで召しあがれ♡

第1章　卓はお江戸の遊び人

「卓さん、お誕生日おめでとう」
白地にあさがお模様の浴衣を着た早苗は、布団に横たわる半裸の卓のすぐ脇にお尻を降ろす。ほの甘い体臭が卓の鼻をくすぐる。
満で25歳になった卓は両腕を早苗の首にまわして引き寄せ、唇を奪った。柔らかくて温かな唇を舌でこじ開け、飢えた子犬のように早苗のだ液をむさぼる。
くちづけをしただけでふたりの鼓動は高まり、自然と息が荒くなってくる。
ようやくキスが終わると、早苗は黒目がちの瞳で卓の顔をじっと見つめた。
「卓さんに贈り物よ。今夜はたくさん召しあがれ」
早苗は立ちあがって浴衣の合わせ目を両手で開く。すると、その下から驚くほど白い裸

身と深紅の腰ヒモが現われた。胸の谷間で結ばれた腰ヒモは、股間へとのびて、黒く柔らかな恥毛の上でリボン結びに縛られている。

卓は息を殺して目の前の裸身を見つめた。

大きく張りだした白いオッパイ。キュッとくびれたウエストと形のいいヘソ。ハート形のヒップ。傷はおろか、ホクロすらない雪肌は、若さとエネルギーに満ちている。何度見てもついため息が出てしまうほど美しい。

早苗は卓より3歳年下で、5年前に亭主に先立たれて後家になったばかりだ。品があるやや細面の顔に愛情たっぷりの黒い瞳。唇は男を惑わすような薄い朱色をしている。

卓は羞恥に赤く染まる早苗の美貌を見つめて問いかけた。

「自分で縛ったのか？」

「ええ。卓さんのためだもの。こういうの、好きでしょう？」

「バカだな」

苦笑する卓を見て、早苗はすねたように唇を尖らせた。両手でつかんでいた浴衣をずり落とし、おずおずと卓の前に歩み寄る。

「ねぇ、見てるだけじゃいや。あたしを食べて」

早苗はいきなり卓の手をつかむと、その手を呼吸に合わせて上下している乳房へと導い

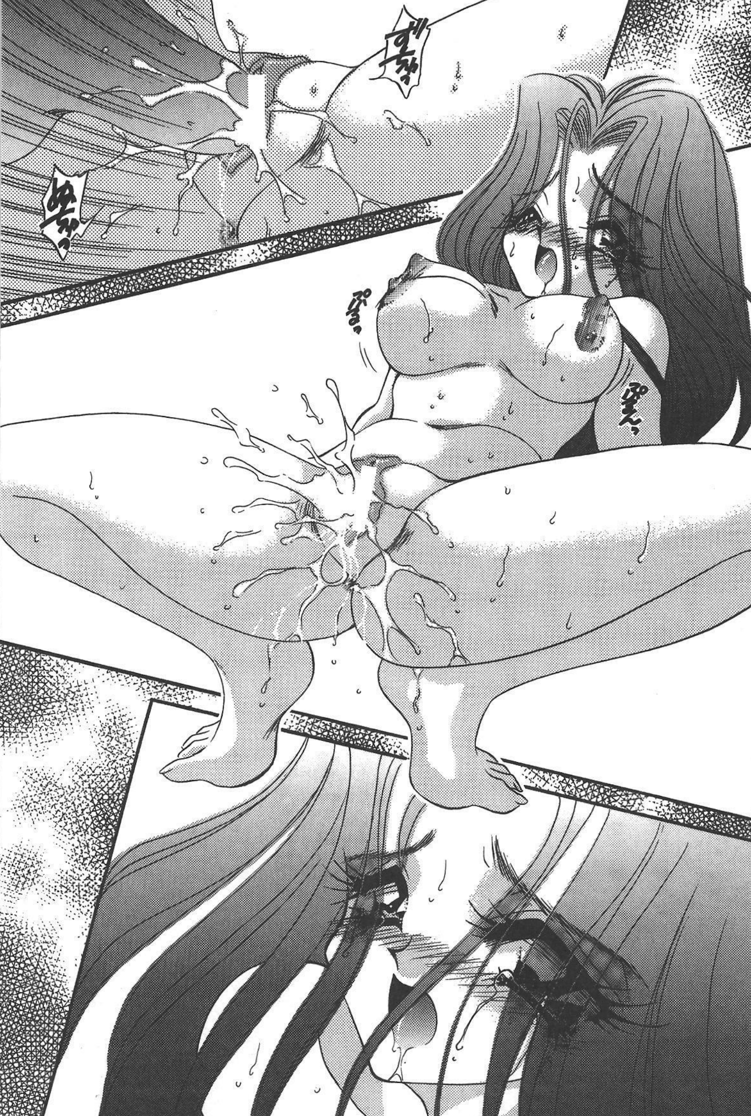
た。
　白い乳房は赤い腰ヒモできつく絞めあげられて、先端から薄桃色の乳首が飛びだしていた。卓の手のひらと指腹には、温かで柔らかな肉球の感触が伝わってくる。
「ねぇ、ほどいて」
　卓はうなずき、赤い腰ヒモをほどいた。神妙な顔で黙りこんでいたペニスは、戒(いまし)めを解かれた乳房を見ると、たちまち硬く大きく勃起してくる。
　卓の背中には、両肩から右の腰にかけて見事な紅椿の彫り物が入っていた。満開の椿はまるで風に吹かれているようにユラリと揺れて緋色(ひいろ)の花びらをひらめかせている。
「欲しくてたまらないって顔だな」
　股間の欲棒は、今すぐにでも女壺に入りたくてうずうずしている。けれど、彫りの深い面立ちをしたいい男は、それをこらえて早苗の乳房をやさしく揉みしだく。
　2本の指で挟みこまれた淡いピンクの乳首は、刺激を受けて少しずつ硬くなってくる。
「ああっ……。卓さぁん……」
　胸の愛撫に弱い早苗は、たちまち甘い声を放ちはじめた。
　卓はなおも乳房を揉みあげながら、恋人の身体をそっと押し倒す。布団の上に身を横たえても早苗の乳房は形が崩れない。ふたつの乳首は天に向かってツンと尖っていた。

「あんっ、感じちゃう」
卓は硬くしこった早苗の乳首を舐めながら片手を彼女の股間にのばして、しっとり濡れた若草を撫であげる。それから花びらの間を指でそっとこする。
「早苗、こんなに濡れてるぜ」
秘唇を濡らす透明な液は卓の指にまとわりついて、クチュクチュと卑猥な音をたてる。
「あはぁっ……音が。……は、恥ずかしい」
卓はむっちりした早苗の太腿を両手で左右に押しひろげる。
「早苗のオマ×コ、とってもきれいだ」
「はぁあん、そんなとこ見ないでぇ」
早苗は欲望で濡れぬれになった秘部を卓にたっぷり視姦されて、真っ赤になって顔をそむける。恥ずかしさで、大きな乳房が桜色に染まっていた。
卓は指腹に愛液をまぶして、敏感な肉芽のつけ根をえぐるように刺激する。
早苗は背をのけぞらせて、指だけで達してしまいそうになるのを必死にこらえていた。
「イヤよ、はぁあっ……。イキそうなの。ひとりはイヤ。卓さぁん」
「・・・たくさんね。それじゃご要望にお答えするか」
涙で潤んだ瞳で哀願されて、卓は早苗のGスポットを責めたてた。親指で白っぽいピン



ク色の真珠をコロコロ転がし、熱く火照るヴァギナに中指を抽送する。
蜜に濡れた卓の指と秘唇とが、こすれてチュクチュクと音をたてる。
「あっ、はひぃい。お……お願い」
「お願いって、どうして欲しいんだ?」
「もう我慢できない。卓さんとひとつになりたいの。お願いよ、卓さんのアレをあたしのアソコに入れて」
かすれた声に触発されて、卓の剛直は限界ぎりぎりまで屹立していた。我慢しきれなくなった卓は、早苗の身体にのしかかっていく。
卓のペニスは壮大だった。バナナのように反りかえり、石のように硬く勃起している。黒光りする表面にはいく本もの血管が青紫色に浮きあがってピクピク脈打っている。
「いくぜ」
と言うなり、卓は象並みの逸物を早苗の秘孔に挿入する。ずちゅっというヒワイな音と同時に、早苗は裸身をのけぞらせる。
「くぁあっ。ふ、太いぃっ!」
卓は早苗の両肩をつかみ、大きな乳房を揺するようにして激しくピストンしはじめた。
硬く反りかえった太幹は熱くとろける蜜壺を貫き、肉襞をこするように出入りする。

剛棒を根元まで咥(くわ)えこんだヴァギナは、収縮と弛緩(しかん)を繰りかえして、まるでそこだけが別の生き物のようにペニスを奥へと招き入れようとする。
「あうっ。いっぱい……。いっぱいなのぉ〜」
「なにがだよ？」
「卓さんのアレが、アソコにいっぱい……ああ〜ん」
早苗は卓の肩にまわしていた両腕を布団の上についた。背中を弓なりにのけぞらせて腕に体重をかけ、秘部を密着させたままお尻を浮かせて下半身をくねらせる。若後家の閉じた両目の端から歓喜の涙がこぼれ落ち、上気して赤く染まった頬を伝う。
「あっ、あっ、ああーっ！」
早苗の呼吸はいっそう速まり、熱く燃える女壺はけいれんするように肉壁をうねらせて太幹を締めつける。
卓は早苗の柔らかな尻たぶを両手でつかみ、ペタッペタッと音がするほど激しく抽送する。
「あぁあ〜っ、卓さぁあん」
「早苗っ！」
次の瞬間、エクスタシーに達した早苗の胎内に、卓の熱いスペルマがドクドクドクッと


ずぶっ
ぬぷっ
ぷるんっ
ぷるっ

ぶちまけられた。卓はひくついている秘裂に剛直を突き刺したまま、早苗の肩を抱くようにして布団の上に倒れこむ。
うっすらと汗にまみれた早苗の裸身はキラキラと光って、まるで泡から生まれた天女のように見えた。
「早苗……」
しばらく絶頂の余韻に浸っていた早苗は、その声を聞いてゆっくりとまぶたを開いた。どことなく眠たげな表情で微笑み、卓の裸の胸に頰をすり寄せる。人差し指をのばして卓の胸から引きしまった腹へとなぞって、指先が卓の恥毛に触れると、頰を赤く染めて手を引っこめた。
「あたしたち、まだ、ひとつなのね」
卓はうなずき、早苗の裸身を抱きしめた。
柔らかな花奥の中に心地よくおさまった剛直は、少しずつパワーを取り戻していく。
遊び人の卓が早苗と知り合ったのは4年ほど前だ。
わけあって家を飛びだした卓は、どこといっていくあてもなく、金もほとんど持っていなかった。空腹をかかえて『またこい橋』のたもとでぼんやりしているところへ早苗が通りかかり、偶然切れた下駄の鼻緒を直してあげたのが縁で、こんな関係になってしまった。

卓は今ではナメクジ長屋に住まいを構えていたが、ほとんど毎日のように早苗が経営する小料理屋の奥座敷でゴロゴロしている。
「早苗。そろそろ店を開ける時間じゃないのか？」
「ううん、いいの。表の貼り紙見なかった？　今日は卓さんの誕生日だから『臨時休業』にしておいたのよ」
卓は「そうか」とつぶやき、早苗の頰を片手で撫でる。
「どうかしたの？」
「ん？……いや、今夜は事件が起きそうな気がするんだ。すまねぇな」
「あら、そうなの」
早苗はがっかりしてため息をもらす。けれど、すぐに柔和な表情になって卓の胸に頰をすり寄せた。
「でもいいわ。今夜がだめでも、また……ね？」
「ん？　ああ」
卓はうなずき、早苗の狭間から5分立ちになった極太魔羅を抜き取った。大きく左右に張りだした亀頭がすぼまった陰口にひっかかり、早苗は「ああんっ」と甘い声をあげる。
「本当はもっとして欲しかったんだけど……」

「悪いな。オレもゆっくりしていきたいんだが……」
言いわけじみた言葉を口にしつつ、名残惜しげな早苗の口にキスをする。
早苗は自分から舌を絡めてディープキスをせがんだ。
「んくっ……。あはぁ……。卓さんったら、あたし、また気をやってしまいそうよ」
「そりゃあよかった」
卓は微笑を浮かべて早苗の頬にかかる後れ毛を撫でつけた。

☆

早苗の家を出た卓は、『またこい橋』の欄干(らんかん)にもたれていた。
夕暮れの茜(あかね)色に染まる東の空からゆらゆら昇ってきた青白い満月を見あげている。
「なぁ**小雪**(こゆき)、今夜はずいぶんときれいな月が出てるじゃねぇか」
のんびりした口調で話しかけると、足もとにペタンと座りこんだ三毛猫が「にゃあ」と答える。
小雪と呼ばれた三毛猫は、細く小さな身体と長くて白いシッポを持っていた。金に光る瞳をキラキラさせて男を見あげている。
卓の身の丈は178センチ。眉目秀麗(びもくしゅうれい)、聡明な額や頬は陽に灼(や)けてたくましく、笑うと健康的な白い歯がこぼれて人目を引く。肉厚の胸板は呼吸に合わせて静かに上下し、欄

干に乗せられた腕には筋肉がたっぷり乗っている。

「てぇーへんだぁー、暴れ象が出たぞうー！」

どこからともなく男の悲鳴が聞こえてきて、卓は素早く背後を振りかえる。

すぐにドシドシという地響きと人々の叫び声が近づいてきた。

「小雪、どうやら事件のようだぜ」

卓と小雪は素早く走りだす。『またこい橋』から舟見町へ差しかかったところで、逃げまどう人々の群れと出くわした。

「なんでぇ、暴れ象っていうから巨象かと思ったら、まだ子象じゃねぇか」

赤いマントを背中にかけた子象は、狂ったように長い鼻を振りあげている。寺の柱のような太い四肢で地面を踏み鳴らして暴れていた。

卓は遠巻きに見物しているやじ馬の中に団子(だんご)屋の看板娘、**千代**(ちよ)が混じっているのを見つけて近づいていく。

「おぉい、千代！」

千代はお花の稽古(けいこ)の帰りらしく、薄紙に包まれた花束をかかえて半べそをかいている。

その年は15歳。頬がふっくらした丸顔に、すずめのような黒目がちのパッチリした瞳が可愛らしい。同じ長屋に住んでいる顔なじみの卓の姿を見るとホッと胸を撫で降ろした。

「あっ、卓さん」
「あの象はなんだって暴れてるんだ？」
「あれはルリ大夫が率いる軽業団の象なんだって。見せ物小屋で芸をしている最中、急に暴れだしたって話よ」
「なぁ〜る」
卓はうなずく。パオーンブホーンと雄叫びをあげて暴れまわる子象を、ひとりの小柄な美少女が必死になってなだめようとしている。きらびやかな衣装に身を包んだ身長140センチほどの華奢な美少女は、**ルリ大夫**その人だった。
「あの象、今に殺されちゃうかもしれないわ。卓さん、なんとかしてあげてよ」
千代は泣きべそをかいて、飼い主のルリや男たちに歯向かう子象を見つめている。
「しょうがねぇなぁ。こうなりゃ乗りかかった船だ。ひと肌脱ぐとするか」
卓は頭を左右に振り、コキコキッと首の骨を鳴らして子象のほうへ歩み寄る。
「ちょいとあんた、それ以上近づくのはおやめよ」
「おい、おまえ。危ねぇぞ！」
人々は口々にとめようとしたが、無鉄砲な遊び人は気にせずどんどん歩いていく。ほとほと困り果てた顔で子象を見守るルリの横を、卓はすいと通り抜けた。

子象はいよいよもって猛り狂っている。街路樹をなぎ倒し、金物屋の軒を破って鍋釜を蹴散らして、また往来へと戻っていく。おでん屋の屋台に体当たりして首を巡らすと、その真っ正面に金太郎飴を咥えた鼻たれ小僧がぽへら〜っと突っ立っていた。

子象の攻撃目標が男の子にセットされた。

ダスダスダスダス。

足音も荒く迫っていく。

「危ないっ！」

「殺されるぞ！」

誰もが叫んだその刹那、卓が子象と小僧の間にひらりと飛びこんだ。間一髪でボーッとしている小僧を横抱きにして道の端へと駆け戻る。

「すげぇ、命がけでガキを助けたぞ」

「きゃーん、素敵ぃ♡」

「そこの人、危ないですよ。今すぐそこをおどきなさい！」

小僧をまんまと救出した卓は、ルリ大夫の声を無視して片手をスッとあげる。なおも執拗に迫ってくる子象の瞳を正面から見つめた。

「パオパオーン！」

ドドッドドッと地響きをたてて子象が迫りくる。

卓は平然とした顔でいきなり子象に背中を向けた。着物の襟に両手をかけるや否や、ぐいと引いて素早く両肩を剝きだしにする。するとそこに、目にもあでやかな紅椿の彫り物があらわになった。

「おおっ！　ありゃあ、遊び人の卓さんじゃねぇか」

「あら、あれが『背ナで震える紅椿。茜の花は悪人裁く』と嘔われている卓さんなの？」

「あったりめぇのコンコンチキでぃ。江戸かいわいで遊び人の卓さんを知らねぇやつは、江戸っ子とは呼べねぇぜ」

「遊び人の卓さんって、美人画しか描かない日本一の浮世絵師『鯉川晴町』が浮世絵にしたただひとりの男なんだろ。卓さんをこんな間近で見られるなんざぁ、ありがたいねぇ」

群衆たちのざわめきをよそに、粋な遊び人は両肩にしょった紅椿を誇らしげに見せつけながらすっくと立っている。きりりとした眉の下に光る聡明な瞳には、ガキ大将のようにヤンチャで向こう見ずな色を浮かべている。ニッと笑うと白い歯がとっても魅力的だ。

「パオオオーン！」

暴れることしか頭にない子象は長い鼻で卓を突き飛ばそうと迫る。だが、卓の背中を見た瞬間、ピタリとその場に立ちどまってしまった。

「おい、どうしたんだ？　象がとまったぜ」

子象の目は紅椿に吸い寄せられている。狂気に満ちた瞳がふうっと揺らいだかと思うと、高々とあげていた凶暴な鼻がだらんとさがった。耳もシッポもまるで弛緩（しかん）してしまい、次には「ぱふ～ん」と情けない声をあげる。そのままの格好でブルブルブルッと巨体を震わせ、赤ん坊の頭ほどある巨大な糞をモリモリモリッとひりだした。

「パオパオ、どうしたの？」

ルリ大夫が心配して恐るおそる子象のそばまで駆け寄ってくる。

子象は卓の前までトコトコ歩いていき、卓の肩に長い鼻をすり寄せはじめた。

「うへぇ。あの象、卓さんになついてるみたいだぜ」

「すごぉい！　卓さんって『若後家殺し』のくせに象も手なずけられちゃうのねぇ」

「パオパオ、だいじょうぶ？」

パオパオは振り向いた卓のウエストに鼻を巻きつけ、軽々と持ちあげて自分の背中に乗っけてしまった。「ぱふぅ～ん」と甘えるような声をあげて、今度はやさしくノシノシ歩きはじめる。その脇にルリが急いで近づいた。

「パオパオ、とまりなさい。パオパオ！」

だが、子象は飼い主の命令にそむき、長い鼻を高々とあげて通りをねり歩いていく。

「ちょいと、卓さぁん！」

パオパオの様子を見ていた卓は、聞き覚えのある声に背後を振りかえった。相変らず混み合っているやじ馬の向こうで、岡っ引きの**明日香**が大きく右手を振っている。

明日香は花も羞じらう18歳。大江戸警備隊の岡っ引き部門に属するチャキチャキの江戸っ子娘だ。その姿は女豹のようにしなやかでほっそりしていて、けれど出るとこはしっかり出ている93・58・90のCカップグラマラス美女である。

長いまつ毛にふちどられた切れ長の目は正義感にあふれ、小さめの唇はキュッと口角があがっている。鼻は高すぎず低すぎず、ちょうどいい形に整っている。

「明日香親分の登場か。よおし」

卓は子象の肩をなだめるように平手でヒタヒタと叩く。パオパオはその合図に気づいて足をとめ、卓はひらりと体を踊らせて地面に降り立った。

「お怪我はありませんか？」

「ああ。あんたがルリ大夫かい？」

つやつや光る舶来の服を身につけた美少女は、驚くほど背の高い卓を見あげて「ええ」とうなずく。

そこへ岡っ引きの明日香がようやく追いついてきた。

明日香は166センチの長身に、大江戸警備隊の制服である丈が短い深紅のハッピを着ている。ハッピの襟には桜のご紋が金糸で縫いこまれていた。その下には、活動しやすいように膝上20センチほどに短く仕立てた麻の着物を着て、黒っぽい帯を男結びに締めている。帯の脇にはお上からちょうだいした銀の十手が斜めに差してあった。

明日香は卓の裸の上半身を目にすると、ポッと頬を染めて横を向いた。ハッピの内側から携帯用お習字セットを取りだしてルリ大夫に質問する。

「ちょいと、あんたがあの子象の飼い主だね？　事情を聞かせてもらおうか」

「それが、いつものとおり見せ物小屋で玉乗りの芸を練習させていたところ、突然暴れだしたのです」

「原因は？」

ルリ大夫は途方に暮れて首をかしげる。

当のパオパオは暴れまくったことなどすっかり忘れて、卓の肩に灰白色の鼻をスリスリこすりつけて甘えている。

「おっ……オヤブーン！」

そこへ、息も絶えだえな声が聞こえてきて、3人は振りかえった。

ようやく散りはじめたやじ馬の間から、背の低いダルマみたいな体型の中年男がよろよ



ろと走ってくる。いなせな岡っ引き明日香の子分、**ちゃっかり六兵衛**だ。
「お……親分、ま、ま、待ってくださいよぉ」
「なんだいなんだい、だらしがないねぇ。これっぽっち走ったくらいで音をあげてるようじゃ、立派な岡っ引きにゃあなれないよ」
「す、す、すいません。も、もぉ息があがっちまって……」
岡っ引き見習いの六兵衛は、ぜいぜい弾む息を深呼吸をして静めようとする。明日香同様わらばん紙を取りだして筆の先をペロリと舐めた。
「六兵衛、おまえ、このルリ大夫と一緒に見せ物小屋へ戻って事情聴取をしておいで。子象が暴れだす直前にそばをうろついていた者をひとり残らず調べること。それと、餌の中になにか薬物が混じってたかもしれないから、一部を採取して誰かお医者に分析してもらっといで。いいね？」
「はぁ。それで親分は？」
明日香はきれいな切れ長の目の黒い瞳でチロッと卓を見あげた。
「ちょっとこいつにヤボ用があるんだよ」
「そうですか。それじゃ、結果は後ほど番屋でご説明しやしょう」
ルリ大夫はていねいに頭をさげてパオパオの耳をつかむ。

子象はよほど卓が気に入ったのか必死に抵抗していたが、ルリ大夫とちゃっかり六兵衛に連れられて渋々ノソノソ歩きだした。
「さてと、それじゃ、今日こそ卓さんの素姓を聞かせてもらいましょうか」
巨大な灰色のお尻が遠ざかっていくのをじっと見守っていた明日香は、くるりと後ろを振りかえる。
ところが卓の姿は神隠しにでもあったかのように、その場からすっかり消え失せていた。

☆

団子（だんご）屋の看板娘・千代はすっかり感心しきった顔で隣を歩く卓を見あげた。
明日香の追及をやじ馬にまぎれてまんまと逃れた遊び人は、通りすがりの若妻にプレゼントされた麻の着物を着流しにしている。
「卓さんって、遊び人なだけじゃなくて、象も手なずけちゃうのね。すごいなぁ」
「ははは。どうってことないさ」
美男の卓に魅（み）せられてしまうのは象だけではない。道ゆく若いお姉ちゃんや中年の色香をプンプン匂わせた女たちが、大股に歩いていく卓の姿をちらちら見ている。
「卓さんと一緒だと、あたしまで有名になった気分になっちゃう」
「そりゃあよかった。なぁお千代、どっかで夕飯（ゆうめし）でもおごってやろうか？」

「なに食べにいくの？」
「そうだな。うなぎなんかどうだ？」
「わーい、うなぎ、うなぎ♡　あたし、うなぎってだぁい好き！」
千代はニコニコ顔になって卓の横で小躍りをする。
「あんまりはしゃぐと転ぶぞ」
「だいじょうぶ。転びそうになったら卓さんにしがみついちゃうもーん」
ふたり並んでうなぎ屋の、のれんをくぐる。
「いらっしゃいませ。……おやまぁ、誰かと思ったら、卓さんじゃありませんか」
「やぁ、ご無沙汰（ぶさた）してたな」
美しい女将（おかみ）、**志乃**（しの）が微笑を浮かべて応対に出てくる。
志乃の年は29歳。ふっくらした瓜ざね顔に、やや細い目と赤い唇。第一印象はどことなく冷たくて寂しげに見えるが、微笑（ほほえ）みを浮かべると華やいだ雰囲気になる。胸と尻はかなり大きく、逆にウエストが細くくびれた魅惑的な身体つきをしている。
卓は千代をうながして奥の席に座らせた。壁に貼られた品書きを見あげる。
「なんにする？」
「ええと……千代はかば焼きとご飯。それに、茶碗蒸しとあんみつをつけてもいい？」

「いいとも。じゃ、それをふたりぶん。……あ、オレはあんみつはいらねぇや」
卓はそう言いながら席を立った。
「卓さん、どこいくの？」
「女将にちょっと話があるんだ。いいかな？」
「話？　それでは奥へどうぞ」
遊び人は女将の後につづいて店の奥に入っていく。
志乃は大きな尻を左右に振るようにして色あせた廊下を歩き、一番奥の襖(ふすま)を開けた。
「それで、話というのは……」
部屋に入ったとたん、卓は志乃を押し倒していた。
「あっ、なにをするんだい⁉」
「もちろん、今日こそしっぽりずっぽり犯(や)らせてもらうのさ」
「いやあっ！」
卓とうなぎ屋の女将志乃は畳の上で揉み合いになる。
志乃は上品な色合いの着物を着ていた。胸のあたりは大きく盛りあがり、荒々しい息に合わせて上下している。男の手から逃れようと四肢をもがくが、卓の力にはかないそうもない。

「ずっと前から目をつけていたんだぜ。ふたりきりになればこうなるってことは、おまえもわかってたんだろう？」

「やめて。ああーっ」

卓は着物の裾をはだけ、深紅の腰巻きを割り開き、白くムチムチした太腿に手のひらを滑らせる。すぐになにもつけていない女の秘部にぶつかった。恥毛をかきわけ、花弁の合わせ目に指を潜らせる。すると、ぬらっとした感触がまとわりついてきた。

「おい、こんなに濡れてるじゃねぇか。……ほら、見ろよ」

太腿を片方だけかかえあげ、淫蜜をたたえているヴァギナに指を入れて熱い襞をこすりあげ、残りの指でクリ×リスを挟みこむ。

「やめてぇ……。ひあぁっ！」

志乃はたまらず小さな声で叫んで背中をのけぞらせる。男の凌辱から逃れようと必死にもがいていたが、敏感な肉芽を嬲（なぶ）られると気持ちがよくなってきて、身体中から抵抗しようとする力が抜けていく。

卓は赤い腰巻きをすっかりはだけて、志乃の狭間（はざま）を覗きこんだ。

「ほほう。濡れてるだけじゃねぇや。ヒワイな花びらがぱっくり割れてるぜ。まるでオレのチ×ポを待ちわびてるようじゃねぇか」



「ちがうわ。お願い、もうやめてぇ」
卓は上ずった声をあげる志乃の着物の襟に両手をかけて、一気に左右に引き裂く。するると、志乃の豊満な白い乳房がドッドーンと剝きだしになった。
「うまそうじゃねぇか。よだれが出るぜ」
若後家キラーは、恐怖のためにツンと尖った乳首を指で挟むようにして巨乳を揉みしだく。もう片方の手で自分の着物の前をはだけて、白いふんどしの横から黒々と光る剛棒を引きずりだした。
卓の逸物は女の甘やかな体臭を吸って、みるみるうちに硬く太くなっていく。そそり立った極太の肉棒を目にしたとたん、志乃は思わず息を呑んだ。大きく張りだした亀頭はぬろぬろした先走りの液をにじませている。
「こいつが欲しいか?」
「ええ……」
卓の指技を味わい、立派なペニスを見せつけられた志乃は、とうとう色っぽく潤んだ瞳でおねだりをしてしまった。両手をさしのべて絶倫棒をつかもうとする。
「待てよ。息子を食うよりこいつが先だ」
卓が着物のふところから取りだしたのは、直径5センチ、長さ15センチくらいのガラス

いている。中に水のような液体が入っていた。

の筒だった。先端は小指くらいの太さになっていて、反対側にはピストン風の筒がついて

「それ、水鉄砲なの？」

「察しがいいな。図星だぜ」

志乃はギヤマンでできた薄緑色の水鉄砲を見ると、恐怖を感じて唇をわななかせる。

「たっぷり味わわせてやるぜ。覚悟しろよ」

「いやぁーっ！」

卓は本能的に四つん這いになって逃げようとする志乃の足首を素早くつかむと、無理やりもがき暴れる女の尻をかかえこんで、アヌスを指でくつろげた。

「いやぁ！　お願い、堪忍(かんにん)してぇ」

卓は子供のように泣きじゃくる志乃の菊門に水鉄砲の先端をプスッと突き立て、速攻でピストンを押して中の液体を直腸に流しこんだ。

「あひぃっ……。な、中に入ってくるぅ。……冷たっ……ひぃいいっ」

遊び人は悲鳴をあげる志乃をあお向けに転がして、その足首をつかみ、両脚をV字に開く形で高々と持ちあげる。その体勢のまま猫のように舌を突きだして秘裂をペロリペロリと舐めあげる。

志乃は狭間から湧き起こる快感にゾクゾクと裸身を震わせてあえぐ。
「いやぁ……も、もれちゃうぅ」
「そいつはまずいな。せっかく入れてやった液がもれないように、栓をしてやろう」
卓はまたもやふところに手を入れて、小さな布の袋を取りだす。口を逆さにして振ると、中から色とりどりのビー玉がコロコロ転がり落ちた。
「だめぇ。そ、そんなの入れないでぇえ」
志乃はなんとかして逃げようと身もだえる。しかし肉芽に舌を這わせた卓はそこを集中的にしゃぶりはじめる。唇に含んでちゅうちゅう吸いあげ、前歯に挟んで軽く嚙む。
敏感な突起を執拗に愛撫されて、志乃の全身から力が抜けたその隙を狙って、卓は菊門へビー玉を挿入した。
「あっああーっ」
「大きいの、小さいの、大きいの……と大きいの」
卓は大小様々なビー玉を7つ8つと志乃のお尻の穴に押しこんだ。最後に、目ん玉ほどある巨大なビー玉で栓をする。
「いやぁっ。お腹がゴロゴロするぅ。お願い、厠(かわや)へいかせて」
浣腸液をたっぷり注入された志乃は、下腹をひくつかせ、泣きそうな顔で逃れようとす

る。
けれど、卓は腕をつかんで志乃を布団の上にねじ伏せ、はち切れそうなほどに勃起した太幹の先を秘唇にあてがうと、一気にヴァギナへとねじこんでいく。
「ああ、いやっ。だめぇ、入れないでぇーっ」
淫らな液で溢れかえる女壺はヒクヒクうごめきながら巨根を受け入れる。
志乃は悲鳴をあげて卓の胸にしがみついた。極太のペニスを抽送されると、形のいい乳房がたっぽんたっぽん揺れ動く。
「ずいぶんといい具合に締めつけてくるじゃねぇか。商売もんのうなぎに調教でもしてもらったのか？」
「まさかぁ……っ、ひあぁーっ！」
志乃は髪を振り乱し、半開きにした唇の端からよだれをこぼしている。注入された浣腸液のせいで腸の動きが活発になり、今にも液化した大便が出てしまいそうだ。
「ひぃぃっ。た、卓さぁん」
「たくさんね。それじゃご要望にお答えするか」
双肩に紅椿を背負う遊び人は、心地よく締めつけてくる牝壺の中で硬い勃起を激しく抽送させる。女の狭間は剛直で突きあげられるたびに、ダプッジュプッと淫らな音をたてて

蜜をもらした。
「ひうっ……くっ、くぁああーっ」
絶頂まではもうすぐだ。
目もくらむような快感に貫かれて、志乃は唇をわななかせて息を継ぎ、裸身をぶるぶる震わせる。男の目前でウ×コをもらすまいとお尻に力を入れれば入れるほど、ヴァギナは肉棒をきつく締めつける。
「いいぞっ、すげぇ勢いで締めつけてきやがる」
「もうダメぇ。もれちゃううっ。ああーっ」
絶叫する志乃のアヌスから大きなビー玉がニュプッと姿を現わした。汚物がこびりついたギヤマンのオモチャはコロコローンと畳を転がって、壁に当たって跳ねかえる。
「あっ。あああ……」
四肢を畳に投げだして身もだえる志乃のウエストを片手でつかんだ卓は、丸いヒップを浮かせるようにして充分引きつけ、なおも燃えさかる女壺を犯しつづける。
ついに抑えのきかなくなった志乃は、アヌスからひとつ、ふたつとビー玉を放出する。括約筋(かつやくきん)が開いたりすぼまったりして大きさの異なるビー玉を吐きだすたびに、今まで一度も味わったことのない快感が肛門から全身へとひろがっていく。



「もっ、もうだめぇぇ……ひぃいぃーっ！」
卓は嬌声（きょうせい）をあげる志乃の口を片手で塞ぎ、最高潮に勃起したペニスを根元までぶちこんだまま白濁液を注ぎこんだ。エネルギーを放出した卓の下半身はジィンとしびれ、けだるい感覚が全身にひろがっていく。
「ひっ、ひぃいっ」
びちっという聞き慣れない音とともに、志乃はほんのちょっぴりウ×コをもらしてしまった。あたりには独特の芳香が漂いはじめる。
「ああっ、見ないでぇ」
志乃は羞恥で朱に染まる美貌を両手で覆ってすすり泣く。
「せっかくじゃねぇか。たっぷり見せてくれよ」
遊び人はうっすらと汗にまみれた女の裸身を後ろからかかえあげ、幼子におしっこをさせるような姿勢を取らせる。
「いやぁっ、お願い、もうやめてぇ」
震える声で哀願する志乃を、そのまま縁側まで運んでいく。
「さぁ、いい子だからウ×チをしようね」
庭に背を向けて縁側に座らされた志乃は、卓の手で肉芽とアヌスを同時にむにむにと揉

みしだかれる。

「ひぃぃーっ。でっ、出るぅぅ……」

いい加減、浣腸液がたっぷり腸全体にまわってしまった志乃は、感きわまった声をあげて思いきり脱糞しはじめた。

「ははは……。ずいぶんたっぷりと出てくるじゃねぇか」

卓は色っぽい女将の脱糞シーンをあますところなく観察した。泣きだした志乃を抱き寄せて首筋にキスをする。

「いいじゃねぇか。気にすんなって」

志乃は嗚咽（おえつ）にむせびつつ両手を卓の両肩にまわして肉厚の胸を抱きしめた。茜に燃える紅椿をかきむしるように指に力をこめ、大粒の涙で潤む瞳で男の顔をトロンと見つめる。

「卓さんったら、ひどい。どうしてお尻にあんなものを入れたの？」

「いいじゃねぇか。最後までイッたんだろう？」

「そうだけど、あんなことをしなくたって、充分気持ちがよかったのに……」

志乃は恥ずかしい姿を見られて顔中赤く染めながら、だいたんにも自分から手をのばして萎（な）えた肉茎をそっと指でなぞる。

「気に入ったんなら、舐めてくれよ」

女将はうなずいて身体を入れ替える。愛液にまみれた剛棒を両手でそっとつかみ、太幹を横咥えにして、唇を這わせていく。大きく口を開けてひときわ敏感な先割れを口に含み、頬をすぼませるようにして残り汁を吸いあげる。同時に、裏筋を指でなぞるように愛撫していく。

「舐めるだけにしろよ。あんまりいじるとふくらんじまうぜ」

「ふくらませちゃ、いけない？」

遊び人のペニスは志乃の愛撫にピクピク反応している。今にも勃起してしまいそうに感じて、卓は肉棒を撫でさする志乃の手を静かにつかんだ。

「悪いが、今日はこれくらいにしておこう」

「でもあんなことをしたんだから、もう一度くらい味わわせてくれてもいいでしょう？」

「見ただろ、オレには連れがいるんだ」

「そうなの……あの娘、初めて見るけど、卓さんとはいったいどういう関係なの？」

卓は太幹をふるって淫液を振り落としつつ、志乃に答える。

「千代か？　千代は同じ長屋に住んでる娘だ。あいつのオヤジから面倒を見てやってくれと頼まれてるんだよ」

「あら、父親がいるんなら、別に卓さんが面倒なんか見なくたって……」

「千代のオヤジは2年くらい前に卒中でポックリ逝っちまったんだ。死ぬ直前、オヤジは『なにかあったら千代を頼む』とオレに頼んで逝ったんだよ」
「そうなの」
事情を知った志乃はしんみりした表情になり、卓に背中を向けて汚れた狭間の始末をはじめる。柔らかな紙で秘部を拭い、別な着物をタンスから出す。
卓は黒光りする象並みの逸物に、しばらくの間おとなしくするよう言い聞かせて着物を着た。そして、志乃を背後から抱きしめてうなじに唇を押しつけた。
「あんっ、くすぐったい」
「じゃあな。またくるぜ」
卓は鼻唄混じりに廊下へ出ていく。
かば焼きをおいしそうにぱくついていた千代は、卓を見ると箸をとめてニコッと笑った。
「お話、すんだ？」
「ああ。うまいか？」
千代は「うんっ！」と返事をし、箸で小口に切りわけたうなぎとご飯を口へ運んだ。

第2章　菜美姫の甘い誘惑

美人岡っ引きの明日香は美しい眉を逆立て、おっかない表情で歩いていく。
「……ったく、遊び人の卓ときたら、いつもあたしの鼻先からまんまと姿をくらますんだから」
江戸っ子の間に『遊び人の卓さん』の名が浸透したのは数年前のことだ。
卓はどこからともなく現われて、当時人々を恐怖に震えあがらせていた殺人強盗**フレフレ団**を一網打尽（いちもうだじん）にするという大手柄を立てた。
「咲き誇る紅椿の彫り物を双肩に背負う粋でいなせないい男、遊び人の卓さんは団子屋の看板娘・千代が住むナメクジ長屋に住んでいる」
というのが一般的な噂だったが、卓はほとんど部屋にはいない。

明日香は父親のあとを継いで岡っ引きになった。以来ずっと、『やんごとなきお人』と噂されている卓の正体を突きとめたいと思っている。

ところが、事件現場で偶然卓に遭遇しても、いざゆっくり膝を交えて話を聞こうとすると今日のように逃げられてしまうのだ。

「あーしゃくにさわる！　こうなりゃヤケ酒……いや、ちょっとお待ち」

立ちどまった明日香の目前には、異様な匂いを放つものがデーンと落ちていた。往来のど真ん中にあるのは子象パオパオが残した巨大な糞だ。

明日香はほっそりした指で鼻をつまんで近づいていく。

「しまった。こいつの始末は六兵衛に頼めばよかった」

いったいどうしたものかと悩んでいるうちに、糞の中に妙なものが混じっているのを見つけた。

「なんだい、こりゃ？」

道端に落ちていた木の切れっ端を拾ってきて、茶色い塊の中からかすかに飛びだしているヒモのようなものに引っかける。するとゴロッとした異物が出てきた。

「証拠物件かもしれないわね」

プライドの高い明日香は人目を気にして、急いで民家の軒下まで突っ走った。

一番近い井戸まで持っていき、ガンガン水を流して表面にこびりついていた子象の糞を洗い落とす。匂いが消えるまで洗ってから、ようやく手のひらにじかに乗せてみた。

それは直径3センチほどの白い円筒だった。長さは約15センチで全体的に丸みを帯びている。一方の端からヒモが出ていた。

「まさかこれは……」

「おや、岡っ引きさん。こんなところで事件ですか?」

突然背後で声がして、明日香は身を強ばらせる。振り向くと、ダイコンをかかえた町の主婦が不思議そうな顔で覗きこんでいた。

明日香は白い円筒を後ろ手に隠してソロソロと後ずさった。

「いえ、ちょっとね。ほほほほ……。それじゃあ、また」

素早くきびすを返して足早に駆けだした明日香は、大通りを横切り、手近な番屋に飛びこむ。

番屋の中では白髪の老人が文机の前でなにやら書き物をしていた。

「お疲れさま、奥の部屋をちょぃと借して欲しいんだけど」

「明日香さんか、奥から2番目のを使いなせぇ」

老人から鍵を受け取り、番屋の奥へ歩を進める。取り調べ室の木戸を閉めて鍵をかけた。

室内は畳敷で、傷だらけの木の机を挟んで両側に古びた座布団が置かれている。
明日香はぞうりを脱いで畳にあがった。耳を澄ませてみたが、両隣の部屋から物音はまったく聞こえてこない。窓はないので、完全に密室と言ってよかった。
例によってお習字セットを取りだし、さっそく証拠物件を調べてメモをしていく。
「長さは手のひらくらい。円筒状で子象パオパオが残留せし糞の中から……」
そこまで書いて、明日香は眉をひそめた。
「そうか、糞の中にあったということは、証拠物件は子象が餌と一緒に食べたか、あるいは菊門から挿入されたと考えるしかないわね。となると、やっぱり……」
明日香の色白の頬に、さあっと血の気が射してくる。
「やっぱりこれは**徳×ご禁制の淫乱誘発振動機!?**」
声に出して言った瞬間、明日香の心臓は驚きで喉から飛びだしてしまいそうになった。
江×幕府が法に定めし徳×ご禁制の品は3つある。殺傷能力のある舶来の短筒と陰毛陰部露出本、そして最後が淫乱誘発振動機だった。
明日香は、短筒と露出本は岡っ引き養成大学時代に資料として目にしたことがあったが、舶来の淫乱誘発振動機の実物を見るのはこれが初めてのことだ。
美貌の岡っ引きは目の前の白い円筒をじっと見つめてゴクッと息を呑む。目の前のもの

が淫乱誘発振動機すなわちバイブレーターであると知ると、うかつに触れてはまずいような気がしてくる。だが、幸か不幸か、探究心旺盛な性格のためか、いても立ってもいられなくなり、気丈にも唇をキュッと結んで両手をのばした。

「こいつのいったいどこが『淫乱』を誘発するのだ？」

まだ生娘の明日香は文字としての『淫乱』の意味は知っているが、実際にどういうふうになるのが『淫乱』なのかはまだ知らずにいる。バイブをそっと手に取って、表面を指で撫でてみたり、ヒモのつけ根を観察したり。

「ふぅ〜む。子象が突然暴れだした原因は、何者かにこの振動機を菊門に入れられたせいかもしれないな。……しかし、養成大学の先生は『淫乱誘発振動機はやみつきになるほどの快楽を人間の身体にもたらす』とおっしゃっていたけど……」

ふとしたはずみでヒモが引っぱられてしまい、バイブはスイッチが入って明日香の指の中でうねうねと動きはじめた。

「ああっ！」

明日香はとっさにバイブを投げだした。白い円筒は正座した彼女の両脚のつけ根にまっすぐ落ちてしまい、微妙な振動をともないながら淫らにうごめく。

「どうしよう!?　誰か……」

徳×ご禁制の淫乱誘発振動機が発する小刻みなウエーブは、明日香の恥丘を刺激する。
「どうする、明日香？　この期(ご)におよんで『淫乱』というものがどういうものなのかを体験してみる？　それとも……。ああ、ダメだわ。とめようとしても、あたしの身体が勝手に誘発されていく……」
明日香は両目をギュッとつぶってバイブをつかんだ。短い着物の裾をはだけて、下着をつけていない恥丘に円筒の先をそっと押しつけてみる。
「んんっ……」
淫らな振動を受けて、明日香の身体がビクッと跳ねる。正座していられなくなって、ゆらりとその場に身体を横たえた。
スリーサイズは上から93・58・90。Cカップのバストは生娘(きむすめ)らしく形よく尖り、小さな乳首はきれいなピンクに輝いている。
「んあぁっ。こ、こんなの……」
淫乱誘発振動機の動きはたまらなく刺激的だった。
明日香はすんなりのびた両脚を少しだけ開いて、バイブの先をクレヴァスの奥へ滑らせる。肉芽をそっと押すように嬲(なぶ)るが、それだけでは物足りなくなって、本能のままに帯をほどき、着物の襟もとをはだけける。餅のように白くて柔らかな乳房を剝きだしにして、自

ら片手で揉みあげていた。
敏感な乳首は指技に応じてぷくっと硬くしこってくる。指でつまんで転がすと肉芽の芯がジンジン疼いて心地よい。
「あっ、んんんっ……どうして、こんな……」
いくら本能でしたこととはいえ、自らの手で自分自身を半裸に剝いてご禁制の品を試すというのは、あまりにも恥ずかしすぎる。
明日香はいつの間にか両目をつぶって身もだえていた。
「だめよ。もうやめて……。ううん、もっとしたいの。ああっ……だめだわ」
大きな声がもれないよう肉感的な唇を軽く嚙み、切れ長の目の端に羞恥の涙を浮かべて自分の狭間を覗きこむ。オナニーをするのは生まれて初めてだったが、頭のいい明日香はどこが一番感じるかをすぐに悟った。2本の指で秘唇をひろげて、丸くなった振動機の先端を蜜壺の入り口に押しつける。
「んひぃっ」
割りひろげた秘唇の間にバイブを挟みこむと、陰口とクリ×リスが同時に刺激されて、魂がすっぽりと抜けていくような快感がこみあげてくる。肉の張ったヒップを浮かせ、一心不乱にくねらせる。乳首は硬くしこり、くじられた狭間からはぬめりを帯びた透明な愛



液がじわっとにじみでる。

「んんーっ！」

美麗な岡っ引き、明日香は生まれて初めて絶頂に達して全身を強ばらせた。ビクビクビクッとつま先を踊らせたあとで、ぐったり畳にもたれこみ、はぁはぁと短い息を繰りかえす。

「こ……これが『淫乱』なのね。こんなのがやみつきになるなんて、信じられないわ」

Cカップの乳房を上下させて深呼吸をしながらつぶやいた明日香は、畳の上に放りだしたバイブを見て、羞恥に頬を真っ赤に染める。白い円筒の表面には、明日香の蜜液がうっすらとついていた。

明日香は脱ぎ散らかした着物を急いで身につけて、淫乱誘発振動機を手ぬぐいで包んだ。まじめな顔に戻り、机の前に向かってわらばん紙に筆を走らせる。

「『子象パオパオが暴れだした原因は徳×ご禁制のひとつ、淫乱誘発振動機によるものと推察される』……はふうっ。調書と一緒にこの振動機を提出したら、お奉行さまはこれをどうするのかしら？」

明日香はため息をついて白い円筒をじっと見つめた。

「もう一度使ってみたいわ。ううん、ダメよ。やみつきになってしまったら困るもの」

うら若き岡っ引きは、ますます真っ赤に頬を染めてイヤイヤとかぶりを振った。

☆

うなぎ屋を出た卓と千代は、仲よく並んで夜道を歩いていく。
まだ15歳になったばかりの千代は、背の高い遊び人をちろっと見あげて問いかけた。
「ねぇ、卓さん、あの店の女将さん、あたしたちが店にきた時と帰る時じゃ、着物がちがってたけど、なにかあったのかなぁ？」
ウブな千代はセックスにかかる時間や事後の女の色っぽさにはトンとうとい。それでも卓とうなぎ屋の女将志乃の間になにかあったのではないかと疑っている。
「ん？　そうか、そりゃよかった」
卓は大きくのびをして適当な返事を返す。
「えーっ、どうしてよかったの？　千代、わけがわかんないよ」
「きっとおまえのためにわざわざ着替えをしてくれたんだろう。よかったじゃないか」
「そうかなぁ？」
千代は正直に答えようとしない卓にため息をついた。
「んもう！　卓さんってば、隠しごとが多すぎるんだから」
「ん？　なにか言ったか」

「いーえ、かば焼き、ごちそうさまでしたって言っただけ！」
千代は怒ったような口調でそれだけ言ってパタパタと駆けだす。ナメクジ長屋がある路地にさしかかると、ふとその脚をとめて卓を振りかえった。
「卓さぁん。卓さんとこに明かりがついてるよぉ。お客さんかしら？」
「客だって？」
卓は眉をひそめてその場に立ちどまった。左手を顎に当て、首をひねって考えこむが、思い当たる節はない。
「なぁ、お千代、悪いが中にいるのがどんなやつか、ちょっと見てきてくれねぇか」
「えーっ、あたしが見にいくの？　もし刺客(しかく)とか借金取りだったらどうするの？　あたし、いきなりズブリと刺されちゃったりするの、絶対イヤだよう」
「だいじょうぶだって。その時はオレが助けてやるから」
「本当かなぁ？」
「今までオレがおまえにウソついたことがあるか？」
「ん～、ないけど……。しょうがないなぁ、もう」
千代はかかえていた花を卓の胸に押しつけ、度胸を決めてスタスタ歩いていく。
ナメクジ長屋の奥から2番目が卓の住まいだ。

団子屋の看板娘はうっすらと明かりのもれる障子戸の前で立ちどまり、ごくっと息を呑む。卓に向かって無言で「いくよ」と唇を動かし、障子をガラッと引き開けた。
「あっ！　な、なによ、あんた⁉」
卓は血相変えて叫ぶ千代の脇へ素早く走る。少女の身体をかばうように横へ押しのけて部屋の中を覗きこんだ。
薄汚い畳の上……いや、その上にはなぜか金糸銀糸を織りこんだジュウタンが敷き詰められている。そしてその上に美少女がひとり、ぺたんと行儀よく正座していた。少女は卓の顔を見ると、愛らしい微笑みを浮かべて三つ指をついた。
「卓さま、お帰りなさいませ」
卓は千代とさほど年の変わらぬ少女の顔を見てギョッとなる。
「菜美ひ……」
「しぃーっ！　声が高すぎるぞよ」
「卓さぁん、この人だあれ？」
「え？　ああ。それがその……」
「わらわ……いえ、わたくしは卓さまのいいなずけで菜美と申しますの。あなたはどなた様ですの？」



黙って聞いていた千代は、大きく口を開けて目の前の少女をまじまじと見つめた。
菜美と名乗った少女はまるでおとぎ草子に出てくる姫君のようにとても美しい。
黒くて大きいつぶらな瞳。カールした長いまつ毛。彫りが深く上品な面立ちで、ふっくらした頬は血色がよくきれいな桜色に輝いている。艶やかな黒髪は町娘風に結いあげられていた。毎日ひとりで団子屋を切り盛りしている千代の両手は水で荒れてガサガサだったが、菜美の両手は傷ひとつなく白魚のように美しい。のびやかな四肢には真新しい花柄の着物をまとっている。
「わかりましたわ。卓さまが夜道であなたを見つけて、途中まで送ってきてさしあげたのですね。卓さまはどんなかたにもご親切ですもの」
菜美はポカンとした表情のまま戸口に突っ立っている千代を見ると、自分勝手に想像して言った。そして、優美な動きで立ちあがる。
「卓さま、お疲れになったでしょう。ご飯の用意ができておりますわ。……どこのどなたか存じませぬが、ここからは気をつけてお帰りくださいましね。さて、卓さま、そろそろ戸締まりをいたしませぬこと？」
「ん？……いや、その……。なんだって菜美ひ……」
「卓さま、それ以上おっしゃらないで。事情はゆっくりご説明しますから」

「卓さん！　この人、本当に卓さんのいいなずけなの？　この人と結婚しちゃうの？　ねぇ、ちゃんと答えてよ、いいなずけなんていないんでしょ？」
「わたくしは卓さまのいいなずけです。たとえ天と地がひっくり返ろうとも、この事実は何ものにも変えられませんわ」
「そんなのあたしが許さない！」
千代と菜美は怒りで顔を真っ赤に染めながら、互いににらみ合う。うかうかしていると取っ組み合いのケンカがはじまりそうだ。
美少女に挟まれてタジタジになっていた卓は、慌ててふたりの間に割って入った。
「待てって！　オレが誰と結婚するかは、このオレが決めることだ」
「今まで黙ってたけど、千代ね、ずっと卓さんが好きだったのよ。千代をお嫁さんにするってこの人に言ってやってよ！」
「冗談は顔だけになさいな。あなたにはこのようなことはできませぬでしょう？」
菜美は白い手をすいとのばして卓の肩をつかんだ。肉厚の胸にしなだれかかるようにして遊び人の唇にキスをする。
女の誘惑に弱い卓は、なんの考えもなくムラムラきてしまった。菜美の華奢(きゃしゃ)なウエストを両手で支えて、唇の合わせ目を這いまわる乙女の舌を口中へ招き入れる。

文字どおり目と鼻の先でディープキスを見せつけられ、千代はがく然となった。キスすら知らない処女の身体は熱病にかかったように震えてくる。
「やっ……いやぁっ！　卓さん、不潔ぅうっ！」
千代は長屋中に響くほどの大声で叫ぶと、外へ飛びだしていった。
「あっ、おい、千代っ！」
「よいではありませぬか。卓さまがお気に留めるほどの人物ではありませぬわ」
卓はうっとりした表情で自分を見つめる菜美の腕を、乱暴に振りほどいた。上品な美少女の身体を軽く突き飛ばすように押しのけ、怒った顔で、黒くつぶらな瞳を真っ正面から見降ろして唇を開く。
「いいか、よく聞けよ。貧富の差はあれど、人間は誰でも平等なんだ。誰かがその人間の価値を決めるようなもんじゃねぇんだよ！」
「卓さま……」
いつになく真剣な卓の表情を目にして、菜美はシュンと肩を落とす。
「ごめんなさい。菜美がぶしつけでした」
「わかりゃあいいんだよ。もう気にすんな」
卓は泣きべそをかく菜美の頭を軽く叩いた。そして戸口につっぱり棒をかけて部屋にあ

がりこむ。その口があんぐりと開いて、目を皿のようにして自分の住まいを見まわした。
「なんだ、こりゃ?」
6畳1間の室内は今朝出た時とはまったく趣が異なっている。
古い畳を隠すように敷き詰められたジュウタンの手前にきれいなフキンをかけたちゃぶ台が置かれていて、その向こう側に純白の羽毛布団が1組敷かれていた。薄汚れた壁には絹でできた扇が何枚か飾られ、傷だらけのタンスの上に清水焼の壺が置かれている。どれをどう見ても高価な品ばかりで、部屋の四隅にはロウソクを入れた大きな行燈があった。
「じいに頼んで城からこっそり運ばせましたの。どれも、ずっと使われずにお蔵にしまいこまれていたものばかりですのよ。卓さま、お食事は?」
「いや、食べてきたから……」
「まぁ、そうですの。それでは、失礼してわたくしもちょうだいいたしますわね。菜美、卓さまとご一緒にいただこうと思って、ずっと待っておりましたのよ。もうお腹がすいて倒れてしまいそうですの」
菜美はきちんと正座をしてちゃぶ台の上のフキンを取る。その下から大きな尾頭つきの鯛がドーンと現われた。
呆然と室内を見まわしていた卓は、菜美の向かい側にどっかとあぐらをかいて座りこむ。

菜美が小さな唇に厚焼き卵を運ぶさまを見つめながら、眉をしかめて問いかけた。
「侍女はどこにいるんだ？」
「侍女でしたら今日はもう城へ帰してしまいましたわ。わたくし、今宵は卓さまとふたりきりになりたかったんですもの」
遊び人はちゃぶ台に手をのばし、タクアンをひと切れ口に放りこんで問いかえす。
「なんで？」
「それはおわかりでしょう？　菜美は卓さまのもとへお嫁にまいったのですもの」
「なっ……げっ、げほげほげほっ！　なんだってぇ？」
卓は噛みかけのタクアンを喉に詰まらせてしまい、目を白黒させて聞きかえす。
「ですから、菜美は卓さまのお嫁に……」
菜美はポッと頬を染め、もじもじしながらジュウタンの上に『の』の字を書く。
「冗談言っちゃいけねぇや。オレは、後家がよろめき泣く子は笑う、遊び人の卓さんだぜ。徳×の菜美姫さまがオレなんぞのところへ嫁にこられるわけがねぇだろうが」
なんと菜美は徳×家直系の姫君なのである。
「冗談をおよしになるのは卓さまのほうですわ。卓さま……いえ、卓之進さまは本来ならば白鳥藩の藩主となられるおかた……」

卓は遊び人を気取ってはいるが、実は江戸っ子の間でも格別有名な由緒正しき家柄に生まれ育ったやんごとなき人物なのである。
「そんな戯言(ざれごと)はオレの知ったこっちゃねぇや」
卓はムッとした顔で言葉を返し、ゴロリとその場に横になる。
菜美は涙ぐんで箸置きに箸を戻した。長いまつ毛にふちどられた双眼を伏せ、愛らしい唇を開く。
「卓さま、わたくし、理由(わけ)あって城を捨ててまいりましたの」
「捨てた？」
「ええ。……菜美はもう二度と城へは戻りませぬ。どうぞお願いですから菜美を卓さまのおそばに置いてくださいませ」
菜美は、むくりと起きあがった卓に向かって、三つ指をついて深々と頭をさげた。
「卓さま、ふつつか者ではございますが、以後どうぞよろしゅうお願い申しあげまする」
「よせやい。くすぐったいじゃねぇか」
卓は真剣な表情の菜美を見ていられなくなり、冗談っぽくごまかして立ちあがった。
「それにしても、なんでまた……いや、ぐちぐち言うのは明日にしよう。さあ、飯を食っちまいな。ほら、半分も食べてねぇだろ」

菜美はこくっとうなずき、箸を手に取る。けれどすぐに気持ちが揺らいで卓の顔をさぐるようにじっと見た。
「卓さま、先刻のおなごはいったい何者なのです？」
「千代か？　お千代はオレの妹みたいなもんさ。菜美と同い年だが、父親を亡くしてからはたったひとりで団子屋を切り盛りしててな。ガキのくせにしっかりした娘なんだぜ」
「そうですの」
菜美は女の本能で千代を恋のライバルだと察知していた。
「さぁーて、そろそろ寝るとするか。……おい、オレのせんべい布団はどうした？」
「さあ？　この部屋のことはすべて侍女のお光が取りしきっておりましたけれど」
「つーことは、捨てられちまったのかな？　こりゃまいったぜ」
卓はつぶやきながら純白の絹でできた羽毛布団のほうへにじり寄っていく。
「菜美はかまいませんわ。……ねぇ卓さま、今宵のお夜とぎはおまかせくださいね」
ついばむ程度の食事を終えてしまった菜美は、ニコッと笑ってみせる。
「まかせろって言われてもなぁ」
「卓さま、ご安心くださいませ。わたくし、必要なことは教育官からすべて教わってきておりますから。……あれっ、卓さま、どこへいかれるのです？」

「隣のお梅ババアんトコから布団を1組借りてくるんだ」
「いかないで！」
座敷から出ていこうとする卓の背中に菜美がしがみつく。
「菜美、怖いんです。お城を出たのは久しぶりのことで……。お願いですからどこへもいかないで」
「しかしなぁ……」
卓はほとほと困りきった表情で泣きそうな顔の美少女を見つめる。
「お布団は大きいですもの。卓さまとわらわで仲よくご同衾できますでしょう。ね？」
小股の切れあがったいい女の桃尻と美少女の「ね？」にはまったく弱い卓だ。ともすれば笑いで緩んでしまいそうな頬を平手でピシャッと叩き、帯に手をかける。
「しょうがねぇなぁ。今夜だけだぞ。……さてと、行燈は消したほうがいいな」
「そうですわね」
卓は行燈をひとつだけ残して全部消した。菜美に背中を向けて着物をすっかり脱ぎ捨て、木綿のふんどし1丁の姿になって掛け布団をまくる。さらさらときぬずれの音をたてている美しい姫にはかまわず、柔らかな布団の端にゴロリと横たわった。
すぐにスピースピーと寝息が聞こえはじめる。しかし、卓は完全に眠っているわけでは

ない。全身の神経を使って、菜美の気配をそれとなくうかがっている。
薄い絹の夜着に着替えた菜美は、たたんだ着物を枕もとにきちんと並べて布団の前に正座をする。卓の両肩で咲き乱れる紅椿を見ると、胸を押さえ、次には涙ぐんだ。
(お世継ぎを母親ちがいの弟君に譲るために、こんなことまでなさって……)
卓が白鳥藩を捨てて遊び人に身をやつした理由を知っている菜美は、心の中でつぶやいた。こぼれ落ちそうな涙をすすりあげて、可憐な唇を開く。
「卓さま」
しかし卓は眠ったふりをつづけていて、返事をしようとしない。
菜美は心を静めて、枕もとのフロシキ包みを手に取る。中から小さなビンを取りだして、その中身を燃えているロウソクの芯にたらす。
ほどなく、甘くまったりした香が室内に充満する。
黙って男の背中を見つめていた菜美は、卓の肩にそっと手をかけて軽く揺さぶった。
「卓さま」
「……ん? どうした」
卓は振り向こうとした。けれど、なぜか体が動かせない。両目は開き、意識もはっきりしているのに、全身の筋肉が弛緩していて思うようにならない。

「妙だな？」
「ご安心くださいませ。わたくし、お光にもらった淫夢香を焚いてみましたの」
「淫夢香？　なんだそりゃ」
「人間の体の動きを封じ、神経を敏感にさせる薬ですの。いま使用しているのは殿方専用のものですから、卓さまはしばらくの間、身動きができないはずですわ」
「しばらくって、どれくらいなんだ？」
「よくわかりませんの。でも、そんなに長い間ではないはずですわ」
菜美は小さな声で「よいしょ」と言いながら卓の体をあお向けに転がした。視線があうと、白い頬がみるみるうちに朱色に染まる。慌てて目をそらした。
「なにをする気だ？」
「あのう、教育官は『それ』の名称を教えてくれなかったのですけれど……」
小声でポソポソと答える菜美の心の臓は、うっかり喉から飛びだしてしまいそうなほどドッキンドッキン高鳴っている。
「卓さま、菜美は一生懸命頑張りますから、どうぞごらんになっていてくださいね」
透けてしまいそうなほど薄い夜着姿の菜美は、震えだしそうな手をギュッと握りしめてから、真っ赤な顔をして卓の下半身を覆うふんどしを脱がそうとする。

「おい、ちょっと待て」
「待てませんわ。だって、これを取ってしまわないと、できないんですもの」
ひょっとしてひょっとすると、という卓の予想はズバリ的中した。
菜美姫は卓の下肢をひろげて四つん這いの姿勢になり、剝きだしになったペニスをなるべく直視しないようにして、両手の中に包みこむ。
「菜美、それ以上触るんじゃない」
「あら。まだはじめてもいませんのよ」
「言っとくが、菜美がこれからなにをしようとしているのか、オレにはすっかりお見とおしなんだぜ。こんなことは天下の菜美姫がするようなことじゃあない……」
「まぁっ！　それでは、菜美がもしやりかたを途中で忘れてしまっても、卓さまに教えていただけますわね」
菜美はホッと緊張を解いて、まだふにゃふにゃのペニスを素早く唇に含んでしまう。舌の先を尖らせて敏感な亀頭の先割れをチロチロと愛撫しはじめた。
「おいおいおいっ！」
淫夢香のせいで身動きのできない卓は、声をあげて制止しようとするが、菜美はかまわずフェラチオをつづける。太魔羅の先端の敏感な粘膜を舌でツンツンつっついたり、尿道



口をこじ開けるようにやさしくくじったり。

「むううっ……」

卓の極太ペニスを、むずがゆいような快感が走り抜ける。高貴な生まれの菜美姫に自分のものをしゃぶらせている、そう意識しただけで、絶倫棒はたちまち硬くそそり勃ってくる。

「おい、それ以上やるな」

菜美は上ずった声をあげる卓に質問した。

「ほら、ごらんになって。かなり硬くなってまいりましたわ。菜美がもう少し頑張れば、先のほうまで全部硬くなりますわよね？」

「そりゃそうだけど……。いや、頼むからもうそれ以上はやるな」

菜美は半勃ちになった太竿を両手でそっと支え、ぬるぬるした先走りの液を指ですくって亀頭になすりつける。かと思うと裏筋を舌で舐めあげて、同時に玉袋を片手でやわやわ揉みあげる。

淫夢香の助けもあって、黒光りする卓の剛棒は普段以上に大きく硬く勃起してしまった。

菜美がほっそりした両手を離しても、ヘソまで反りかえった肉茎はビンと直角を保って屹立している。

「ああ、よかった。これで次に進めますわね」

卓は自分の意志とは裏腹に反応してしまった元気棒を見て、ため息をもらした。

「次はなにをする気なんだ？」

すると菜美は顔だけじゃなく首筋まで真っ赤に染めて視線をそらす。今まで一生懸命卓の逸物に触っていたくせに、それが大きくなったとたん、気絶しそうなほどの羞恥が心の奥から湧き起こってきた。

「それが、菜美は硬くすることしか知りませんの。教育官は『次にすることを学ぶのは、わたくしのお輿入れが正式に決まってからでも遅くない』と申しておりましたので」

菜美は卓の両脚の間に正座したまま、こわばりへちらちら視線を向ける。

「あのう、卓さま、まだ淫夢香はきいていますかしら？」

卓は菜美に聞かれて両手を動かしてみた。いつの間にか体力は完全に回復している。

「よっ」とかけ声をかけて起きあがる。股間の極太棒をおっ勃てたままで夜着に包まれた姫の肩をつかんだ。

「菜美、こうなったからには、覚悟はできてるんだろうな？」

お姫さまは潤んだ黒い瞳で卓を見かえしつつ、「ええ」とうなずく。

「あとは卓さまのお好きなようになさって」

卓は自分をじっと見つめている少女の身体を布団の上にそっと押し倒し、小さな丸い膝を割って白い太腿に手を這わせる。
「あっ……あぁ」
卓の指腹で内股の柔らかな部分をなぞられると、菜美はあえぐように吐息をもらした。身体中のありとあらゆる場所が敏感になって、男がもたらす刺激に反応していく。
「菜美には好きな男はいないのか？」
「卓さま、菜美が小さな頃から卓さまをお慕いしていたことはご存じでしょう？」
「そうだったかな？」
卓は浅黒い手で美少女の夜着をそっと脱がせる。お椀を伏せたような大きな乳房が剝きだしになった。サイズは上から85・58・85。ウエストが細くくびれて均整が取れた抜群のプロポーションだ。
遊び人は目の前に横たわる汚れ（けが）を知らぬ処女の秘部をたっぷりと見まわす。赤子の頭髪のように淡く柔らかな陰毛。女らしくふっくらと盛りあがった恥丘。
「ああ、恥ずかしい」
まだ生娘の菜美は大切なところを男に見つめられ、羞恥のあまり双眼を閉じてしまう。軽く握りしめた指は小刻みに震えている。

菜美姫の狭間(はざま)はしっとりと湿り気を帯びていた。卓が小さな桜色の花びらを左右にひろげると、小指の先ほどの陰核が剝きだしになる。

生娘のお姫さまは肉芽に触れられると、ビクッと太腿を震わせた。

「菜美はマ×コも可愛いな。たっぷり可愛がってやるから覚悟しろよ」

「はい」

『若後家殺し』の異名を持つ遊び人は、菜美姫の陰唇を指でひろげて舌を這わせる。クリ×リスから尿道口、秘孔、そして菊門までを、猫が毛づくろいをするようにていねいに舐めあげる。鮮やかな赤みがかったピンク色をした秘裂は、かすかに塩からい液をにじませている。

「あっ……卓さまぁ」

菜美は誰にも触らせたことのない場所を舌で舐められ、むずがゆいような感触に裸身をくねらせる。教育官には「主導権は殿方にお渡しすること」と言われていたが、卓の愛撫に反応して身もだえていいのかどうかわからず、ついに甘い声を放つ。

「あはぁっ。卓さまぁ、菜美のいけないところは叱ってねぇ。はっ、はぁあ〜ん」

「菜美、こんなふうに自分でオッパイを揉んでごらん」

卓は手本を見せるように片手で菜美の巨乳を揉みしだく。



お姫さまの乳房は弾力があり、ちょっと転がしただけで乳首が硬くしこってくる。
素直な菜美は両手で自分の乳房を揉んでみた。
「あっ……はあぁっ。卓さまぁ、なんだかとっても気持ちがいいの」
「そりゃあよかったな」
卓は、ようやく誘い水でぬるぬるしてきた菜美の秘孔に人差し指を突き立てた。
「むううっ。生娘だけあって、1本入れるのがやっとだな」
「あひっ！」
生まれて初めてヴァギナに異物を受け入れた菜美は、奇妙な感覚に大きな声をあげた。
包皮を剝いて露出させたクリ×リスを吸われると、下腹全体がジィンと重くしびれてくる。
「たっ、卓さまぁ、そんなに吸わないでぇ。菜美、おかしくなってしまうのぉ」
けれど卓は執拗に姫の肉芽を吸いあげる。処女膜を爪で傷つけないように注意しながら、指をゆっくりと動かした。
やがて、狭あいな花奥に出し入れしていた人差し指に淫らな液がぬちょぬちょとまとわりついてきた。
「卓さまぁ、菜美、オモラシしたんじゃないんですぅ。それなのに……。ふぁあん、液がもれてくるのぉ」

菜美は陰唇の奥から溢れてくる液体の音を気にして、泣きそうになる。
「安心しろ。これは愛液ってやつで、菜美が傷つかないように身体の奥から勝手に出てくるものなんだ」
「本当？　でも、傷ってどこにつくの？　お夜とぎをすると必ず傷がつくものなの？」
「ん〜、まぁな」
遊び人の卓は心の中で葛藤した。
パンパンに勃起した太幹を熱く火照る姫のヴァギナに入れたい。でも、ここで入れては姫の身体に傷がつく。入れたい、でもできない。できない、でも入れたい……。
「菜美に傷はつけねぇ。安心しな」
卓は再び美少女の花芯を吸いあげながら、秘唇全体を揉みあげる。
「あっ、それ……いやぁあん。あっ、はぁあ〜っ」
菜美は敷布団を両手でつかんで背中をのけぞらせる。半円を描いてカーブする眉はしかめられ、可憐な唇はあえぐように半開きになっている。形よく盛りあがった乳房の上でツンと尖った乳首がフルフルと震えている。
「もう堪忍っ……してぇえーっ！」
小刻みに身体をけいれんさせると同時に大きな声をあげて、菜美は生まれて初めてのエ

クスタシーを迎えた。ついで神々しく感じられるほどの美しい裸身はクタッと弛緩し、ピクリとも動かなくなる。
「あーっ、くそっ。もー、入れたくって頭がおかしくなりそうだぜ」
卓は唇を嚙んで、気絶している菜美の前にしゃがみこむと、両方の太腿をかかえこんで、カチンカチンになった剛直の先を膣口に押しつける。けれど、どうしても挿入できずに、そのままの姿勢で硬直してしまった。
「ダメだ！　オレには菜美は犯せねぇ。あ〜あ、マ×コの襞が自分からオレのチ×ポを招き入れてくれりゃあ、楽だってーのに」
若後家キラーは菜美のヒップを布団の上にそっと降ろした。こらえにこらえてブルブルしている巨砲をつかみ、姫の右脚を曲げて太腿とふくらはぎの間に挟んだ。柔らかな肉の狭間で極太魔羅を数回抽送させると、勃起はあっと言う間に絶頂に達した。
「ったく、罪つくりなお姫さまだぜ」
枕もとに置かれていた薄紙を取って後始末をした卓は、脱ぎちらかした着物をはおって裏庭に面した障子を開けた。
「小雪？」
「ニャア」



裏庭の片隅に生えている柳の木陰にＰＯＭ！　と白煙があがって、あたりが一瞬明るくなる。
「ここですわ」
声とともに絶世の美女がすうっと姿を現わした。
化け猫の小雪は人間に化けると身長１６３センチほどの美女になる。上から95・63・88の極上ボディで、年令は22歳くらい。卵形の顔に涼しげな目もと、微笑をたたえた口もとにポツッと浮かんだホクロがそこはかとなく色っぽい。
「城でなにかひと悶着あったようだ。すまないが調べてきてくれるか？」
「承知しましたわ」
黒装束を身にまとった小雪は、ナイスバディを踊らせて隣の塀へと飛び移り、夜の町へと姿を消していった。

第3章　女忍者お鈴を嬲れ！

ミシッという乾いた音を卓は聞き逃さなかった。

薄目を開けても、真夜中の室内はまっ暗でなにも見えない。そのまま眠ったふりをつづけていると、裏庭に面した障子（しょうじ）が静かに開きはじめる。ひんやりした夜風が忍びこみ、狸（たぬき）寝入りをする卓の頰をすうっと舐めあげる。

ナメクジ長屋の奥から2番目。卓の部屋に賊（ぞく）が数人侵入していた。

卓は緊張に頰を強張らせて賊の気配をうかがった。

賊たちは夜目が利（き）くらしく、漆黒（しっこく）の闇の中を平然と歩いて卓の頭上にさしかかる。つづいてかすかな刺激臭が室内に漂う。

「野郎！」

卓は叫びざま体にかかっていた羽毛入りの掛け布団を勢いよく跳ねのける。ハッと息を呑む賊をめがけて布団を投げつけ、その上から体当たりをかませる。
黒装束の男がもんどり打って裏庭へ転げ落ちた。別の男は卓をぶちのめそうと拳を突きだしてくる。
普段は『遊び人』を名乗る一見やさ男風の卓だが、戦闘能力は常人の3倍以上はある。
卓は相手の呼吸音でその位置を悟り、賊の腕をつかんで腹に膝蹴りを食らわせる。背中に振り降ろされた肘を危うくかわして体を入れ替え、つんのめった賊の尻を蹴倒す。
「ちぃっ！」
裏庭にいたお頭らしき者が舌打ちをすると、賊たちは卓を残してその場から撤退しようとした。
しかし卓はひとりだけ逃げ遅れた小柄な賊のウエストにタックルをかまして押し倒した。男にしてはやけに柔らかな尻を押さえこんで、枕もとに手を這わせる。蹴散らされた菜美の着物の中から腰ヒモをつかみ、賊の両手を後ろ手に縛りあげた。
行燈に火をともすと室内がぼんやり明るくなる。
卓の足もとに転がっていたのは黒装束に身を包んだ女だった。忍びの者らしく、目だけをのぞいて頭からつま先までを黒い布ですっぽり覆い隠している。

女は藍色を帯びた勝ち気そうな瞳をキラキラさせて卓をにらみつけた。
「離せっ！」
身をもがく女忍者の隣で、薬をかがされた菜美がぐっすりと眠りこんでいる。
卓は女の顎をつかんでその瞳をまっすぐ覗きこむ。
「きさま、どこの手の者だ？」
くの一は質問を拒否するように視線をそらす。
「どうしても答えないというなら、おまえの身体に聞いてもいいんだぜ」
卓は有無をも言わせず女忍者の首に両手をかける。
女忍者は怯えた瞳で卓の双眼を見かえした。絞殺されるかもしれないという恐怖がほっそりした身体を硬直させる。
「安心しろ。死なない程度にいたぶってやるからな」
卓はニヤリと笑って両手に力をこめる。すると、黒装束の首から狭間にかけてがビリビリッと一文字に裂けてしまい、あっと言う間に真珠のような肌が剝きだしになった。
女忍者の乳房は南国の果実のようにツンと上を向いて尖っていた。ふっくらと盛りあがった恥丘には金に輝く恥毛が生えている。
「ずいぶんとうまそうな身体をしてるじゃねぇか」

そっぽを向くくの一の顎をつかみ、頬を覆う黒い薄布を剝ぎ取る。
女忍者は、唇を嚙みしめていた。
「身体もいいが、顔もえれぇべっぴんだな。こりゃあ上玉だぜ」
忍者にしておくのがもったいないほどの美貌だった。
鼻が高く彫りの深い面立ちに目尻が切れあがった二重の瞼。きめの細かい白い頬はうっすらと朱を掃いたように桃色がかって輝いている。破られた覆面の端から金色の髪がひと房こぼれ落ちている。
「ほほう、上も下も金の髪とは豪勢じゃねぇか。郷里はどこだ、江戸じゃあるめぇ？　ところで、オレを遊び人の卓と知っての狼籍か？　まずは、名を名乗れ！」
「名は**お鈴**。それ以外はおまえの知ったことか！」
気丈の女忍者お鈴に挑むようなきつい目つきで見つめられると、卓のペニスは征服欲に駆られてみるみる硬くそそり勃ってくる。
卓は全身の血が女のヴァギナを求めてわなないてくるのを感じて、お鈴にニヤリと微笑みかけた。
「いきなりマ×コをぶち抜くってのも芸がないから、たっぷり指マンでイカせてから最後の仕上げにかかってやるぜ。……おっと、ここで自害されたんじゃ、寝覚めが悪りぃや」

遊び人は舌を噛んで自害されないよう、女忍者の口に手ぬぐいでさるぐつわを噛ませた。無意識のうちに菜美姫の処女を破れなかったうっぷんを晴らそうと、女の乳房を両手で乱暴に揉みしだく。たっぷりした美肉は柔らかく、卓の手のひらに吸いついてくるようだ。

お鈴は卓の愛撫に感じまいと必死に抵抗する。

今まで様々なケースに合わせてありとあらゆる拷問に対する訓練をしてきたが、半裸に剝かれての拷問は初めての経験だ。まだ17歳で男の愛撫に慣れていない上に、相手が若後家キラーの卓ではだんぜん分が悪すぎる。中華まんじゅうのようにこんもり盛りあがった乳房を揉みたてられるうちに、いやでも息が乱れてくる。

「くっ、くううっ……」

卓は縮れ毛の感触を指で楽しみ、下着をつけていないお鈴の花園を嬲りはじめる。最初はやさしく、けれど徐々に力を入れて粘土をこねくりまわすように指腹をこすりつける。

「くの一なら縄脱けの術はお手のもののはずじゃねぇのか？　それとも、こんなふうに身体の自由を奪われて強引にしっぽりずっぽり犯られちまうのが大好きなのか？」

まだ男を知らない17歳のお鈴は、恥辱の涙を双眼からこぼした。イヤイヤと頭を振るが、身体の奥からこみあげてくる快感の波には抗えない。

卓は引き裂いた装束の中から十字手裏剣を取りだした。女忍者の太腿をつかんでできる

だけ大きく開脚させて、その内側に手裏剣の刃を突き立てる。
「いいか、身動きしたらズッパリ切れちまうからな」
お鈴は恐怖に青ざめながら両腿に力を入れる。秘唇の間をいき交う男の指の感触は身の毛がよだつほどおぞましく、背筋が悪寒でゾクゾク震えてくる。
卓は鮮やかな紅色に輝く陰口に指を差し入れ、溢れだした女蜜をすくいあげた。ねとねとした透明な液で濡れた指をお鈴の見える位置まで持っていく。
「おまえはずいぶんスケベな女だな。ほら見ろ、アソコがぐっちょり濡れてるぞ。オレに黙って『忍法濡れぬれマ×コの術』でも使ったのか?」
耳まで真っ赤に染めて双眼を閉じるお鈴を言葉で嬲りながら、指先にまといつくねっとりした誘い水を勃起した乳首にすりつける。
ぽっちり尖った乳首はくりくり転がされるたびに小さく反応する。
「うっうっ……んぐうぅっ」
口を塞がれたお鈴は鼻で息をしている。卓の攻撃はおそろしく的確で、包皮を押しあげるようにしてクリ×リスが勃起してくる。硬くしこって飛びだした肉芽は、指でちょっとつままれただけで真っ赤に充血してしまう。
卓は敏感な真珠を引っぱるように愛撫しながら、濡れた秘孔に指をピストンさせる。か



と思うと、深々と挿入した指でGスポットをえぐる。ひくひくわななく太腿に手裏剣が刺さりそうなほど触れているのを見つけ、お鈴には内緒で2本とも取り去った。

「うっ……むっ、むふぅうっ」

Gスポットとクリ×リスを同時に攻撃されたお鈴は、おいしそうなヒップを浮かせて振りたてはじめる。本心ではもっとずっと奥のほうまで硬くて太いものを突っこんで欲しいのだが、卓の指は入り口付近をくじるばかりだ。

「むぅうーっ！」

いくら叫んでみても、その声はさるぐつわに吸収されてしまい、お鈴は藍色の瞳に涙を浮かべて卓を見つめる。

「そろそろこいつが欲しくてたまらないんだろう？」

卓はニヤリと笑ってふんどしを片手で解いた。

お鈴の目の前に、天狗の鼻のように硬く反りかえった逸物が出現する。江戸の小粋な遊び人＝卓さんのペニスはところどころにピクピクと青筋を浮かべ、黒光りしていてとっても立派だ。

「こいつを入れて欲しいか？」

手首ほどの太さがある大きくて長い逸物をアソコの穴に入れられるのかと思うと、お鈴

の身体はわずかな恐怖とそれ以上の興奮で震えてくる。矢も盾もたまらなくなって、思わずうなずいていた。

卓は女忍者の口からだ液にまみれた手ぬぐいを取り去った。大きく左右に張りだした亀頭を膣口の中央に押し当てて、硬くしこった陰核をくじりながら再度質問する。

「入れて欲しかったら、おまえの主人が誰なのか答えろ」

「言えません」

「どうして？」

「どうしても言えないんです。……言えば、わたしはきっと仲間に殺されてしまう」

「それじゃあ、この子をかどわかしにきた理由は？」

なにを聞かれても、お鈴には答える気がないようだ。かぶりを振って下半身を襲う快感に耐えている。

「お願い、入れて欲しいの」

「おまえの主人を教えれば入れてやるぜ。入れるだけじゃない。おまえがひぃひぃ言って気をやっちまうまで出したり入れたりしてやってもいいんだ」

「お、お願いです……」

女忍者お鈴は自分から絶倫棒をおねだりしたことに気づき、死にそうなほど恥ずかしく

なった。けれど、このまま中途半端にやめられてしまったのでは、欲求不満で頭がおかしくなってしまいそうだ。
「今回の仕事は瓦版屋『春風堂』にいるマサさんから請負ったんです。仕事料は前金でもらったから雇い主には一度も会っていないし、他の連中とは先刻集合場所で初めて会ったんです。だから、ここへきた理由もはっきりしなくて……。うっ、ううっ……後生ですから入れてください」
お鈴は震える声で説明していたが、とうとう泣きだしてしまった。
「わかったからそんなに泣くんじゃねぇや。せっかくの美人がだいなしだろ」
卓はお鈴の両手から腰ヒモをはずし、泣きじゃくる女忍者の唇を吸って乳房を揉みしだく。
「待ってろよ、いま入れてやるからな」
両肩に紅椿を彫りこんだ遊び人は、くの一の片脚をかかえてひくひくしているヴァギナに逸物をぶちこんだ。前技をたっぷりほどこしたおかげで愛液がしとどに溢れだし、処女孔は裂けもせずに男根を受け入れる。
「ああーっ！……う、うれしい」
淫蜜でぐちょぐちょになっているお鈴の膣は、挿入されたペニスを待ってましたとばか

りにきつく締めつける。両脚を卓の腰に絡めて、はち切れそうなほど勃起した男根を根元まで咥（くわ）えこもうとしていた。

腕力のある卓は、全裸に剝かれたお鈴の下半身を半ば宙に浮かすように持ちあげて野太い剛直を激しく秘孔にピストンさせる。

「あひぃいっ！　あっ、あぐぅうっ」

お鈴はあられもない声をあげて、羞恥に身もだえる。こらえようとしてもどうしても声がもれてくる。いや、もれてくるのは声だけではない。大量の愛液が逸物を突き立てられた秘孔からもれてくる。

ふたりの結合部はくちゅくちゅと淫らな音をたてた。

「なんでぇ、次から次へと溢れてくるぞ。すげぇ潮吹きが激しいじゃねぇか。マ×コの襞がタコの吸盤みてぇにオレのチ×ポに吸いついてくるぞ」

卓は荒く弾む息を交えてさげすむような言葉を投げかける。ご自慢の剛棒を抽送すればするほど、腰のあたりがジーンとむずがゆくなってきてたまらない。ねっとりとした淫液をたたえる熱い蜜壺をかきまわし、抜けてしまいそうになる寸前まで一気に腰を引いて亀頭をクレヴァスに泳がせ、また根元まで剛棒を深々と挿入する。

「あ、あぐぅうーっ！」

美貌の女忍者は苦しげに眉根を寄せてあえいだ。お鈴は両肩をジュウタンにつけたまま、ブリッジするように裸身を反りかえらせる。次の瞬間には「ひぃいいいーっ！」と叫んで完全に気をやってしまった。

「おいおい、イクのは早ぇぜ」

ペニスのサイズと持続力に自信のある卓は、まだまだやり足りない気分だった。しかししかたがないので、太幹で『る』の字を書くように花奥を激しくシェイクしながら煮え気絶してしまった女のヴァギナは名残惜しげにヒクヒクとうごめいているだけだ。

たぎった樹液を放出した。つづけて女忍者の下腹に残り汁をぶちまける。

「ん〜。混血の女は初めてだが、けっこうイケるもんだな」

満足そうに「ふぅ〜」と肩で息をついたその目が菜美のほうに流れる。

「う⁉」

卓は萎えた逸物をつかんだまま硬直してしまった。

賊がかがせた薬のせいでぐっすり眠っているはずの菜美が、いつの間にか意識を取り戻して、両目に大粒の涙を浮かべて卓をじっと見つめていた。

「お……起きてたのか？」

菜美は両手で顔を覆ってしまい、指の間から小声で返事をする。



「卓さまのイジワル」

菜美は声をたてずに泣きだしてしまう。卓はその枕もとにひざまずいた。

「どうしてオレがイジワルなんだよ？　言っとくが、オレは菜美をさらいにきたやつらを追っぱらったんだぜ。この女は賊のひとりで、こいつらのお頭の正体を聞きだすために拷問してたんじゃねぇか」

「拷問？」

不思議そうな顔で問いかえす菜美に、卓は真顔でうなずいてみせる。

「ああ、そうさ」

「でも、卓さまはおやさしいから、女子供に拷問をするようなことは絶対になさいませんでしょう？　それに、菜美にはよくわかりませんけれど、このくの一は拷問を受けているようには全然見えませんでしたわ。それどころか、とても気持ちがよさそうに見えましたけれど……」

「誤解だって、誤解誤解。さぁ、草木も眠る丑三つ刻だぜ。寝たほうがいいぞ」

卓はなんとか言いくるめようとしたが、菜美は布団から起きあがると正座をして、卓をなじるような目つきで見つめた。

「卓さま、どうして菜美には今みたいなことをしてくださらなかったんですの？」

「よせやい。菜美も拷問をして欲しいって言うのかよ？」
「ええ、もちろんですわ。気持ちがよくなる拷問でしたら、卓さまにたくさんして欲しいんですの。……こんなこと、おねだりしてはいけませんかしら？」
「わかったわかった。そんなに言うなら、近いうちにたっぷりしてやるから、期待してろよ」
美しい菜美姫は『いま泣いたカラスがもう笑った』状態になって、卓に向かって小さな小指を差しだした。
「はいはい。指切りね。指切りげんまん……」
小指と小指を絡め、声を合わせて指切りをするふたりの背後で、悶絶していた女忍者お鈴がパッとその身を起こす。卓の背中をかすめるようにして全裸のまま裏庭へ飛びだした。
「あっ、待ちやがれ！」
「卓さま、捨ておきなさいまし」
わがままなお姫さまはうっとりしながら中腰になった卓の胸に頬をすり寄せていった。

☆

夜が開けてから2時間がすぎた。
団子屋の看板娘・千代は、いつになくプリプリしながら店先をホウキで清めている。

「あの子ってば、きっと家出でもして卓さんのとこに転がりこんできたんだわ。卓さん、はっきり言わなかったけど、困ったような顔してたもん。いやな女だなぁ」
千代はナメクジ長屋に突然現われた菜美のことをすごく気にしていた。彼女の口からは、数分おきに「ふわわ〜っ」と大きなあくびが出てくる。
団子屋『チヨちゃん』ののれんを店先にかけると同時に、若い男が入ってきた。
「おはよう、千代ちゃん」
「あ。八百屋の総助さん、おはようございます」
千代は営業用のスマイルを浮かべて明るくあいさつをした。
「ゴマとみたらし1人前ね」
「はぁい！」
看板娘兼女将兼料理人の千代は、セイロでふかしたばかりの団子の粉を手早く丸めて皿に盛りつける。ゴマだれと醤油だれをかけて楊枝(ようじ)を添えるとできあがりだ。
「はい、お待ちどうさま」
八百屋の総助は代金と引き換えに団子と茶を受け取る。できたて熱々の団子を頬張りながら千代の顔をじっと見た。
「今朝はずいぶんと眠そうだねぇ」

「わかりますかぁ？　もぉ、千代ったら、きのうはよく眠れなくってぇ」
「なんでだい？」
「だって、丑三つ刻に隣の部屋から変な音が聞こえてきて、なにかしら？　って思ってたら変な声も聞こえてきちゃって……」
「千代ちゃんの隣の部屋って、たしか遊び人の卓さんの部屋だろ？」
「そうなの。うちの長屋には盗人が盗めるようなものを持ってる人はいないはずだし、卓さんだって小判1枚持ってやしないってのに……」
小言をこぼす千代を見ながら、総助はニヤニヤしはじめる。
「たぶんそいつは、男と女でしっぽりずっぽり……ってやつだろうな」
「しっぽりずっぽり？　それ、なぁに？」
千代は聞き慣れない言葉に目を丸くしてしまう。
最後の団子を頬張っていた総助は、その顔を見て笑いだした。
「そいつは卓さんに聞いてみな。遊び人の卓さんはしっぽりずっぽりがえれぇ上手だって話だからよ。じゃあな、ごちそうさま」
団子を食べ終えた八百屋の総助は、謎の言葉を残して店を出ていった。
ウブでネンネな千代は新たな客の相手をしながら、始終不思議そうに首をかしげていた。

朝一番に用意した団子が売り切れてしまうと、いったん閉店にして往来を急ぐ。
まだ15歳になったばかりの千代は、毎日池田塾に通う勤勉少女だった。
池田塾の生徒はほとんどが高名な武士のせがれや良家の子女で、学費はおそろしく高額だ。勉強内容もかなりレベルが高く、団子屋の看板娘ふぜいが通えるようなハンパな塾ではない。それでも千代が勉強にいけるのは正体不明の足長おじさんが学費を払ってくれているからだった。
「困ったなぁ。池田塾の塾生なら『しっぽりずっぽり』の意味くらい知ってなくちゃいけないかしら？」
まじめな千代は読み書きと算術の教本が入ったフロシキ包みを胸にかかえて道をいく。
だが、途中ではたと立ちどまった。
「いやだ、そろばんを忘れてきちゃった」
授業に遅れてはいけない、と千代は駆け足で長屋へ戻る。
ナメクジ長屋の路地までくると、背の高い大男が壁板にもたれて立っていた。
「おい、おまえ、この長屋に住んでるのか？」
「そうですけど、なにか？」
「ちょいとツラぁ貸してもらおうか」

「失礼ね！　千代はカツラなんかつけてません。これは、みぃんな自分の毛なんだから。んもう、どこぞのハゲチャビンと一緒にしないでよ！」
ムッカーッときて激しい口調で言いかえす千代に、大男は一瞬たじろぐ。
「いや、そうじゃねぇ。用があんのはヅラじゃなくてツラだ。おめぇの顔のことだぜ」
噛んで含めるように言われて、千代はようやく意味を悟った。胸もとを押さえて1歩さがる。危険を感じて逃げだそうとするが、細い腕を大男につかまれてしまった。
「あれえっ！　痛いじゃないかっ」
「おとなしくすればこれ以上痛い目はみずにすむ。わかるな？」
「わかんない……もが…ふンぐっ……」
とうとう千代は薄汚い手ぬぐいで口を封じられてしまった。
そこへしめし合わせたようにカゴ屋がやってきて、千代はカゴの中に押しこまれた。その後ろから大男も乗りこんでくる。
ちょうどその時、道の向こうから岡っ引きの明日香とちゃっかり六兵衛が『パオパオ暴走事件』の話をしながら歩いてきたが、千代にはまったく気づかずに通りすぎてしまった。
ふたりのカゴかきは、ずっしり重くなったカゴを「よっこらせ」と持ちあげて、えっちらおっちら走りだす。

拉致された千代は、大男のあぐらの中に後ろ向きにすっぽり座る体勢になっていた。両手を振りまわして大男をやっつけようと暴れたが、すぐに手首をつかまれて拝むような格好に縛られてしまう。
「グフフ……。生娘らしい、いい匂いがするじゃねぇか」
窮屈なカゴの中に座った大男、**岩太郎**はジュルリとよだれをすする。目の前で震えている千代のほっそりした白いうなじをぶ厚い舌でレロンと舐めあげる。
「いいか、耳の穴かっぽじってよぉ〜く聞けよ。オレサマの特技はこの舌だけで女を完全にイカせちまうことだ。こうやって舐めなめされると、たとえ不感症でも60歳のババアでもイチコロなんだぜ……。うんにゃ、60のババアはまだ犯ったこたぁなかったたっけか？まー、そんなこたぁどうでもいいや。グフフフ……」
岩太郎はグフグフ笑いながら千代の襟に両手をかける。強引に着物の胸もとを割りひろげると、発展途上で80センチAカップの乳房がポロロッとこぼれ落ちる。
ネンネの千代は泣きべそをかいて身をもがく。半裸に剝かれた肌を羞恥の色に染めあげて顔をそむける。
「グフフフ。裸を見られるのがそんなにいやか？　でもなぁ、おまえの肌は最高だぜぇ。キメが細かいし、艶もいい。こういうスケを『めったにお目にかかれねぇ上玉』って言う

んだぜ」
岩太郎の節くれだった指は、剝きだしになったピーチピンクの乳首をつまみあげてクリクリ転がす。カゴの揺れに合わせて乳房をたっぷり揉みたてつつ、生娘の柔肌を清めるように舐めあげていく。
「フっ、フゥウっ」
千代は首筋を這うおぞましい感触から逃れようと、イヤイヤをする。しかし、じっくりと時間をかけて乳房を揉まれ、玉のような肌を舐めあげられてはたまらない。息は自然と荒く弾み、鼻にかかった甘い声が手ぬぐいの端からもれはじめる。
「ンっ、ンフゥウっ」
「そろそろ感じてきやがったな？　ついでに乳房も舐めてやろう」
岩太郎は千代の身体を持ちあげて前を向かせ、自分の太腿の上に座らせた。細くくびれたウエストをつかんで千代の頭がカゴの天井に届くほど高く持ちあげ、手のひらサイズの小ぶりな乳房に、ぶ厚い舌を這わせはじめる。
千代は目に涙を浮かべて、苦しげな表情でかぶりを振る。大好きな卓にすら見せたことのない乳房を見知らぬ男の舌で嬲られている……そう意識しただけで、あまりの羞恥に気が遠くなってしまいそうだ。それなのになぜか乳首をちゅうちゅう吸われると肌の表面が

泡立つように気持ちよくなってきてしまう。
「ウッ、ウゥーっ」
「グフフフ。乳首が尖ってきやがった。おまえは、そんじょそこらの女より感じやすい身体にできてるようだぜ。どら、下のお豆はどんな具合だ？」
岩太郎は口に含んだ乳首を強引に引っぱり、舌の上で転がしながら千代の股奥に手をこじ入れようとする。
「ムグーっ！」
叫んだはずみで、千代の口に押しこまれていた手ぬぐいがポロリと膝に落ちる。
「いやぁーっ！　それだけはやめてぇー」
岩太郎は絶叫する千代の口を慌てて塞ぎ、別の手で強引に太腿を割りひろげると、内股の柔らかな部分を愛撫しながら耳の穴を舌先でほじる。
「それじゃあ、『それだけ』じゃねぇことなら、なんでもやっていいんだな？　グフフフ。うれしいことを言ってくれるじゃねぇか」
泣き叫ぶ千代の言葉を誤解した岩太郎は、ますます調子に乗って生娘の肌を舐めあげる。
乳首をしゃぶり、秘奥へとじりじり指を進ませる。
「ウッ、ウウーっ。卓さぁん」


ぷるんっ
ぷるっ
ペろんっ
ペろっ

千代は生涯最大のピンチに見舞われ、上気した頬を真珠のような涙で濡らした。

☆

「ここが『春風堂』か」
瓦版屋(かわらばんや)の前に立っていた卓は、ひとりうなずいて藍染めののれんをくぐった。
板の間には寺子屋で見かけるような文机が並び、その上に書きかけの原稿や彫りかけの木版が散らかっている。数人の男女が紙面のレイアウトについて「あーでもないこーでもない」と議論しながら下書き用のわらばん紙に筆を走らせている。
「ちょいと邪魔するぜ」
卓が声をかけると、一瞬室内がシィンと静まりかえる。
「おや、ナメクジ長屋にお住まいの、遊び人の卓さんじゃありませんか」
部屋の一番奥にいた22、23歳の女が返事をする。緑がかった黒髪をきれいにまとめて、右耳には真新しい筆を1本挟んでいる。
「ほほぉ、さすがは瓦版屋、察しが早ぇや」
卓は板の間にどっかと腰を降ろす。
「さて、どんな特ダネをお持ちだね？　生きのよさと大きさによっちゃあ、高く買ってもいいけれど？」

「いや、今日は人をさがしにきたんだ。ここにマサってやつはいるかい？」

「マサ？……聞いたことがないねぇ」

「そうか、それじゃあ、他を当たってみるか」

「ちょいとお待ちよ。その話、詳しく聞かせてもらおうじゃないか」

女は店から出ていこうとする卓を呼びとめた。ついと立ちあがって奥の襖に手をかける。

卓ははき慣れた雪駄を脱いで板の間にあがりこんだ。

奥の間は仮眠室になっているらしく、隅っこにたたんだ布団がふた組押しやられている。

押し入れの戸は開けっぱなしで、古い瓦版、原版やバレンなどがてんでに並べられている。

卓はインクの香に鼻をヒクヒクさせながら、勧められた座布団にどっかと座りこんだ。

女は手近な盆から麦茶を茶わんに注いで卓に勧める。その頭上には細い縄が数本張られている。木製の洗濯ばさみがいくつもぶらさがっているところを見ると、刷りあがった瓦版を干すのに使っているらしい。

「それで、マサっていうやつがこの『春風堂』にいるというネタはどこから仕入れてきたんだい？」

卓は麦茶をひと口すすり、黙ったままでちらっと女の顔を見る。

「安心しなよ。秘密が守れないようなやつは瓦版屋にはなれないことになっているのさ。

口が裂けても言えないことは、口を裂かれても言わないもんさ」
「なら安心だ。詳しいことはまだ調査中だが、マサって野郎が忍びの者たちを金で雇って江戸界隈を徘徊（はいかい）しているらしいんだ。つい先刻、そいつら一味のひとりに出くわして、お頭の名前がマサだってことをつかんだ、ってーわけだ」
「そのマサがこの『春風堂』にいる……と？」
「らしいぜ。マサに雇われたと言ってやがった。なぁ、なにか心当たりはねぇか？」
「さぁねぇ？」
女は小首をかしげて考えこむ。麦茶をすすろうと茶わんにのばした右手を、卓がいきなりつかんだ。
「なっ、なにをするんだい⁉」
「あんまり手荒なことはしたくねぇんだが……」
と言いながら、卓は女をその場に押し倒し、ウエストに巻きつけた前かけと着物の裾を一緒にまくりあげる。日にさらされていない青白い太腿が剝きだしになり、耳に挟んでいた毛筆が畳にコトッと落ちた。
「おやめっ、や、やめないか！」
卓は無防備な女の狭間に指を這わせてニヤリと笑う。

「やめねぇよ。上の口が正直じゃねぇ時には、下の口に答えてもらうことにしてるんだ。わかるだろ、この意味が」
「ま、マサなんて野郎は知らないって言ってるだろ」
若後家キラーは、必死になってもがく女の包皮を指先でまくりあげる。クリ×リスを剝いて指腹で表面をくじりはじめる。
「ひっ、ひぁあーっ」
「でけぇ声をだすと、仲間が気づいて覗きにくるぜ。それでもいいのか？」
卓に注意されて、女はピタッと口を閉ざした。
「んっ、んふぅう〜っ。あっ、はぁあん」
女の甘いよがり声に励まされるように、卓の逸物はムクムクそそり勃った。それは熱く火照るヴァギナを期待して先端から先走りの液をにじませる。
「本当はおまえもこういうことをするのが好きなんだろう」
「ち、ちがう」
「じゃあなんでマ×コがこんなにぬるぬるしてやがんだよ。それだけじゃないぜ。ビラビラはやたらとでっけぇし、自分から進んでパックリ割れてるじゃねぇか」
卓は人差し指を、誘い水でぬらついている膣口に突き立てた。陰部全体を揉みたてると、

ちゅくっにゅぷっという恥ずかしい音がたつ。片手を襟にかけて乱暴に乳房を露出させ、乳首を吸いあげながら羞恥に頬を染めている女に問いかける。
「おまえの名は？」
「み、みやび。……んぁあーっ」
瓦版屋の女主人**みやび**はイヤイヤとかぶりを振る。
「嘘をつくな。おまえがマサなんだろう？　正直に答えろ」
卓はちゃぶ台の横にあった小物入れの引き出しをさぐり、頭上にぶらさがっているのと同じ洗濯ばさみをいくつか取りだした。みやびの豊満な乳房をしぼりあげるようにつかんで、尖った乳首をパチッと挟む。
「ひぃぃ～っ！」
馬乗りにまたがった卓の下で、みやびは悲鳴をあげて半裸の身体をのけぞらせる。
「おらおら、こっちのオッパイ豆にもうひとつ……。お次はアソコのスケベなビラビラにも飾ってやるからな」
むっちりした両脚を左右に開いて、秘唇を1枚ずつ挟みこむ。そのたびにみやびは悲鳴をあげた。硬くしこった乳首は洗濯バサミに挟まれて痛いはずなのに、そこからチリチリと疼くような心地よい感触が湧き起こってくる。



「どうだ、これでもう二度とウソはつけまい」

卓はビラビラに噛みついた洗濯バサミをひとつずつつかんで左右に引っぱる。

「ひぃいい！　ひ……引っぱらないでぇぇ」

みやびの秘部は女壺のずっと奥まで覗けそうなほどぱっくり開かれてしまった。ヴァギナは男の目から逃れようとするようにひくひくうごめき、ねっとりした牝汁を溢れさせる。

「引っぱらないでぇ、とか言いながら、うれしそうに腰を振ってやがるじゃねえか。ずいぶん淫乱な女だぜ。まともなやりかたじゃ、イクにイケねぇんだろ？」

卓は畳に落ちていた毛筆を取ってみやびの股奥に近づけ、真新しい毛先で敏感な内股をすうっと舐めあげる。

「あひぃいっ！」

みやびは内股をビクビクッとけいれんさせる。その動きにつられて蜜壺から透明な液が大量に溢れてきた。

「お習字は苦手なんだが、ちと試してみるか」

卓はつぶやき、ニヤリと笑って筆の先で愛液をすくいあげた。ネトネトした液で筆先を濡らして富士山型の乳房へ持っていく。形いいふくらみのふもとをなぞり、脇腹をコチョコチョくすぐる。

「ひぃいっ！　か、堪忍してくだっ……ああ！　お願い、なんでもしますから」
着物を半裸に剝かれたために両手の使えないみやびは、恥辱の涙で濡れた瞳で哀願する。
「なんでもしますから、なんなんだよ？」
「もう我慢できないんです。アソコが熱くなって、ジンジン疼いてたまらないの」
「だからぁ？」
卓は耳の遠いフリをして片手を耳に添えて聞きかえす。
「た、卓さんのご立派なモノを、あ、あたしの……。くぅうっ」
「まいっちゃうなぁ。オレって時々頭の回転悪くなるんだよな。はっきり言ってくんねぇと、わけがわからんぜ」
「た、卓さんのおチ×チ×であたしのアソコを突いてください。あうぅーっ」
みやびはついに恥ずかしい言葉を言わされてしまった。死にたくなるほどの羞恥で頭の中がクラクラしてくる。
「そうかい、こいつをアソコに入れて欲しいんだな？」
卓は待ってましたとばかりに着物を素早く脱ぎ捨てる。
ほぼ完璧に準備が整った極太魔羅がぬうっと顔をのぞかせた。黒光りする青筋ペニスはドクッドクッと脈打ちながら、天へ向かって偉そうに反りかえっている。

突きつけられた剛直を目にしたみやびは、わななと唇を震わせた。あんなに太くて長いもので突かれるのかと思うと、秘唇全体が期待と興奮でゾクゾクしてくる。
「もう一度聞くが、おめぇがマサなんだな？」
「ちがいます」
「いくら言っても素直になんねぇスケだな？　こうなりゃ背ナで咲いてる紅椿が黙っちゃいねぇぜ。仕置きだ。ひぃひぃ泣いて許しを乞うまで仕置きしてやる！」
卓は座布団をふたつ折りにして仰臥しているみやびの腰の下に押しこんだ。太腿をつかんでたっぷり腰を引きつけ、ピクピクしている亀頭を陰部に押しつける。
「覚悟しな！」
ひと声放った瞬間、卓はその指でみやびのアヌスを拡張した。そのままいきり勃ったモノを狭あいな菊門にぶちこむ。
「ひぎぃいーっ！」
みやびは下肢を裂かれるような痛みを感じて大声をあげた。黒髪を振り乱し、全身をひくつかせて畳に爪を立てる。あまりの痛さに背中をのけぞらせると、乳首を挟んでいた洗濯バサミがパチパチッと弾け飛んで乳房から転げ落ちた。
卓は抵抗感のある直腸めがけてズップズップとこわばりを抽送する。菊門を犯しながら



勃起しているクリ×リスを指先でつまんでひねりあげる。ひときわ敏感な肉芽を刺激されると、みやびのアヌスは牝壺とはひと味ちがった締めつけかたで卓の太竿に反応する。
「どうだ、これでもう嘘はつけまい。正直に白状しろ。おまえがマサだな？　忍びの者を雇った理由はなんだ？」
「ちがっ……あひぃぃいーっ」
みやびはとうとう絶頂に達して大きなよがり声をあげた。
卓もほとんど同時に、みやびのアヌスへ白濁した液をたっぷりとぶちまける。ふぅふぅ肩で息をしながら、気絶した女の横にゴロリとその身を横たえた。
「ったく、これだから女の上の口を割るってのは疲れるぜ」
とかなんとか言ってはいるが、けっこう満足していたりする卓である。
「はぁっ……」
しばらくたって、みやびが目を覚ました。
身体の自由を奪われてたっぷり責められ、その上アヌスの処女まで奪われてしまったみやびは、恨むような目つきで隣に寝そべる卓の顔をにらみつけた。
「ひどいわ。ひどすぎます」
「いーじゃねぇかよ。最後までイッたんだろ？」

「それはそうですけど、わたしはマサなんかじゃないって言ったのに……」
「なにぃ、おまえは本当にマサじゃねぇのかよ?」
卓は跳ね起きて、真っ赤になっているみやびの顔を覗きこむ。
「そうですよ。だいいち、うちは最近赤字つづきで、忍びの者を雇うようなお金なんか、びた1文もありゃしないんだから」
遊び人は「え?」と聞きかえしたまま、その場に硬直してしまった。

第4章　三角木馬と悶つ引き明日香

障子を開け放たれたその部屋は、午後の光に満ちてぽかぽかと暖まっている。
早苗の横で腹ばいに寝そべりながら、卓は眉根を寄せて考えこんでいた。
「どうかしましたの？」
「いや、別にどうってことはないんだが……どうして早苗のおっぱいはこんなにうまそうなのかな、と思って」
真顔で冗談を言う卓を見て、早苗はクスクス笑いだす。
「好きなだけ召しあがっておいきなさいな」
「でもなぁ……」
「本当は気になることがあるんでしょう？」

「うぅ～む。実は、『かくかくしかじか』……ってーわけだ」
昨夜からの一部始終を聞き終えると、早苗は情事の後でまだ汗ばんでいる裸身をゆらりと起こして横座りになる。
「ということは、つまり瓦版屋『春風堂』の女主人みやびさんは、忍者一味を雇ったマサとは別人だったのね？」
「ああ、そうなるな。女忍者にはまんまと逃げられちまったし、手も足も出ねぇや」
卓はのんきにあくびをしながらゴロリとあお向けになる。
「あら、手も足も出なくても、ここんとこだけは元気ねぇ」
早苗の滑らかな指が半勃ちになっている卓の太筒をそっと握りしめて、根元からカリ首までをシュッシュッとしごきたてる。
つい先刻早苗の蜜壺で果てたばかりの逸物は、またもやムクムク勃ちあがってくる。
ところが早苗は逸物を愛撫する手を急にとめて、真顔になって卓を見た。
「ねぇ、卓さん。あたし、気になることを耳にしたんだけど」
「なんだい？」
「あの**フレフレ団**が近々大店(おおだな)に押しこみを働くらしいってのさ」
「フレフレ団だって？」

なにかに思い当たった卓は、飛び起きようとする。しかし早苗は股間の息子をつかんだままで、手を離そうとしない。
「そうなの。おとつい店にやってきた流れ者がふたり、フレフレ団が名うての強盗を各地から呼び集めているらしい、と噂していたのよ。あたし、聞こえないふりをしてすっかり聞いちまったんだけど、押し入る先はかなりの大店らしいわ」
「そうか、フレフレ団が復活したか……」
卓は股間の分身を這いまわる女の手を楽しみながら、脳裏に過去の記憶を思い浮かべる。
フレフレ団は押し入った家や問屋の住人は必ず全員殺害し、金はもとより米1粒までも完全に吸いあげていく残忍で強欲な集団だった。
当時卓は、わけあってフレフレ団の撲滅(ぼくめつ)に協力したが、首領だけは取り逃がしてしまっていた。けれど、首領の左の二の腕にはV字形の刀傷を負わせている。なにかあればあの傷が証拠になるにちがいない。
早苗は硬く勃起した剛直に顔を寄せ、裏筋を尖らせた舌の先でペロリと舐めあげる。美しい頬に妖艶な笑みを浮かべて卓を見つめる。
「フレフレ団のことは、あたしもそれとなくあちこちに当たってみるわ。それより今は、卓さんのこれ、たくさん欲しいの。……ね？」

「まいったなぁ。早苗にはかなわねぇや」
美女の媚びたような「ね?」に弱い卓は、苦笑してゆっくりと起きあがる。
「さてと、それじゃあ、今度は尻のほうからたっぷり突いてやるぜ」
と宣言して、早苗にバックスタイルを取らせる。
早苗は夜具の上に両肘をつけて形のいいヒップを高く持ちあげる。逆さまになった秘部はとうに濡れそぼって真昼の陽光にキラキラと輝いている。
卓は包皮を剝いて肉芽を指でくじりながら、舌を突きだして女の陰部全体をねっとりと舐めあげる。かすかに塩気を帯びた粘液が舌にまとわりついてくる。
「ほほぅ、すっかりいい具合にできあがってるじゃねぇか」
「卓さんのためだもの。はっ……ふぅうっ」
性感帯をぬらぬらうごめく舌で刺激されて、早苗はもじもじとお尻をくねらせる。たわわな乳房はたぷたぷ揺れて互いにぶつかり合っている。早苗は背中を反らせて肩越しに卓へ問いかける。
「ねぇ、卓さんったら、その女忍者やみやびさんにもこんなことをしたんでしょう?」
「え?……いや、その……」
他のやつらが相手ならどうにでもごまかせたろうが、早苗にだけはなぜかウソがつけな

い卓だった。慌てた顔を見られまいと、早苗の肉芽に軽く歯を立てる。
すると、若後家はビクビクッと身体を震わせる。唇を半開きにした表情が艶めかしい。
「はぁあんっ……もう！　いけない人ねぇ」
「へへっ。そんなオレが好きなくせに」
「ああんっ。そろそろ突いてぇ」
その言葉も待たずに、卓はカチカチに勃起したこわばりを秘孔にずっぷり突き立てた。最初は根元まで深々とねじこみ、お次は半分ほど抜き取る。それを何度か繰りかえし、逸物にひねりを加えて狭間をこすりたてる。つづいて引きしまった腰をダイナミックに律動させはじめた。
「あっ……はひぃいっ」
遊び人の卓さん自慢の剛棒は、赤子の腕ほどの太さと岩のような硬さを保って早苗の膣の中で暴れまわる。
「いいぞ、早苗。オレのチ×ポをギュギューッと締めつけてきやがるぜ」
「はひいっ！　いっ……ああ～っ」
早苗は大きくエラの張ったカリ首でGスポットをえぐられて、息も絶えだえなよがり声をあげる。太竿の表面でクリ×リスをこすりたてられると、今にも悶絶しそうなほど心地

よい。卓の動きに合わせて腰をくねらせ、片手で自ら美乳を揉みたてる。
「いいっ、と……とってもいいのぉおっ！　イッちゃウウーっ」
熱く煮えたぎる淫蜜をたたえた女壺は、早苗の叫びを合図にいっそう激しく卓の絶倫棒を締めつける。
「ううっ」
卓もまた、低くうめいて一気にスペルマを放った。ブルルッと尻が震えて、樹液を放出した剛直はゆっくりと萎えていく。荒く弾む呼吸を鎮めようと大きく息を吸い、吐きだす勢いにまかせてつぶやいた。
「まいったな。早苗なしじゃあ、生きていけそうもねぇぜ」
絶頂に達した早苗は、けだるく裸身を動かして卓の胸に抱きついていく。
「あたしもよ。卓さんなしじゃ、死んでしまいそう」
ふたりは微笑み合って唇を重ねる。舌に舌を絡めて甘く香る液を吸いあげる。
卓は勃起して硬くなっている早苗の乳首を手のひらで転がした。
「早苗、やばいことになってきたぜ」
「あら、どうなさいましたの？」
鼻にかかる甘い声で問いかえされて、卓は柄にもなくポッと頬を染めてしまった。

「こいつめ、また勃ってきやがった」
早苗は太腿に押しつけられた剛棒のゴリゴリした感触に、クスッと笑みをもらす。
「卓さんって元気ねぇ」
「たてつづけで悪いが、もう1発いいかな？」
「もちろんよ。でも、今度はもう少しやさしくしてね」
江戸の小粋な遊び人＝卓は文字どおり絶倫だった。とにかくもう、いくら犯りまくっても、極太魔羅は七転び八起き状態でムクムクそそり勃ってくる。
早苗のまろやかな裸身を押し倒し、先刻迎えたエクスタシーの余韻でまだヒクヒクしている秘穴に剛直をずっぷりと挿入する。
「ぷはーっ。早苗のマ×コは最高だ。入れただけで爆発しそうだぜぇ」
太竿をやんわりと締めつけてくるヴァギナの襞の感触を楽しみつつ、あお向けになった早苗の乳房をむにむに揉みあげる。
「はっ、はぁあっ。もう、感じすぎて変になってしまいそう」
「そいつはよかった」
ところが、健康的な白い歯を見せてニッと微笑む卓の背後に、いつの間にか何者かが音もたてずに忍び寄っていた。その何者かが、紅椿が鮮やかに咲き誇る肩をツンツンとつっ

ついた。
「ん？」
振り向いた瞬間、卓は「うわあーっ！」と叫んだ。
「ぱおぱおーん！」
甘えるような声で返事をしたのは、ルリ大夫率いる軽業団の子象パオパオだった。縁側に前脚をかけて、灰白色の長い鼻を卓の首に巻きつけてくる。
「よっ、よせ、窒息するぅ！」
「きゃあーっ！」
頭上に突然現われた子象の鼻を見た刹那(せつな)、早苗はスウッと意識を失ってしまった。
「ぱふぅ〜ん」
どこからともなく現われたパオパオは、めったやたらとうれしそうな声をあげて卓の体に鼻をすり寄せてくる。
「ちいっ！　せっかくいいとこだったのに、なんて野郎だ。……こいつめ、さては軽業団をまた脱走してきやがったな？」
問いかけてみても、パオパオは甘えて鼻を鳴らすばかりで答えようとしない。
「しょうがない、ルリ大夫のところまで送り届けてやるとするか」

卓はうんざりしつつ、脱ぎ散らかしてあった着物をつかんだ。

☆

粋でいなせな岡っ引き、明日香は小さなフロシキ包みを小脇にかかえて道を急いでいた。
フロシキの中には、徳×ご禁制の品、淫乱誘発振動機が入っている。
「いったいどこのどいつがこいつを持ちこんだのかねぇ？」
『またこい橋』を渡って右手の道をずっといくと、やがて大きな見せ物小屋が見えてくる。
表に『ルリ大夫一座』と書かれた派手なのぼりが何本も立てられていた。今日の出し物は夜の部だけらしく、出入り口に人の姿はない。
明日香は木戸を押して中を覗きこんだ。
「ちょいと邪魔するよ。……誰かいないのかい？」
しばらくすると、奥からルリ大夫がすうっと姿を現わした。
「おや、岡っ引きの明日香さんじゃありませんか。なにかご用ですか？」
「ちぃとばかし聞きたいことがあってね。どこか人目につかないところへ案内してもらえるかい？」
ルリはうなずき、明日香を奥の間へと案内する。通路は様々な飛び道具やきらびやかな衣装で雑然としている。

まだ10歳かそこらのように見える小柄なルリは、明日香に甘い香のするお茶を勧めた。
自分もひと口飲みながら、明日香をじっと見つめる。
美少女ルリに見つめられると、なぜか明日香の身体がゾクッと震えてくる。まるで蛇ににらまれた蛙のように身動きできずに黙って座りつづける。
どこからともなくほの甘いハッカのような香が漂ってくる。それは淫夢香の香だったが、明日香はまったく気づいていない。
「どうかなさいましたか？」
「え？　あ、いや。実は、きのうの子象の事件だが、あいつの排泄物の中からこんなものが見つかってね。どなたか見覚えがないかどうか、聞きにきたってわけなんですよ」
明日香は単刀直入に切りだし、フロシキ包みをちゃぶ台の上でひろげる。その中から出てきた白い筒状のものを見ると、ルリは不思議そうな顔で眉をひそめた。
「これは？」
「どうやらこいつは徳×ご禁制品のひとつ『淫乱誘発振動機』らしいんだよ」
「『淫乱誘発振動機』？　どうしてこれがご禁制の品だとわかったんです？」
「それはその……」
明日香は真っ赤になった顔を見られまいと、唐突にお茶を呑み干す。

「まぁ、その……、あたしは岡っ引きだからね、それくらいの知識はちゃんと持っているってわけさ」

「それでは、うちの一座の中でこれに心当たりのある者がいないかどうか、ちょっと聞いてまいりましょう」

「それは助かります。ぜひとも頼みますよ」

ルリ大夫はついと立ちあがって部屋を出ていく。

後に残された明日香はひとりになった気楽さから、興味津々の目つきで周囲を見まわす。ここに入ってきた瞬間目についた奇妙な形の木馬をもっとよく観察しようと、吸い寄せられるように立ちあがった。

「いったいこれはなにに使うんだろう？」

木馬は脚が2本ずつ組になっていて、脚の先には前後に揺れるように湾曲した板がついている。背中の高さは明日香の胸のあたりまであり、なぜか三角形に尖っている。

「物騒だねぇ。こんなに尖ってたんじゃあ、うっかりまたがっちまったら、アソコが裂けちまうじゃないか」

「その木馬は女を悦ばせるためにつくられたんだよ」

耳なじみのない声に、明日香はパッと背後を振りかえる。気づかないうちに、ひとりの

女がすぐ後ろまできていた。
「な、なんだい、おまえは？」
女は虎の首でできたマスクを頭にかぶっていた。目と鼻と口の部分がくり抜かれているが、表情まではわからない。首から下は全裸で、豊満な乳房と金色の毛で飾られた恥部を剝きだしにしている。抜けるように白い肌はうっすらと紅色に染まっていた。
「木馬の主人。そして今日からはおまえの主人となる者だ」
「なんだって？」
危険を察した明日香は、素早く十手を抜いて構える。
「どこのどいつが知らないが、岡っ引きの明日香姐さんにたてつくとロクな目にはあわないよ。痛い目を見ないうちに降参しちまいな」
しかし虎の女はかぶりを振る。
「このわたしを主人と認めよ。さもなくば死んでも忘れられぬほどの拷問を科すぞ」
「おだまり！」
叫ぶ明日香の右手に女が放った鞭が絡みついた。ビシッと小気味いい音が響き、明日香は手首に激痛を感じて十手を取り落とす。
「あつっ……。くそう、なにしやがるんだい！」

「聞きわけの悪いおまえに調教を行なうのだ。ありがたく命令に従うがいい」
気の強い明日香は逃げだすよりも戦うことを選んだ。武術は岡っ引き養成大学校で最高の『甲』をもらっている。度胸を決めると虎の女めがけて飛びかかっていく。
「やぁあっ！」
だが、実戦は虎女のほうが一枚上手だった。まっしぐらに突進してくる明日香の身体を難なくかわして、背中を片手でトンと突く。
勢いがついていた明日香はそのまままっすぐ壁にぶつかった。こめかみのあたりをしたたか打ちつけ、目の前が一瞬暗くなる。
「あうっ……」
虎の女は跳ねかえってきた明日香の身体を畳の上に押し倒す。女とは思えないほどの腕力で美しい岡っ引きをねじ伏せて、素速く着物を脱がしていく。
「やっ、やめろっ」
明日香は四肢をもがいて逃れようとするが、女の力は並たいていのものではない。その上、なぜか身体中がしびれてどんどん力が抜けていく。そうこうするうちに、たちまち全裸に剝かれてしまった。
「てやんでぃ！　茶に一服盛ったな」

「しびれ薬は耳かきの先ほども入れちゃいないよ。動けないのは淫夢香のせいさ」

虎女は含み笑いをもらし、畳に横たわった明日香の太腿をつかんで左右に開く。毛皮の目の部分から美しい岡っ引きの秘部をじっくり観察する。

いまだ男を知らない明日香の裸身は、神々しいと形容したくなるほど美しい。ふくよかに盛りあがった乳房。細くくびれたウエスト。下半身にはむっちりと脂が乗っている。

「ほほほ……。どこもかしこも桜のようにきれいじゃないか。乳首もアソコも、みんな桜色をしているぞ。大事なところの穴は鮮やかな朱色で、男を誘うようにヒクヒク淫らにうごめいている……」

「い、言うなっ！」

気丈な明日香は屈辱的な言葉を浴びせられて、首筋まで真っ赤に染めて叫ぶ。自分でもよく見たことのない秘部を見ず知らずの女に説明される筋合いはない。

「やめろっ、その手を放せ！」

虎の女は身動きできずにいる明日香の両脚を菱形(ひしがた)に折り曲げた。ついで、柔らかな脇腹や下腹を爪の先で掃(は)くように撫でまわす。

「ああっ……」

淫夢香はその香をかいだ者の身体の自由を奪い、眠っている欲望を目覚めさせる性質を

持っている。そのため、ほんのかすかに肌に触れられただけなのに、明日香の裸身をむずがゆいエクスタシーの波が駆け抜ける。柔肉が泡立つように疼きだしていた。
　虎の女は淫夢香の毒気に慣れているらしく、平然とした様子で明日香を嬲りつづける。薄桃色の皮膜をめくってクリ×リスを剝きだしにし、それを親指の腹でくりくりとこねまわす。もう一方の手で秘唇をひろげて膣口の周囲をなぞる。
「やっ、やめろっ。……やめてぇえっ。はひぃい」
　命令口調だった明日香の声が、しだいに哀願を帯びた声色に変わってくる。その黒い瞳は恥辱の涙で潤み、唇をわななかせ、乳首を尖らせて身もだえる。
「岡っ引きともあろう者がこれしきの責めで叫び声をあげるとは、なんとも情けなや。お上に代わって仕置きをしてくれるわ」
　虎女はちゃぶ台の上に置かれていた『淫乱誘発振動機』、つまりバイブを手に取って、ヒモを引いた。ビィイイイという独特の振動音が明日香の耳にも届く。
　包皮を剝かれたピンク色のクリトリスにバイブを押しつけられた瞬間、明日香は「ひぃいーっ！」と叫び声をあげた。歯の根が浮くような快感が狭間からこみあげてくる。
「ひっ、ひぃいっ！　ひぁああーっ！」
「ほほほ……。下のお口はだらしがないねぇ。こんなによだれをたれ流しちゃって。見て

いるほうが恥ずかしくなってくるじゃないか」
うねうねとうごめく乳白色のバイブは秘花が吐きだす愛液にねっとりとまみれていく。
明日香は粘液をまぶした先端で勃起した肉芽をいじられて、底抜けに気持ちがよくなっていった。
「いっ、もぉっ……やめてぇ」
淫夢香の利き目が薄れてきたらしく、明日香はイヤイヤとかぶりを振る。
しかし、虎の女は全裸に剝いた美しい岡っ引きの秘部を執拗にいたぶりつづける。
「そろそろこいつを入れてやろうか」
「いやーっ！」
絶叫する明日香の秘孔にバイブが突き立てられる。処女膜は引き裂かれ、桃色がかった白い内腿にパッと鮮血が飛び散った。
「あっあぁーっ」
肉を断ち切られるような激痛を感じ、明日香は裸身をのけぞらせる。
「やめっ……ひぃいーっ」
叫びすぎて声が枯れてしまい、明日香は息も絶えだえにかすれた悲鳴をあげる。
虎の女はバイブの根元をつかみ、指1本入れるのがやっとの蜜壺に出したり入れたりを

繰りかえす。愛液をにじませてうねうねと締めつけてくる肉襞をえぐるように動かす。
岡っ引き明日香は汚辱の行為に翻弄されて、いつの間にか抵抗する意志さえ失ってしまった。ヴァギナの中でぐねぐねとのたうちまわる『淫乱誘発振動機』の動きに合わせて裸身をくねらせる。その全身は汗にまみれ、秘部から溢れだした愛液はねっとり糸をひいて畳の上までしたたり落ちている。
「くっ、くひいいっ。も、もっとぉ」
明日香は胸の内で激しく脈打っている心の臓を押さえこむように自分の乳房をつかむ。指の間からはみだした乳首は硬くしこり、真っ赤に充血して木イチゴのようだ。
「ほほほ……。どうやらこの子がすっかりお気に召したようじゃないか。今からそんなに気をやっていてだいじょうぶかねぇ」
虎の女は明日香の蜜壺へ半分ほど挿入していたバイブを、根元まで深々と突き立てる。
「あひぃいい！」
明日香は、沸騰した湯に放りこまれた桜エビのように、ピンク色に染まった裸身をくねらせる。まるで奇妙な生き物が大事なところの穴から入ってきて、ハラワタを食い散らかしているような気分だ。けれどその動きは恐ろしく甘美で激しく、明日香の唇はわなわなと震えだす。

虎の女は満足げにうなずき、明日香の裸身を軽々と抱きあげて、部屋の隅に置かれている三角木馬の上にひょいとまたがらせる。

明日香は三角に尖った木馬の背中で秘部を割られ、大きな声を放った。

「あぁーっ、さ、裂けるぅうーっ」

エクスタシーの波に翻弄されつつも、力の入らない両手で木馬の首にしがみつく。狭間を浮かせるようにして前かがみになると、勃起して剝きだしになったクリ×リスがモロに木馬の背に当たる。

「ひぃいっ……」

明日香はか細い声をあげて、ピンク色の花芯を木馬にこすりつけた。その刺激で前後に身体を揺すると、たわわな乳房がタプタプとぶつかり合う。同時に淫ら壺に挿入されたバイブがヴァギナを突きあげてきて、頭の奥が真っ白に輝いてくる。それでも自ら木馬を揺らして快感をむさぼってしまう。

「ひっ、あああっ、もうダメぇ……」

「ほほほ……。岡っ引き養成大学校を主席で卒業しただけあって、呑みこみが早いじゃないか。そんなに気持ちがいいなら、こんなのはどうだい?」

虎の女は銀に輝く十手をつかみ、その先で気絶寸前になっている明日香の頰をぴたぴた

叩く。
明日香は荒々しく息を弾ませつつ、うっすらと目を開けた。
「んっ……。ああっ、なにをっ⁉」
虎の女は三角木馬に騎乗した明日香のヒップを片手で押さえつけて、小さな菊門に十手をズブリと突き立てた。
「きゃあああーっ！」
菊門の処女を失った明日香は、息もできずに再び木馬の首にしがみつく。虎の女の思うがままに、淫らなふたつの穴を同時にくじられもてあそばれる。
「どうだい、自分の十手でお尻の穴を犯されている気持ちは？」
意識がまともな時であれば、即刻やめさせたにちがいない。けれど今の明日香はすっかり快楽のとりこになっている。めくるめく今のこの快感がもっと高まるのであれば、どんなことでもする気でいた。その証拠に、狂ったようにヒップを振ってクリ×リスを木馬の背で刺激している。
「ひぐううーっ！」
ひときわ大きな声をあげた次の瞬間、明日香はとうとう気を失ってしまった。
「いくら岡っ引きといえども、処女は他愛ないものだわねぇ」



虎のマスクの下から現われたのは、菜美姫を拉致しようとして遊び人・卓の部屋に忍びこんだ、女忍者お鈴の顔だった。

☆

早苗の家を出た卓はのんびりした足取りで往来を歩いていく。
向かいから27、28歳に見える色年増がやってきた。紫色のフロシキに包んだ三味線をかかえ、大きく張りだしたヒップを左右に揺するように近づいてくる。
「おっ!? 三味線の師匠、お銀さんじゃねぇか。相も変わらずむしゃぶりつきたくなるほど色っぺぇぜ。ちぃーと粉かけてみるとするか」
卓はじゅるっとヨダレをすすり、粋な遊び人を気取ってきりりと表情を引きしめる。
「おい、そこのべっぴんさん、そんなに急いでいったいどこへいくんでい?」
「あぁら、遊び人の卓さんじゃないか。……おや、それ、どうしたの?」
お銀は卓に気づいて立ちどまる。色男の表情から情事が起きる予感を悟って色っぽく微笑みかけたが、すぐにその表情を強張らせてしまった。
「え?……それって、こいつのことかい?」
卓はうんざりしたように背後をちらっと見やる。彼の後ろにはやたらめったらうれしそうな表情をした子象パオパオの姿があった。パオパオは子猫が親猫に甘えるように長い鼻

を卓の肩にすり寄せてくる。
「こいつは軽業をやってるルリ大夫んとこの芸人……いや、芸象なんだが、どうやら小屋から脱走してきたらしいんだ」
「まぁ！　それはご愁傷さまだこと。それじゃあまたね」
お銀は小さく笑いながら卓の横を通りすぎていく。
「ちいっ。おめぇが一緒だと、いい女を見つけてもてんで口説けやしねぇぜ」
ナンパに失敗した卓はむすっと不機嫌な顔になってまた歩きだす。
いつもなら白い歯を見せてニッと笑っただけで江戸中の女が羨望の眼差しで追いかけてくるというのに、今日はパオパオが一緒にいるため、好みの女にちょっかいを出すことすらできない。
「さっさとルリ大夫んとこに連れ戻して身軽になるとするか」
江戸きっての色男は、口の中でぶつくさつぶやきながら見せ物小屋へと歩きつづける。
「卓さん」
聞き覚えのある女の声がして、卓はくるっときびすをかえした。
四つ辻のところにうなぎ屋の女将、志乃が立っていて、卓を手招きしている。
「おっ、お志乃じゃねぇか。いったいオレになんの用だい？」

「いえね、用ってほどのもんじゃないんだけど……」
志乃は真っ赤に頬を染めてモジモジと身体をくねらせる。
「それじゃあこいつに用アリなのかい？」
卓はふところに片手を突っこみ、いつも持ち歩いているビー玉を五指に挟んで引っぱりだす。これ見よがしに見せつけると、志乃はいっそうモジモジする。
「いえ、そうじゃなくて、今日はそいつを楽しませてもらったお礼がしたいのよ」
「礼？」
「ええ。ちょっとの間でいいから、つき合ってちょうだいな」
「つき合うのはいいが、こいつが……」
卓は渋い顔でパオパオを見る。
「そんなの、犬みたいにそこいらへんにつないでおけばいいじゃないか」
「それもそうだな」
男っぷりのいい卓は、女だけじゃなく同性から見てもかなり色気がある。だから当然のようにうまそうな据え膳(ぜん)は山ほど据えられてきたし、極太魔羅が相手の女を気に入りさえすれば、迷わずたっぷりちょうだいしてきた。
そんなわけで、道端(みちばた)に落ちていた麻縄でいやがるパオパオを柳の木につなぎ、歩きだす

志乃の尻をふらふら追いかけていく。

「パフーン、フフゥーン」

甘えるようなパオパオの声が追いすがってきたが、もう卓の耳には届いていない。

志乃は材木問屋や呉服問屋の倉庫が建ち並ぶ川っぷちまで卓を連れていく。そのあたりに人けがないことを確認すると、遊び人の胸にうっとりとしなだれかかる。

「おいおい、まさかこんなところでやるのかい？」

「ああ。このへんは昼間でも人通りが少ないからね。卓さんはおいや？」

「いやいや。どこだってかまやしないさ」

卓はもたれかかってくる志乃の身体をぶ厚い胸板で受けとめて、女の唇を吸いあげる。

「んっ……ふぅうん」

うなぎ屋の女将、志乃は甘い吐息を鼻からもらすと、卓の着物の前をはだけて、白いふんどしの上からまだ柔らかいペニスをそっと撫でる。

「真っ昼間からサカりやがって」

「うふぅん。そんなの、いいじゃないか。淫らな女はきらいかい？」

「まさか！　好きに決まってるだろ」

卓は志乃の着物の襟に手を突っこんで、柔らかな乳房をじかに揉みしだく。きっちりと

巻きつけられた襦袢と柔肌の間にできた空間を無理にひろげて、乳首をコロコロ転がしはじめた。
「あっ。はぁあん……。ま、待ってぇ。今日はあたしがお礼をする番じゃないか」
志乃は乳房を揉みあげる卓の手をつかんで強引に押し戻す。
「なんでぇ？　少しくらい触らせてくれてもいいじゃねぇか」
「いいから黙って。風船遊びをしてあげるから」
「風船遊び？」
問いかえす卓には黙って、志乃はその場にしゃがみこむ。卓の着物をはだけて、裾を帯の間に挟みこんだ。ふんどしを素早くほどき、ペニスを剝きだしにして唇に含む。
「あっ……おいおいおい、こんなところでそんなことを……」
志乃は一応形だけの抵抗をみせる卓を無視して、フェラチオをつづける。大きく左右にふくらんだカリ首を喉のずっと奥まで咥えこんで、唇をすぼめたり開いたり。両手で玉袋をやさしく引っぱったりやわやわ転がしたり。
「うぅ……む。なるほど、ふくらんできたぞ。これが風船遊びというものか」
卓は志乃の口の中で怒張が硬く勃起してくるのを感じ、うめくような声をもらす。太竿は完全にそそり勃ち、ちょっとした刺激を受けただけでも暴発してしまいそうだ。

「おい、そろそろいいだろ。風船が破れちまわねぇうちに、おまえのアソコに入れさせてくれよ」

しかし志乃は卓の呼びかけにはかまわず、ずちゅっぐちゅっと淫らな音をたてて剛直を吸いあげる。片手で陰のうを転がし、もう片方の手を自分の秘部に押しこんでいる。

「なにも自分でいじることたぁねぇだろ。オレがさんざん可愛がってやるから……」

「いいの。あたしの口の中に出して。お願い」

志乃は真っ赤に上気した顔でささやき、興奮してピクピクしている極太魔羅をまたもや深々と咥えこむ。卓の逸物と同じくらい勃起している陰核を自分で嬲りながら、野太い肉茎をじゅっぷじゅっぷと吸いあげる。

「いいんだな？」

うなぎ屋の女将は、返事のかわりに唇からはみでている卓の太竿を指でしごきたてる。

「うっ……出る！」

卓の腰がブルルッと震え、屹立した剛棒はその先端から白濁液をどぷどぷっと噴出する。

志乃は喉の奥を舌で塞いでスペルマを口の中いっぱいに受けとめた。栗の花のような独特の香を放つ大量の液でむせそうになるのを必死にこらえる。

その様子を見ていた卓は深く息をしながらやさしい口調で言った。

「気にしねぇで吐きだしちまえよ」
しかし志乃は樹液を飲みこみもせず、唇をきつく閉じたままでよろよろと立ちあがる。
「おい、吐けって……」
もう一度うながす卓の肩口を巨大な角材が背後から直撃した。
「うぐっ！」
突然の衝撃をかわすことすらできずに、絶倫男はどうとその場にくず折れてしまった。

☆

ざわざわと騒々しい気配を感じて、明日香は目を覚ました。
「身体つきもいいし、えれぇべっぴんじゃねぇか」
「マ×コもよくふくらんで真っ赤に熟れてるし、うまそうな女だな」
「こいつめ、遊び人の卓に犯られちまったのかな？」
「おい、気がついたようだぜ」
明日香はまばゆい光に目を細め、ゆっくりと起きあがる。身体を支えようと突いた両手の下で砂がじゃりっと音をたてる。
「でぇじょうぶかい？」
瞼を何度かパチパチさせるとようやく視力が戻る。その瞬間、明日香は自分が全裸でい

ることに気づいて真っ青になった。
「きゃあーっ！」
慌てて起きあがり、両腕で乳房と狭間を隠そうとする。胸もとには白濁した粘液がねっとりとこびりついて固まっている。明日香は自分のまわりを大勢の男女が取り囲んでいるのを知った。あまりの屈辱に唇を噛みしめてその場にうずくまる。
「可哀想じゃないか。誰か着物を貸しておやりよ」
「うるせぇや！　こんな見物はまたとないぞ。岡っ引きがくるまでの間、たっぷり楽しませてもらおうじゃねぇか」
明日香は『岡っ引き』という言葉に鋭く反応した。けれども、まさか全裸に剝かれている自分が岡っ引きだとは絶対に名乗れやしない。
「ふあぁーっ、よく寝たなぁ」
明日香の背後で目を覚ましたのは遊び人の卓だった。明日香同様全裸に剝かれ、その手にはウ×コのこびりついた銀の十手と明日香のものらしきハッピを握りしめている。
卓はのんきにあくびなんぞをしながらのそりと立ちあがった。
「きゃーっ、卓さますごぉーい！」
「おっきいわーっ、馬並みじゃないの！」

明日香の裸身目当てに群がっていた男たちの後ろで、娘たちが卓の息子を目にして黄色い悲鳴をあげる。
「ええい、どけどけどけぇい！　岡っ引き明日香さまの一の子分、ちゃっかり六兵衛さまのおでましでぃ！　おまえらそこをどきやがれっ！」
人垣がバラバラと崩れて、その向こうからずんぐりむっくりしたダルマ体型の男が転がるように現われる。
「六兵衛！」
「お、親分っ⁉」
ちゃっかり六兵衛は地面にうずくまる明日香の裸身を見ると、あんぐりと口を開けたままその場に立ちつくしてしまった。その目だけが素早くキョロキョロ動いて、剝きだしの肩や女らしく張りだしたヒップのあたりをたっぷりと視姦する。
「バカッ！　見てないでなにか着るものをおよこし！」
六兵衛はようやく気づいた風を装って自分のハッピを明日香の肩にかけてやる。それから卓のほうを向いて口を開いた。
「おい、遊び人の卓よ。明日香親分をこんな目にあわせたのはおまえだな？　おとなしくお縄をちょうだいしやがれ！」

しかし、ちゃっかり六兵衛ごときが凄んでみせたところで、肝っ玉の座った卓にはまったく通じない。
「岡っ引きの子分がガタガタ抜かすんじゃねぇや。オレはな、ある若後家とここいらでしっぽりずっぽりやってただけだ。こんなションベン臭い小娘になんぞ、指1本だって触れちゃあいねぇや」
「じゃあ、なんだって明日香親分の十手を持ってるんだ？　それに、親分のほっぺたや肩にべっとりこびりついているのは、おめぇが飛ばした精液じゃねぇのか？」
いつもはうかつな六兵衛だったが、今日はいつになく観察力が鋭い。屈辱のあまり、真っ青な顔で震えている明日香の頬を指で示す。すべすべした頬に飛び散った白い液はガビガビに乾いている。
「バカ言うな。こいつがオレのもんかどうか、誰が判断できるってんだよ？」
「そ、そりゃあそうだが……」
やっぱり頭の回転がちと遅い六兵衛は追及されると、すぐにしどろもどろになる。
すかさず明日香が横から助け舟を出した。
「六兵衛、こいつを番屋へしょっぴきな。事情を聞くのはそれからだ」
「ガッテンだ！　おいおまえ、一緒にこい！」

「冗談ぬかすな」

やじ馬たちは六兵衛を助けようと、裸足で後ずさる卓の逃げ道を塞いでしまう。

「やめてよ、卓さまは犯人なんかじゃないわっ！」

「バカバカ！　卓さまがそんなひどいことをするわけないでしょ！」

「うっせぇ、小娘は引っこんでろ！」

「六兵衛、お縄を！」

「しつけえな。オレはなにもしてねぇって言ってるだろ！」

卓と明日香、六兵衛とやじ馬たちが口々に言い合い、揉み合っているところへ、岡っ引きの上司にあたる同心が飛びこんできた。

「ええい、静まれ！　むやみやたらと騒ぎたてる者はすべて番屋へ引ったてるぞ！」

同心が叫んだとたん、やじ馬たちはくもの子を散らしたようにバラバラと四方八方へ逃げだす。

卓はうんざりした顔で後に残った3人の顔を代わるがわる見くらべた。

第5章　悲劇の美少女ルリ大夫

閑静(かんせい)な川べりの屋敷に14歳の可憐(かれん)な美少女ルリがやってきた。
「ただいま参りました」
奥の間の襖(ふすま)を静かに開けたとたん、ルリは思わず顔をしかめた。濃厚な酒の匂いと甘ったるい香(こう)の匂いが鼻先にまとわりついて気持ちが悪い。
「ルリか、待っていたぞ」
上座に座っているのはガマガエルにそっくりな赤ら顔の男だった。頑丈な体つきで、年の頃は40代前半。鋭い眼光で、日に灼けた顔に薄ら笑いを浮かべている。
町娘風の着物を身につけて黒髪を結(ゆ)いあげたルリは、エネルギッシュな男の姿を目にすると、ゴクリと息を呑む。嫌悪のあまり逃げだしたくなるが、ここまできてはもう引きか

えせない。襖を元どおりに閉めて、男のすぐ前に静かに正座する。
「ご用とは？」
「フッフッフ……。なにを遠慮しておる？　そんな遠くに座っていたのでは、満足に話もできまい」
「耳はよく聞こえますから」
この屋敷の主、**大黒屋豪二郎**はツンとして答えるルリの顔をしげしげと見つめて、またもや「フッフッフ……」と豪快に笑いだす。
「相変わらず手厳しいのう。つまらぬ意地など張らずに、もっと近うまいれ」
ルリは渋々豪二郎の側までにじり寄る。
けれど、ふたりの間の距離はようやく半分に縮まっただけだ。
豪二郎は眉をしかめてそっぽを向くルリをにらんだ。たおやかな美少女が思いどおりに動かないと悟ると、今度は手段を変えていくことにした。
「ルリ、実はここに、おまえにどうしても見せたいものがあってな。それでわざわざ使いを出して呼びにやらせたのだ」
「見せたいもの？」
「うむ。それはな、このわしが丹精こめて育てあげたもので、この世にふたつとない珍宝

なのだ。たぶんおまえはこのようなものはまだ一度も見たことがあるまい」
　まだ幼い表情を残す美少女ルリは、「珍しい宝物」という言葉に興味を抱いた。
　大黒屋は今でいうデパートのような存在で海外とも取り引きがあり、時おり舶来の品が店先に並ぶこともある。ルリが見せ物小屋で身に着ける薄い絹の衣装もそのひとつだった。
　ルリは見るからに極悪非道な雰囲気を漂わせている豪二郎に近づこうかどうしようかと悩んだ。けれども、最後には好奇心に負けて豪二郎の側まで静かににじり寄る。
「どうぞ見せてくださいませ」
「うむ。……いや、その前に1杯どうだ？」
「えっ？　お酒はちょっと……」
　豪二郎はルリの手に無理やりおちょこを握らせ、わざわざ灘(なだ)から取り寄せた銘酒を、とぷとぷっと注ぐ。
「悪いことは言わないからキュウッと飲め。わしの珍宝を初めて見た者は、たいてい驚いて気絶しそうになるからな。気つけ薬だと思って、前もって飲んでおくといい」
　ルリは素直にうなずいて、細い指で鼻をつまんで苦手な酒を喉に流しこむ。けほっとむせてしまい、小さなこぶしで胸のあたりをトントンと叩く。アルコールに慣れていないため、すぐに頬がぱあっと薔薇色(ばらいろ)に火照ってくる。

「これでよろしいでしょうか？」
「うむ。それではおまえにわしの大切な珍宝を見せてやろう」
あぐらをかいて座っていた豪二郎は、いきなり着物の前をはだけて八分立ちになっているペニスを剝きだした。
豪二郎の太竿は幼子の腕と見まちがえるほどの太さで、表面にはどす黒い血管がいく筋も浮かびあがっていた。亀頭は大きく松茸のような形で、カリ首が深くくびれている。遊び人の卓の剛直は黒光りしている上に形が整い、美しいとさえ思えるが、逆に豪二郎の太魔羅はグロテスクとしか言いようがない。
「ああっ、な、なにを⁉」
豪二郎の言葉どおり、ルリは驚きのあまり絶句してしまった。慌てて目をそらし、その場から逃げだそうとする。
だが、豪二郎は美少女の二の腕を素早くつかんで、その身を強引に抱きこんでしまった。
「フッフッフ……。志乃が申していたとおり、ルリはまだ生娘だったか」
「お、お母さまがなにか？」
ルリは震える声で問いかえしつつ、男の腕を振りほどこうと必死になる。
「わしの立派な珍宝を一度でも味わえば、男ぎらいのおまえにも色香が出てきていっそう

美しくなるだろう、となｌ」

　すっかり酒がまわっている豪二郎は、抱きしめただけでポッキリ折れてしまいそうなほど華奢な身体を畳の上にねじ伏せる。

「いやっ！　やめて」

　ルリは小さな拳で男の胸を叩く。けれど、もがけばもがくほど着物の裾ははだけ、目にも鮮やかな緋色の襦袢に包まれた白い脚があらわになる。

「やめてください！　ああっ、誰か……」

　豪二郎はよだれでぎらぎら光る唇をルリのおちょぼ口に押しつけながら、剛毛の生えた両手で乙女の身体をきっちり包みこむ着物を強引に剝いでいく。帯を解き、襦袢を裂いて雪肌を剝きだしにした。

「ほほう、これはうまそうなまんじゅうだ。ぽっちりと先が尖って、柔らかく手のひらに吸いついてくるぞ。どれどれ、味はどんなだ？」

　豪二郎は恐怖のためにガタガタと震えている美少女の乳房を片手でしぼりあげるようにつかむ。乳首に舌を這わせ、口に含んでしゃぶりはじめる。

「ひぃいいーっ！」

　ルリは絹を裂くような悲鳴をあげて裸身をのけぞらせた。ほんのひとくち飲んだだけの

酒にしびれ薬が混ぜてあったらしく、つっぱねたくても身体に力が入らない。
「やっ、やめてください。か……堪忍してぇ」
「バカな娘だ。こんなにうまそうにふくれたマ×コを見せつけられて、はいそうですかと黙って引きさがれるはずがないではないか」
豪二郎はお膳の上から料理の入った皿やおちょうしを片腕で全部払いのけた。お膳に座布団をかぶせ、わなわな震えているルリを抱きあげてその上に座らせてしまう。
全裸に剝かれたルリは、おしっこをする時のように細い両脚をM字に開いたあられもない姿にされてしまった。
「お父さま、もうこれくらいで堪忍してください」
生娘のルリはあまりにも恥ずかしい格好を取らされ、茶色がかった大きな瞳から屈辱の涙をほとばしらせる。
「泣くな、ルリ。これから天にも昇る心地にしてやるからな」
豪二郎は、羞恥にわななくルリの小さな桜貝のような秘唇をつまんで左右にひろげた。ぱっくりと開かれた割れ目を節くれだった指でゆっくりと嬲（なぶ）りあげる。
「こいつをくじられればどんな女もひぃひぃよがる。どら、ルリはどうかな?」
薄皮を剝いて小指の先ほどの花芯を露出させ、親指の腹でクリクリとこねまわす。

「くっ、くぅうっ」

ルリはビクビクッと裸身を震わせ、目を閉じてしまう。実の父親に狭間をくじられることは、自害したくなるほど恥ずかしかった。それなのに、触れられるとゾクゾクするような快感が身体の奥からこみあげてくる。

「ほほぅ、やはりルリもこの豆は敏感にできているとみえる」

豪二郎は卑猥な笑みを浮かべてつぶやき、こんもりと盛りあがった白い乳房を揉みたてる。ポツンと尖った乳首をジンジンするほど強く吸いあげ、執拗に歯を立てる。

「ひっ、ひぃいっ」

両の乳房と秘部を同時に責められると、ルリの息はいやでも荒く弾んできて、初めて味わう男の愛撫にとまどいながらも、上ずった声をあげてしまう。

太い指で秘部を揉まれ、桃色の真珠をまさぐられるたびに、腰がガクガク震えてきて意識がもうろうとしてくる。

「もうやめてください。お願いですから……」

「そうかそうか。そんなに言うなら、ここんとこをいじるのはもうやめてやろう」

恐ろしいほどの快感に歯の根が合わなくなっているルリは、ホッと胸を撫で降ろす。

ところが豪二郎は着物をいきなり全部脱ぎ捨ててしまった。

男の左の二の腕には約10センチの刀傷が赤黒く浮かびあがっている。傷はそれほど古くはなく、まだ2、3年しかたっていないように見える。

大黒屋豪二郎は完全に根元から屹立したグロテスクな巨根をゆらゆら揺らして、実の娘ルリの前に膝をつく。

「お、お父さま、なにを⁉」

怯えた声色で問いかけるルリの両の足首をつかんで、男はそれを自分の両肩に乗せる。次には下腹と下腹を密着させて、松茸のような亀頭を乙女の陰口に押しつける。

「ルリ、最初はちぃとばかし痛いかもしれないが、すぐによくなるからな」

「いやぁあぁーっ」

豪二郎は泣きわめくルリの細腰を強引に引きつけて、処女壺に太竿をねじこんでいく。指すら入れたことのない秘孔は、すぐに裂けて鮮血が飛び散る。

「きひぃいいいーっ！」

ルリは裸身を貫く激痛に耐えきれずに絶叫する。醜悪なペニスで股間を腹の奥まで深々と突きあげられて、息ができなくなる。涙をボロボロこぼして裸身をのけぞらせた。

「しっ、死ぬぅうっ。ああーっ」

嗜虐の徒と化した豪二郎は、息も絶えだえに訴える娘ルリを犯しつづける。挿入された

異物を押しだそうときつく締めつけてくる肉襞をこすりあげ、蜜壺を内側から拡張するように剛棒でえぐりたてる。
「死ぬっ、ひぃいいーっ」
美少女の華奢な身体は、まるで人形のようにガクガクと乱暴に揺すりあげられる。
ルリは自分が、息が詰まるか、あるいは狭間に生じた激痛のせいで死んでしまうような気がしていた。なんとかして父親の体を押しのけたいのだが、しびれ薬のためにどうしても力が出せない。
「おうっ！　こいつめ、淫らな液が出てきたようだぞ。どうやら、わしの珍宝で気持ちがよくなってきたと見えるな」
豪二郎の言葉どおり、ルリの乙女壺はまるで自己防衛をするかのように、ぬらぬらした潤滑液をにじませはじめた。おかげでペニスの抽送が楽になり、密着した秘部はぐちょっねちゅっと卑猥な音をたてはじめる。
「ああっ、あひぃいっ」
いつの間にか、半開きになったルリの唇から悦楽のあえぎ声がもれてくる。乳首は硬くしこり、絹のようにすべすべした雪肌は色っぽいピンク色に染まりはじめる。
「どうだ、気持ちがよくなってきただろう？」

ルリは熱に浮かされたような表情をしていた。無意識のうちに父親の抽送に合わせて腰を揺する。大事なところから湧き起こる快感は、岸に打ち寄せる波のように高く低く美少女の裸身を翻弄し、その波はしだいに高まってくる。
「ひぃいっ。……も、もっとぉっ」
生娘だったルリは自分が男に、それも実の父親に犯されているということを自覚していた。だが、（こんなことをしてはいけない）と思う反面、野太いペニスによって目覚めてしまった女の本能が、欲望を剝きだしにして快楽をむさぼろうとする。形のいい水蜜桃のような乳房を弾ませ、ヒップをくねくねくねらせる。
「あひぃいーっ、死んじゃううーっ」
豪二郎は何度も昇り詰める美少女ルリを思うぞんぶん凌辱しつつ、乳房をわしづかみにしてつねりあげた。
「ルリ、おまえ、志乃のところから『淫乱誘発振動機』を黙って持ちだしたそうだな？」
「し、知らないっ」
ルリは苦しげな息の下から言いかえす。
「ウソをつくでない。軽業団の子象は、徳×ご禁制の品を尻の穴に入れられて、突然暴れだしたのだろう。どうしてあんなことをしたのだ？」

豪二郎は責めさいなむようにルリの膣奥深く巨砲を突き入れる。
「知らないのぉおっ！　ああっひぃいいーっ。死んじゃうぅーっ」
ついにエクスタシーに達したルリは、両脚を父親の肩にあげたままの姿でぐったりとあお向けに倒れこんでしまった。
はずみで豪二郎の勃起が熱くひくつく膣から抜け落ちる。グロテスクな怒張はルリの腹部めがけて沸騰した精液をどくどくとぶちまけた。

☆

番屋へしょっぴかれた遊び人の卓は、取り調べがはじまるまでひとまず牢へぶちこまれた。
木製の格子をはめられた薄暗い牢には、荒くれ者や強盗などがてんでにとぐろを巻いている。古びた着物を着た卓を見ると、うさん臭げに鼻を鳴らす。
「なんでぇなんでぇ、色年増を頼んだのに、背ばっか高い色男がきやがったぜ」
「罪状はさしづめ不義姦通てぇとこかのう？」
卓は男たちの言葉を無視し、片頬に軽く笑みをたたえて牢の出入り口に近いところへどつかとあぐらをかく。
その真っ正面にがっしりした体つきの男が座りこんでいる。イノシシのような顔をした

男は、卓を見るとチッと舌打ちをした。
「おい新入り、おめぇ、牢名主の権造さまに土産物は持ってきたんだろうな？」
どうやらヤクザ風のイノシシは権造というらしい。すっかりその子分と化しているチャラチャラと腰の軽い男が卓にそう問いかけた。
卓はチャラ助を見もせずに大きくのびをして答える。
「はっはっは。ずいぶんとバカなことを言うやつだな。物見遊山の帰りでもねぇのに、土産なんか持ってるわけねぇだろうが」
「そりゃそうだ」
「ここは牢だぞ。名主なんかいるわけねぇぜ」
牢内で新入りに暴力をふるう権造をよく思っていなかった連中が、同意して笑いだす。
権造は怒りで顔を真っ赤にする。チャラ助は慌てて卓の目の前に立ちはだかった。
「おとなしくしてりゃ、いい気になりやがって！　おいっ、痛い目にあわせてやろうか？　権造さまの拳を食らえば、おめぇなんか粉みじんになっちまうにちげぇねぇぜ」
「ほほう。粉みじんか」
卓はいきりたつチャラ助に涼やかな笑みを返す。ふところへ手を入れ、いつも持ち歩いている革袋の中から親指大のビー玉を1粒取りだす。牢内の男たち全員に見えるように目

の高さまで持ちあげて、親指と人差し指で挟みこむ。次の瞬間、ゴリッという音がしてビー玉は粉々に砕け散った。
「すげぇ。粉みじんだぜ」
「おい、ひょっとして、あんた、遊び人の卓さんじゃねぇのかい？」
「おお！　そういやぁ、この顔には見覚えがあるぜ。卓さんにちげぇねぇや！」
「卓さん、背中の彫りものをおいらに見せてくんなよ」
男たちは口々に騒ぎだす。チャラ助は新入りの卓にそれ以上イチャモンをつけられなくなってしまい、不満げな表情で権造のそばへすごすごと引きさがる。
「ねぇ卓さん。あんた、あのビー玉を使って女が完全に気をやっちまうまで嬲れるんだってね？　できればそのやりかたってぇのをオレにも教えてくんねぇか？」
「そいつはおいらも知りてぇや。もちろんタダとは言わねぇ、ここを出たら必ず礼はするからさぁ」
「オレは、卓さんが持ってる名器ってーやつを見るだけでもいいぜ。もぉ、男でも感動しちまうくらいすげぇ代物（しろもの）だっつー噂じゃねぇか」
それまで黙って聞いていた卓は、大きなあくびをしてから答えた。
「しょうがねぇなぁ。そうも褒（ほ）められたんじゃあ、大事な息子とはいえ出さねぇわけにゃ

あいかねぇな」

そこで牢内をくまなく見まわしてみたが、実験台になるような女がいるわけはない。

「う〜ん、弱ったなぁ」

「そうだ！　オラっちにいい考えがあるぜ」

田舎なまりのある小男が、卓のそばに寄ってきてそっと耳打ちする。

「そうか、それじゃあ頼んだぜ」

卓がうなずくと、小男はいきなりその場にひっくり返る。両手で腹部を押さえてのたうちまわりはじめた。

「いててて！　いてぇよう。死にそうだぁーっ」

その声は同心や岡っ引きが控えている間(ま)まで響いた。

ほどなく、身なりを整えた明日香が現われた。

「やいやい、大きな声をあげてるのは、いったいどこのどいつだい？」

「こいつでさぁ。腹が痛いって騒ぎだしてよう」

小男の顔なじみらしい巾着切りが口裏を合わせる。

「仮病じゃないだろうね？」

「いてぇよう。あーっ、腹の皮が破けちまいそうだ」

明日香はうんざりした顔で牢の鍵を開けて中に入ってくる。ふたつ折りになってのたうちまわる小男の様子を見ようと肩に手をかけたとたん、背後からその身をはがい締めにされてしまった。
「ああっ。なにをっ……」
大声を出そうとする口を男の汚らしい手が塞ぐ。
明日香は「あっ！」と声をあげる間もなく両腕をつかまれて、その場にあお向けにひっくり返された。しゃにむにもがくのびやかな四肢を男たちが押さえつける。
「へへへへ、卓さん、こんなもんでどうだい？」
それまで黙って様子を見ていた卓が、ようやくすっくと立ちあがる。
遊び人の顔を見た明日香は、たちまち顔色を変えた。牢内が暗かったせいで、今の今まで卓がいるとは気づかずにいたのだ。
「よし、それじゃあひとっ働きするとするか」
卓は彫りの深い端正な顔に微笑を浮かべて明日香の足もとに立つと、自分の着物の裾を両手でつかんで、じらすようにゆっくり開く。股間は白いふんどしを突きあげるようにもっこりとふくらんでいた。
「おおっ、もう勃ってるじゃねぇか」

「いや、まだまだこれからだ」
卓は手早い動作でふんどしを脱ぎ捨てる。
黒光りする見事な剛直があらわになると、明日香は抵抗するのも忘れて男のシンボルに目を奪われてしまった。
「いいか、これからこいつでいい目を見せてやるからな」
遊び人は青黒い逸物を手のひらに乗せ、ひとつ目小僧のように女をにらむ亀頭をブルッブルッと振るってみせる。
「うぐーっ！」
明日香は口を塞がれたまま悲鳴をあげた。
「おい、ついでにあそこを剝きだしにしてくれよ」
男たちは待ってましたとばかりに、丈を短く仕立てた明日香の着物をまくりあげた。するとむっちりとした白い太腿と桃色の秘部が剝きだしになる。
「うお〜、うまそうなマ×コじゃねぇか」
「そいじゃ、卓さんの準備が整うまで、おいらが1発……」
「バカ言うな。こいつの味見は卓さんのお手本をじっくり見物してからだ」
明日香は男たちの言葉を聞いて、身の毛もよだつような恐ろしい危機が押し寄せつつあ

ることを悟った。四肢をわななかせ、必死に身もだえて逃げようとするが、男たちの手は少しも緩まない。

「それじゃあ、まずは最初に水鉄砲といこうか」

と言いながら、卓はふところからギヤマン製の水鉄砲を取りだした。

薄い青緑色の水鉄砲の中には、透明な液体が3分の2ほど吸いあげられている。入牢する時に身体検査を受けたが、ビー玉や水鉄砲ごときで牢破りができるはずはないと、没収されなかったのだ。

牢内にいる者は卓が手にした水鉄砲を見ると、一様にキョトンとした表情を見せる。

「そんなもん、どうやって使うんでぇ？」

「はっはっは。こんなふうに使うんだ」

遊び人の卓は、わなわな震えている明日香の太腿を左右にひろげ、縮れた毛にふちどられた桜色の割れ目を指でなぞり、男たちにその指先を見せつける。

「ほらな、まだここは乾いてるだろ。でも、こいつを使って少したてば、たちまちぐしょぐしょに濡れてきやがるからな」

「わかった！　マ×コに水鉄砲で水を噴きつけるんだろ？」

卓はかぶりを振って明日香のアヌスに指を這わせる。

「まずはこいつを責めるのさ」

紫色のすぼまりを指で拡張し、水鉄砲の先を突き立てる。異物を挿入された刹那、明日香は半裸に剝かれた身体をビクッとのけぞらせた。ちゅうーっと音をたてて透明な液体が直腸に注入される。液の冷たさと行為のおぞましさに、白い太腿に鳥肌がプツプツと浮かんでくる。

「卓さん、そいつの中身はなんだい？」

「別に決めちゃあいないんだが……水の他には酒なんかでもいいな。こいつをたっぷり注いだら、勝手にもれてこないようにきっちり栓をする……と」

ビー玉を5つ6つ手に取って、菊門に押しこんでいく。

「そうかぁ、ビー玉っつうのはガキの遊び道具だとばっか思ってたけど、女を慰めるのにも使えるのか」

「頭がいいんだな、卓さんは」

卓は「いやあ、それほどでも」と謙遜して頭をかく。それから、学者ぶったまじめな顔で、男たちに命令する。

「それじゃ、お次はこっちといこう。おい、こいつが暴れて怪我をしないよう、きちんと押さえているんだぜ」

「合点(がってん)だ！」

若後家キラーは、恥辱の涙を流す岡っ引きの秘唇を指でかきわけると、鮮やかな色をした肉蕾を剝きだしにして指でつまみあげる。

「いいか、おまえらも知ってるだろうが、こいつは女が一番感じるところだ。指でくじったり、舌で舐めたり。口に含んで吸いあげてやってもいい。でも、あんまり強く刺激すると、気持ちがよくなる代わりに痛くなるから、なるべくやさしくしてやるんだ」

「ふんふん。そいつは知らなかったぜ」

「わははは……。そんなだからおまえは女にきらわれるんだよ」

薄汚い手ぬぐいで口を塞がれた明日香は、十数人の男たちに狭間を視姦されて、子供のように泣きじゃくっている。肌に触れるがさついた男の手や物欲しげな目つきが、おぞましくてたまらない。それなのに、卓の指で敏感な肉芽をコロコロくじられると波のように快感がこみあげてきて、腰が抜けそうなほど気持ちよくなってくる。

「むうっ……うっ、うぐうーっ」

犯罪者たちの前で感じてはいけない。ぶざまな姿を見せてはいけない。そう思うのに、明日香の身体はあまりにも正直に反応していく。液を注入された直腸はコロコロと奇妙な音をたてていて、今すぐにでも脱糞したくてうずうずしている。ほんのちょっと下腹を押



はっ
はあっ
ぐぽっ
ぎゅっ
くにゅ
むぎゅっ
ぬちゅっ
ぬちゅっ
にゅぷっ
ぐちゅっ
にゅるっ

されただけで、柔らかくなったものがビー玉と一緒にアヌスから飛びだしてしまいそうだ。その上、陰口はぬるぬるした透明な潤滑液をにじませはじめている。

「ふっ、ふぐぅー」

「どうやら準備は整ったようだぜ。下のお口が物欲しそうによだれを流してやがる」

陰口を嬲りあげた卓の指には、明日香の蜜壺がもらした秘液がたっぷりとまとわりついている。指を開くと、液はネットリと糸を引いた。

「そう言う卓さんのもすっかりそそり勃ってるじゃねぇか」

「ん？　まあな」

卓の怒張は明日香を嬲るうちに、すっかり勃起していた。青黒く光るご自慢の極太魔羅を男たちもものの珍しげに見つめている。

「それじゃあそろそろ……」

明日香の身体は全裸に剝かれ、卓が挿入しやすいように男たちの手で宙に高く持ちあげられ、美しい裸身を大の字に開いた格好で固定された。薄桃色の秘唇はぱっくりと開き、膣口は男の剛直を待ちわびるように秘液を吹きだしている。

「いくぜ」

卓は大きく張りだした亀頭を明日香の蜜壺に叩きこむ。

虎の女によってバイブで傷つけられた明日香の処女膜は、より太い卓の絶倫棒をぶちこまれて無残にもますます裂けてしまった。

「んぐぅぅーっ！」

嫁にいくまではと大切に守りつづけてきた純潔をとうとう遊び人に奪われた明日香は、大きく裸身を震わせる。絶望と憎悪がごちゃまぜになって胸の奥からこみあげてくる叫びも、口を塞がれているので声にならない。それでも浣腸液のせいでもれてしまいそうなウ×コをこらえようと必死になる。

その時、牢の外に毛並みのきれいな三毛猫がふらりと通りかかった。金色に光る目で牢内を一瞥し、またふらりと向こうへ歩いていく。それは卓が密偵に使っている化け猫の小雪だった。

卓は狭あいなヴァギナに野太いペニスを抽送しつづける。ふと、明日香の狭間から時々顔を出す太竿の表面に鮮血がついているのに気がついた。

「初物だったか。こりゃあ悪いことをしたな」

「いいじゃねぇか、気にすんなよ」

「そうだそうだ。遊び人の卓さんの暴れん棒を心ゆくまでたっぷりごちそうになれるってえんだ。こいつにとっちゃあ、ありがたいことじゃねぇか」

男たちは口々に笑いながら明日香の肌を撫でたり、乳房をこっそり揉みあげたりしている。

明日香は股間を引き裂く激痛のために息もつけず、卓の思うがままに凌辱されている。

「生娘(きむすめ)のくせにマ×コをぐじょぐじょにしやがって、なんてスケべな女なんだ」

「卓さん、そろそろオイラたちにも味見をさせてくれよ」

「いや、その前に、そろそろ水鉄砲の利き目が出てくるはずだ。そいつを見物してからのほうがいいだろう」

美しい岡っ引きを犯す卓の肉茎は熱く濡れている女の花奥で思うぞんぶん暴れまわる。怒張をしごくように出し入れすると、腰のあたりがジィンとしびれてきて、今にも発射してしまいそうなのだが、具合のいい蜜壺をあっさり手放すのは惜しくて、歯の根を食いしばるようにして欲棒をピストンさせる。

「おいっ、そろそろ出しちまったらどうだ?」

完全に処女を失った明日香は、もうろうとしながらも必死になって菊門を締めつけていた。けれど、蜜壺を熱い剛棒でかきまわされると同時に肉芽をくじられて、とうとうこらえがきかなくなってきた。鼻の奥から甘えるような呻き声をもらす。

「むぐっ、ふむう～っ」

卓は最後の手段とばかりにクリ×リスをつまんで引っぱる。

とたんに明日香は気をやってしまった。ビクビクッと裸身が震え、その拍子にアヌスから力が抜けて、ビー玉が飛びだす。コロコロ転がるオモチャの上に水っぽくなったウ×コがぶちまけられた。

「ひゃあー、十手を預かる天下の岡っ引きが糞をもらしやがったぁ！」

「くせぇくせぇ！　鼻が曲がっちまいそうだぜ」

口々に騒ぎたてる男たちをよそに、卓は極太ペニスを狭間から抜き取って、勢いよくスペルマを放出した。ブルルッと亀頭を振るって残り汁を出しきりながら説明する。

「これでもうわかっただろう。水鉄砲とビー玉でウ×コを我慢させりゃあ、女のアソコはいやでも緊張して締めつけがよくなってくる、ってーわけだ」

「そうか、そうか。いやぁ、すげぇもんを見せてもらったぜ」

「さすがは若後家殺しの卓さんだな。その極太魔羅なら、どんな女でもイカせられるんだろう？」

「あいにくオレは好みの女にしかこいつを食べさせてやらねぇことにしてるんだ」

「へぇ、そうかぁ。それにしてもうらやましいなぁ」

男たちは気絶した明日香をいったん土床に降ろす。

「それじゃあ、次は誰が犯る?」
「オレに決まってるだろ。オレのは準備ができてるぜ」
「バカ言うな。おめえの粗チンじゃかわいそすぎる。イクにイケねぇに決まってらあ」
順番を争って騒ぎたてる犯罪者たちをよそに、卓は心配そうな目つきで、ぐったりしている明日香の美貌を見つめている。
「おい、遊び人の卓」
威圧感のある声を耳にして、卓は目線をあげた。相変らず牢の隅であぐらをかいている牢名主の権造がにらみつけている。
「土産がないなら、そいつを食わせてもらおうか」
「なんだよ、まだそんなくだらねぇことを言ってるのか?」
いざとなったら腕力で勝負するつもりで、卓は組んだ両手の骨をポキポキッと鳴らしてみせる。権造もゆらりと体を起こして立ちあがる。
「よしなよ、卓さん! ここでケンカをしたんじゃあ、見張りのやつらに見つかっちまうよ」
「雑魚(ざこ)は引っこんでいやがれ!」
権造の手下になりさがっているチャラ助が口を挟む。

「うるせぇ、おめえだって雑魚じゃねぇか」
牢名主ぶる権造に不満を持っていた男たちがチャラ助に飛びかかっていく。
卓は騒ぎに乗じて明日香を犯そうとしている小男の肩をつかんだ。
「なんでぇ、文句でもあんのかよ？」
ジロリとにらむ小男に黙ってうなずき、牢の外を顎で示した。
見ると、同心たちがわらわらと駆けつけてくるではないか。
「おまえら、なにをしているーっ!?」
同心と岡っ引きは牢に飛びこみ、気絶している明日香の身体を素速く外へ運びだした。
抵抗する犯罪者たちを手刀や十手で次々と倒す。
その中のひとりが卓の前へやってきて、うやうやしげな顔つきで頭をさげた。
「卓之進さま、どうぞ牢からお出になってください」
「そうか、取り調べをするんだな？」
「いいえ、つい今しがた小雪というかたがいらして、卓之進さまのことを『かくかくしかじか』と……」
「小雪が？　ったく、あいつめ」
その場にどっかり座りこんでいた卓は、渋い顔になってサッと立ちあがる。コキッポキ

ッと首の骨を鳴らしながら、同心の後について牢を出た。
控えの間では人間に化けた小雪が卓を待っていた。卓を見ると眉をしかめる。
しかし卓は小雪を無視して同心に問いかけた。
「おい、あいつはどこへやった？」
あいつ、すなわち明日香は隣室に運びこまれていた。牢内で凌辱された裸身には番屋の印が入ったどてらが1枚かけられている。
ひとりで入ってきた卓は、明日香の横へ静かに腰を降ろし、乱れて頬にかかる黒髪を撫であげてやる。
その気配に気づいたのか、美貌の岡っ引きはゆっくりと瞼を開いた。
「よりによって牢の中であんなことをして、すまなかったな」
卓はひとことだけ詫びを入れる。
明日香は目の前にかがみこむ遊び人をにらみつけて、屈辱のあまりわなわなと震えだす唇を嚙みしめた。溢れてくる涙を見られまいと、どてらを鼻の上まで引っぱりあげて卓に背中を向ける。
「なぁ、江戸の悪人どもを追いまわすのもいいが、オレはおまえの別な姿が見てみたい。いっぱしの小娘みてぇに着飾って歩くおまえの姿がな」

卓はほっそりした明日香の肩に手をかけ、勇気づけるようにぎゅっと力を入れる。そしてそのまま部屋を出た。

番屋の外では、やはり小雪が待ちかまえていた。

「いたずらにしては度がすぎますよ」

「うん」

素直にうなずく卓を見て、小雪は意外に思った。歩きだす卓の後についていきながら首をかしげる。

「どうかしたんですか？」

考えごとをしていたらしく、一瞬卓の返事が遅れる。

「……ん？　いや。それで、城のほうはどうだった？」

「それが、あの菜美姫にお輿入れの話が急に持ちあがったとのことで……」

「ほう。それで相手は大名か、それとも公家……」

「いえね、それが、お相手は大黒屋という呉服問屋のせがれで岩太郎という17、18歳の若造だそうで」

卓はその場に立ちどまり、血相を変えて小雪に問いかえす。

「なにっ、徳×の姫君を呉服問屋に嫁がせるだと？」

「卓さま、ここでは人目につきすぎます。ちょいとこちらへ」

小雪は卓を人けのない路地へ連れていく。

「さる筋によると、大奥の正室さまや側室たちの散財が積もりにつもって膨大な借金となり、その借金と引き換えに菜美姫さまを大黒屋へお輿入れするということで話がまとまったのだそうです」

「ば、ば、バカなことを言うなっ！」

あまりにも非常識な話に、卓は思わずどもってしまった。体の奥から怒りの塊がぐぐっとこみあげ、全身がブルブルわなないてくる。

「そうか。だからジイとお光が共謀して菜美をオレんとこに送りこみやがったのか」

「そのようですわ」

「となると、あの忍びの者は菜美を奪回するために殿が差し向けたんだな？」

「いいえそれはちがいます。殿は、表面上は菜美姫を大黒屋へ嫁がせるとおっしゃっておられますが、本心では姫を手放したくはないのです。ですから、なんとかして卓之進さまに今回の危機を救っていただきたいと……」

「じゃあ、あいつらは大黒屋が差し向けたのかもしれねぇな？」

卓の鋭い推察に、小雪もこっくりうなずく。

「うかうかしちゃあいられねぇ！　とっとと菜美んとこへ戻らねぇと……」
「安心なさいまし。姫さまのもとには、卓さまと入れ替わりに**風見鶏の弥太郎**を見張りにつけてあります」
「弥太郎か。そいつはいいや」
と言いつつも、卓は急ぎ足になって大通りへ出ていく。小雪が後からつづいた。
「小雪、おまえは大黒屋をさぐってくれ。オレは……」
「おおい、そこをいくのはナメクジ長屋に住んでる遊び人の卓さんじゃねぇか」
ふと目をやると、通りの向こうから八百屋の総助が小走りにやってくる。野菜が入った天秤棒を担いだ姿でふたりの前まで駆け寄った。
「なぁ卓さん、そこいらで団子屋の千代ちゃんを見かけなかったかい？」
「千代？　千代がどうかしたのか？」
「それが、朝1番で団子を食いにいった時はちゃあんと店にいたんだが、今いってみると、店の中はからっぽなんだ。池田塾はもう終わってるはずだし、今日は昼から店を休むとは言ってなかったんだけどよぉ」
総助は眉をひそめてボリボリと頭をかく。
「オレがしっぽりずっぽりなんて言っちまったのがまずかったのかなぁ？」

「しっぽりずっぽり？」
「ああ。昨日の夜、卓さんちが騒々しくて眠れなかったってぇんで、卓さんが誰かとしっぽりずっぽりやってたからじゃねぇか、ってついうっかり口が滑っちまってよぉ」
その瞬間、卓のゲンコが総助の脳天をゴンと直撃した。
「いててててっ！　なにすんだよぉ？」
「生娘の千代にそんなバカなことを吹きこんだ罰だ。おまえのせいで、千代がどこぞのよくねぇやからに、『しっぽりずっぽりってなんだ？』と聞いて、『それじゃあ教えてやろう』てな具合にしっぽりずっぽり犯られちまってたらどうすんだ。えっ？」
「そうか。ごめんよ、卓さん」
総助はシュンとうなだれてしまった。
「まぁ、もう言っちまったもんはしょうがねぇや。小雪、さっきの件、頼んだぜ。オレはひとまず長屋へ戻って千代がいないかどうか……」
「卓さん、そいつはオレが調べにいくよ」
「それじゃ、よろしく頼んだぜ。もし千代がいてもしっぽりずっぽりやるんじゃねぇぞ」
「ぱおぱおーん！」
総助に念を押していた卓は、聞き覚えのある遠吠えを耳にしてその場に硬直した。

どしっどしっと地響きが起こり、見覚えのある灰白色のものが腕に巻きついてくる。
「ぱふぅうん♡」
「うあぁ～。『ぱふぅうん♡』じゃねぇだろ。こいつめ、犬コロみてぇにオレを追っかけまわしやがって。あ～もう、どうすんだよぉ？」
総助と小雪はうんざりしてお天道さまをあおぐ卓を見て、クスクス笑いだした。

第6章　看板娘千代★大ピンチ

団子屋の看板娘・千代は川べりの屋敷の一室でシクシクと悲しげにむせび泣いていた。
可憐な少女は哀れにも全裸に剝かれ、大きく割られた下肢の間には**大黒屋のひとり息子岩太郎**(がんたろう)がうずくまっている。
岩太郎は愛液でびしょびしょにした口のまわりを拭って、千代に問いかけた。
「グフフフ……。次から次へとよだれが溢れてくるぞ。そんなにオレサマの舌が気にいったのか？」
けれど千代は答えようとしない。えっくえっくとしゃくりあげ、男の愛撫に応えまいと必死になってこらえている。柔らかな乳房やウエストのあたりに赤紫色のキスマークがいくつも浮かびあがっていた。

「知ってるか？　こうやってベロベロ舐めてると、おまえのスケベェなお豆が喜んでコリコリに硬くしこってくるんだぜ。熟したさやえんどうみてぇに、皮が自然と剝けてプクッと飛びでてくるんだ。おらおら、ずいぶんと卑猥なマ×コじゃねぇか」
「ううっ……」
ピンク色の桜貝を左右に開かれ、敏感な肉芽に歯を立てられる。すると、千代の身体の奥から電流のようなものが湧き起こって、背筋がゾクゾク震えてくる。その快感は頭の芯まで達して、愛撫に応じる以外のことはなにも考えられなくなってしまう。
岩太郎はその武骨な手で秘孔の周囲をまさぐり、ぬるぬるした液を花芯にこすりつける。千代の裸身はそのたびにわななき、尖った乳首が小刻みに震える。
「あふっ。もっ、もっとして……」
千代は無意識のうちに甘い声でおねだりをしてしまった。柔肌を舐めあげる舌と手の感触は身の毛がそそけ立つほどおぞましい。それなのに、身体は男の愛撫を求めてしまう。羞恥で頰を真っ赤に染めて、涙で潤んだ双眼を閉じて唇を震わせる。
「グフフフ……。そうねだられたんじゃあ、やってやらねぇわけにもいくめぇ。……と言いたいところだが、もっと舐めて欲しけりゃ、オレサマのチ×ポを舐めてみやがれ」
岩太郎は、身体から力が抜けてしまった千代を布団の上に座らせる。そして半勃ちにな

っている自分のものを、横に置かれていた酒が入った土瓶の中に根元まで浸した。
「うっ……。ちょっとしみるな」
岩太郎は千代の小さな手をつかんで酒まみれの剛直を握らせた。
「ひイっ」
生まれて初めて男のものを見た千代は、怯えてそれを放りだそうとする。
しかし岩太郎は美しい看板娘の手を片手ですっぽりと包みこみ、自分の肉茎ごと千代の口へと持っていく。
「むっ、ムううっ」
いやがって首を左右に振る千代の頭を押さえつけて、ツチノコのような勃起の先で無理やり唇を割ろうとする。それでも千代は抵抗するので、岩太郎はその鼻をつまみあげた。千代は息ができなくなり、ついに口を開いてしまう。その隙を狙って硬く張りつめた肉茎が強引に押しこまれた。
「おらおら、ちゃあんと根性入れて舐めねぇか。イクまでやんねぇと、そのきれいな顔を両手で殴ってぼっこぼこにしてやるぜ」
「ンぐーっ」
岩太郎は脅しをかけるように千代の乳首をつねりあげる。

千代は慌てて男のものを舐めはじめた。口の中に酒と体臭が混ざり合った匂いがひろがり、つい吐きだしそうになってしまうのを必死にこらえる。陰毛が鼻をくすぐるほど深々と勃起を咥えこんで、口中を塞ぐ亀頭を舌で押しかえす。

「そんなもんじゃイケねぇや。もっと竿の表面を舐めたり指でしごいたりするんだよ」

ウブな千代は泣きながら岩太郎の勃起を吐きだす。震える手で幹を支えて、どす黒い血管がうねうねと浮きでた表面を尖らせた舌の先で舐めあげる。先割れから溢れでたカウパー液に指が触れると、ビクッとして手を引っこめる。

「バカめ。そいつも舐めるんだよ。チ×ポの先っぽだけ口に含んでチュウチュウ吸ってしゃぶってみろ」

千代はビクビクしながら言われたとおりにやってみる。ふっくらした頬をすぼませ、亀頭を咥えて一生懸命吸いあげる。口の中に苦い味がひろがって気持ちが悪い。

「こいつもまさぐれよ」

竿の下にぶらさがった玉袋のぶよぶよした感触にとまどいつつ、店でふかした団子の粉を丸める時のように、やさしくこねまわす。

「うんっ……。うめぇじゃねぇか。待てよ。おめぇ、ひょっとしてオレサマの魔羅を舐めながら感じてやがんのか？」

岩太郎の言葉は図星だった。
団子屋の看板娘は小さな花びらのような朱唇に男のシンボルを咥えこみつつ、もじもじと太腿をこすり合わせていた。未熟だった身体も男の舌によって開発され、今では甘い疼きが狭間からこみあげていた。ピーチピンクの乳首は硬くなって赤く染まり、乳房がちょっと揺れただけでもジンジンしびれてくる。
「こいつめ、もうたまらねぇって顔をしてやがる。生娘のくせに、淫売みてぇによがりやがって」
生まれて初めて欲情に駆られた千代は、目尻をほんのりと朱に染め、色っぽく潤んだ瞳で岩太郎を見あげる。唇から勃起を抜き取り、両手で野太い棒をやさしく上下にしごきながら震える声で訴える。
「アソコが熱くてたまらないよぉ。身体中が火照って気がヘンになりそうなの」
「そんなの、自分でいじればいいじゃねぇか。オレがしてやったように、指でオマ×コを慰めてやるんだよ」
岩太郎は千代の裸身を乱暴に押し倒す。小さな右手をつかんで濡れぬれになっている狭間へ導き、愛蜜に濡れた姫貝を左右に開くと、勃起したクリ×リスを千代の指で自ら嬲らせる。

「あっ、はひぃいっ！」

自分の指でちょっとこすっただけなのに、敏感な千代は瞬時にして絶頂まで昇り詰めてしまった。

「もう気をやりやがった。ほんのまばたきするくらいで気絶するとは、お手軽な女だぜ」

岩太郎は、まだひくひくしている千代の裸体にまたがっていく。小振りな乳房をつかんでその間に剛直を挟みこんだ。

「ちいっ。もうちっと大きければな……。まぁいいか」

瑞々しい乳房で強引にパイズリをしていると、千代が気づいて目を覚ました。

「あっ、なにを……」

「見ればわかるだろ。おらおら、おめぇは自分のマ×コでも嬲ってな。……おっと、上のお口でこいつをしゃぶっとくといいや」

岩太郎は千代の口に大きな亀頭を含ませた。そのままシコシコパイズリをつづける。

父親譲りのグロテスクな極太チ×ポは、柔らかな美肉に包まれると、完全に硬くそそり勃ってくる。

「ううっ……。そうだ、先っぽの割れてるとこを舌の先でえぐるみたいに……。いいぞ、最高だぜ」

岩太郎は「うっ」と重苦しい声をあげると同時に千代の口中へ白濁した液を噴出した。
千代は思いがけないことに驚き、ペニスと樹液を吐きだそうとする。
「おらおら、全部飲みやがれ。1滴でもこぼしやがったら承知しねぇからな」
千代は両手で口を押さえ、栗の花の香のする苦い液を呑みくだそうと無理をする。けれど、とうとうこらえきれなくなって、ぷはっと吐きだしてしまった。
「むっ……。げほっ、ごほっ……」
岩太郎はカッとなって千代の肩を乱暴に蹴倒した。
「バカ女！　それくらい飲めなくてどうする」
「ご……ごめんなさい。えっ、えっく……」
処女はまだ破られていないものの、身も心も汚されてしまった千代は、泣きじゃくりながら布団の上に顔を埋める。脳裏には遊び人の卓の顔がくっきりと浮かびあがっていた。
「おまえはオレサマの嫁になる女だ。今みてぇに逆らいやがると、平手でぶん殴ってやるからそのつもりでな」
「お嫁に？」
千代は布団に突っ伏したまま、心の中で（どうして？　なぜあたしがこんなやつのお嫁さんにならなくちゃいけないの？）と聞きかえす。けれど、声に出して言えば殴られそう



な気がしてそうはできない。
（なにもかもが夢で、次に目覚めた時にはナメクジ長屋の自分の部屋にいればいいのに……）と両目をギュッとつぶってしまう。
「岩太郎、いるのかい？」
女の声とともに、襖が細く開かれた。
「あっ、義母（かあ）さん。なにか用かい？」
座敷に入ってきたのはうなぎ屋の女将、志乃だった。志乃はうつ伏せになっている千代の裸身を見ると、目を細めて岩太郎に問いかける。
「おやおや、気が早いねぇ。もう犯っちまったのかい？」
「いいや、父さんに言われたとおり、まだ中には入れちゃいないよ。その代わり、たっぷりオマ×コを舐めてやって、オレのチ×ポをしゃぶらせたけど、お姫さまは正真正銘生娘のままさ」
「そうかい。それにしても、おまえ、あまり無体なことはするんじゃないよ。菜美姫さまは大切にお預かりしておかないとねぇ」
「わかってるって。でもよぅ、こいつはオレんとこへ嫁にくるんだろ？　だったらちぃーとばかし楽しんだっていいじゃないか」

「それはそうだけど、もしも城のやつらに姫さまをかどわかしたことがばれたら、騒ぎになるのは目に見えてるからねぇ」

「う～ん、そうだな。オレもこいつに逃げられないように気をつけるよ」

千代は眠りこんでいる風を装いながらも、しっかり聞き耳を立ててふたりの会話を聞いていた。

（菜美姫さまって卓さんのところへ押しかけてきたあの娘のことかしら？　だとすると、あたしが菜美姫さまじゃないとばれたら、殺されてしまうかも!?　ここはひとまず、男の言うなりになって命をつながなくちゃ……）

ところが、厠へいきたくなった岩太郎は、千代の手足を縛っておこうと、彼女の身体をあお向けに転がしてしまった。

その顔を見た刹那、志乃が「あーっ！」と声をあげる。

「岩太郎、こいつは菜美姫なんかじゃないよ！」

「本当かい、義母さん」

素姓のバレてしまった千代は、弾かれたように起きあがって、座敷から駆けだそうとする。だが、岩太郎が素早く抱きつき、どうっとその場に押し倒されてしまった。

「たっ、助けてえぇっ！」

岩太郎は叫びだす千代の口を大きな手で塞いで義理の母親を見あげる。

「なんでぃ！　こいつめ、ナメクジ長屋に住んでるって言うし、父さんから聞いてた姫さまの年格好と似てたから、てっきり菜美姫だと思ったんだ」

「バカだね。名前は確かめなかったのかい？」

「ああ。どうせ聞いたって本当の名前は名乗らないと思ったからさぁ。くそっ、こいつめ、ケツの穴までたっぷり犯してやる。それからす巻きにして大川へ叩きこんでやるぜ！」

激昂した岩太郎は千代をうつ伏せにして、桃のようなお尻を高々と持ちあげた。次に、薄紫色のすぼまりを指でくじって猛り狂った怒張の先をねじこもうとする。

「お待ち」

「どうして、義母さんだって悔しいだろう？」

「そりゃあね。でも、その娘は卓の妹みたいな存在なんだ。うまく使えば大金が転がりこんでくるかもしれないよ」

「本当かい？」

「もちろんさ。卓さんってぇお人は、ああ見えても『やんごとなきおかた』だからねぇ」

志乃は狡猾（こうかつ）な笑みを浮かべて義理の息子岩太郎にうなずいてみせた。

☆

卓と別れた小雪は、物陰に隠れて呪文をとなえた。
「どっろろん＝ＰＡ！」
ぽわぽわ～んと白煙があがると、小股の切れあがった美女の姿はきれいさっぱり消えうせて、代わりにほっそりとした毛並みの美しい三毛猫が現われる。
化け猫の小雪は往来を素早く駆け抜け、大黒屋までやってきた。すぐに偵察をはじめたが、大黒屋の主、豪二郎は不在で行き先がつかめない。
しばしの間、裏庭をうろついたあと、もしやと思って縁の下に潜ってみる。
（おや、こんなところに木箱が並んでるじゃないか。立派な蔵がいくつもあるのに、わざわざ縁の下に木箱を隠しているなんて、怪しいわ。卓さんに報告しなくちゃ）
裏庭から路地へ出た小雪は、着物の上に『春風堂』と染めた前かけをつけた女に出くわした。瓦版屋『春風堂』の女主人みやびだ。
小さなフロシキ包みをかかえたみやびは、三毛猫の小雪に尾行されていることなどまったく知らずに通りをスタスタ歩いていく。路地をいくつか曲がって川っぷちまでくると、さっと左右を確認して、ある屋敷に入っていった。
小雪はひとまず屋敷の周囲をくまなく探索した。その裏手が川に面していることを確認して、垣根の壊れたところから庭に侵入する。誰にも見つからないように注意しながらあ

たりをうろつき、裏口の木戸が細く開いているのを見つけて中に忍びこんだ。
両耳をヒクヒクさせて人の気配をさぐるうちに、みやびの足音が聞こえてきた。
みやびは廊下を歩いていき、一番奥の襖の前で足をとめた。
「姉さん、いるかい?」
「お入り」
襖を開けると、大黒屋豪二郎の二度目の妻でうなぎ屋の女将である志乃が、座卓の前に座ってキセルをふかしている。
妹のみやびは反対側に座って座卓の上にフロシキ包みを置いた。重たい物が入っているらしく、包みはゴトッと鈍い音をたてた。
志乃は紫煙をふうっと虚空に吐きだして、妹に問いかける。
「それで、首尾はどうだい?」
「上々さ。姉さんに言われたとおりの人数が集まったよ。抜け忍の他はほとんど雑魚(ざこ)ばっかりだが、頭が悪い分、うまく使いこなせそうさ」
「そうかい。それはよかった。ところで、頼んであった物は持ってきたんだろうね?」
みやびはうなずき、フロシキの結び目を解く。すると中から黒く光る舶来の短筒が現われた。

志乃は冷酷な光を放つ鉄の塊を見ると、緊張の面持ちになる。
「こいつが徳×ご禁制の短筒かい。どうやって使うんだい？」
「先っぽの穴から火薬を入れて、弾をこめるんだ。そしてこの引き金を引けば、ズドン！うまく当たれば目ん玉くらい簡単に吹っ飛ぶって話だよ」
「へぇ、不思議な飛び道具だねぇ」
志乃は感心しながら短筒を手に取ってあちこち眺めまわす。
「姉さん、そいつの代金はいつ払ってもらえるの？」
「安心しな。今夜の襲撃が成功したらすぐにでも耳をそろえて払ってやるよ」
「ねぇ、フレフレ団が復活したのはいいけれど、襲撃は本当に成功するんだろうね？」
「もちろんさ。でも、どうしてそんなに念を押すんだい？」
みやびは眉をしかめて姉を見つめる。
「お鈴の雇い主を調べにきた遊び人の卓がどうも気になるんだよ。お鈴を雇った『マサ』はあたしだと疑っていたようだし、心配でならないんだよ」
「あいつのことなら平気だよ。お鈴とあたしで罠にかけてやったから、今頃は牢屋の中さ。……そんなことより、あいつの極太魔羅の味は最高だっただろ？」
「えっ？　どうしてそれを……」

みやびの頬がみるみるうちに朱に染まる。

「あいつは根っからの女好きだからね。女が完全に気をやるまでいたぶるのが大好きな男だからさぁ。おまえを尋問すると見せかけて、しっぽりずっぽりやってったんだろ？」

志乃はくっくっくと笑いだす。

「そういう姉さんも卓には1発犯らせてるんだろう？　念を押すようだけど、フレフレ団のこと、あいつに悟られちゃあいないだろうね？」

「だいじょうぶだって。いくら賢そうに見えても、遊び人は遊び人。それにこっちには卓が大事にしている小娘がいるんだ。いざってぇ時にはあの小娘を人質にして、まんまと逃げおおすつもりなのさ」

廊下で聞き耳を立てていた小雪は、思わず耳をそばだてた。

(『小娘』って誰のことかしら？　菜美姫には風見鶏の弥太郎を護衛につけてあるし……。そうか、お千代ちゃんだわ！)

小雪の胸は不安でドキドキしはじめる。先刻出くわした八百屋の総助の話によると、千代は昼頃から行方をくらましてしまったらしいのだ。

(もしかしたらお千代ちゃんはこの屋敷に監禁されて……)

小雪はみやびが部屋から出てくる前に2階を調べてみることにした。足音をたてないよ

うプヨプヨした肉球でにじるように廊下を奥へと進んでいく。

「……うっ、ううっ……」

ほどなく、女のすすり泣く声が聞こえてきた。

小雪は襖の合わせ目を前脚でそっとこじ開ける。数センチ開いて中を覗きこんだ。

「はっ、はひぃっ……。お願い、助けてぇ」

座敷の中央に千代の裸身があった。ほっそりした下肢は大きく割られ、その間に巨大な男がうずくまっている。

岩太郎はいまだにピチョックチョッと淫らな音をたてて千代の秘部をしゃぶっていた。

「た……助けてぇ。熱いよぉ」

千代は大粒の涙をこぼしながら、うわごとのようにつぶやいている。好きでもない男に裸身を嬲られ、大切なところを舐めあげられて、死にそうなほど恥ずかしかった。

それなのに、男の愛撫で目覚めてしまった身体は男のものを蜜壺の中へ招き入れようとしている。女の本能は理性を裏切ろうとしていた。千代は両手を男の首に絡めて引き寄せ、男根を誘うように両脚を大きくひろげてしまう。

「あひっ、ひぃいっ。助けてぇぇ」

岩太郎は肉芽を舐めるのを中断して、真っ赤に火照った千代の顔を覗き見る。

「グフフフ……。オレサマのチ×ポをマ×コに入れて欲しくて、頭がヘンになりそうなんだろ？　でもなぁ、いくら泣いてねだってもチ×ポだけは絶対に入れてやんねぇぜ。おまえは団子屋の看板娘のくせに、菜美姫さまのフリをしてオレサマをだましやがったんだからなぁ。そのうち仲間を十数人呼んで、寄ってたかって食い散らかしてやるぜ」

「ひっ、ひぃいっ……」

千代は気が狂いそうなほどの快感に翻弄され、自分の手でパンパンに張りつめた乳房をいじりはじめる。硬くしこった乳首を指の間に挟み、むにむにっと柔肌をこねあげる。それだけでは我慢しきれなくなって片手を狭間に這わせ、愛液で濡れぬれになっている花奥を指腹でこすりたてる。

「お願いっ、こうして。いっぱい触って欲しいのぉっ」

「バカ女め。ひとりでやってろ」

岩太郎は乳房を突きだすようにして挑発する千代の肩を足蹴にする。

布団の上に転がった千代は、泣きじゃくりながら牝壺の入り口をねちゅねちゅ指でこねまわす。

「あっ、ひぃいっ」

千代にはもう、自分がどうなってしまったのか、これからどうすればいいのか、すっか



りわからなくなっている。まるで生まれた時からずっとしていたかのように秘部を利き手で揉みしだく。
廊下から覗いていた小雪は、千代のあまりにも痛ましい姿に目をそむけた。
(あたしが身代わりになってでも、今すぐお千代ちゃんを助けてあげなくちゃ!)
そう決意して、廊下の左右へ視線を走らせる。
「み・にゃあ・うにゃっ!」
猫語で呪文を唱えるとポフッと白煙があがり、三毛猫の小雪は美しい人間の女へと変身した。猫の時のくせで、握った右手の拳で白い頬をすりっすりっと撫であげる。
絶世の美女に化けた小雪は意を決して襖に手をかけると、ひと息に開けて中へ入り、またすぐ閉める。
「なんだおまえは!?」
岩太郎は突然現われた小雪を見て言葉を詰まらせた。
「覚悟なさい」
小雪は端麗な顔に涼しげな笑みをたたえたまま、いきなり岩太郎に抱きついていった。
不本意ではあったが、自分から進んで男の口に唇を押しつけ、片手で岩太郎の片腕を封じ、もう片方の手で剝きだしの剛棒を握ってしごきたてる。

「むううっ」
大黒屋の息子は突如出現した女にのしかかられて、目を白黒させる。
股間の分身をまさぐる手の動きはとても淫らで、あっと言う間にねっとりとした精液が先端から溢れはじめる。
岩太郎は肩で息をしつつ、無理やり小雪の頬を押しのけた。
「はぁっ、はっ、はああっ……。お、おまえ、いったいなにをしやがるんでぇ⁉」
逆に小雪は息ひとつ乱れていない。なおも醜悪な太竿をしごきたてて、プクッと尖った男の乳首をつまんでコロコロ転がす。
「見ればわかるでしょう。あなたの硬くて太いものをいただきにきたの」
「オレサマのチ×ポを？　おまえはいったいどこのどいつだ？」
「そんなことはどうでもいいの。……ほら、こうするととっても気持ちがいいでしょ？」
小雪は妖艶に微笑（ほほえ）むと岩太郎と体を入れ替え、下腹にそそり勃つ剛直を喉の奥まで咥えこむ。玉袋を片手で器用に転がしながら、敏感な先割れから裏筋までを舌と指で刺激していく。
頭の鈍い岩太郎は、見知らぬ美女にやさしく太竿を愛撫されて、千代のことなどすっかり忘れてしまった。



「ううう……。いいぞ、出ちまいそうだ。おまえの中に入れさせてくれよ」

岩太郎は小雪の着物の合わせ目に手を入れかけている。その瞬間、

「バカぁっ！」

小雪の出現でようやく我にかえった千代が、大声で叫んで岩太郎の脳天に大きな壺を振り降ろした。清水焼の壺はガゴッと鈍い音をたてて粉々に砕け散る。

気絶した岩太郎は、白目を剥いて声もたてずにその場にドウッと倒れこんだ。

「お姉さん、だいじょうぶ？」

千代はハァハァと両肩で息をしていた。赤紫色のアザが浮きあがった乳房を弾ませて深呼吸をする。

「ありがとう、お千代ちゃん。あたしの名は小雪。卓さんに頼まれてお千代ちゃんを助けにきたのよ」

「ふっ、ふぇえっ……」

卓の名前を聞いて気が緩んだらしく、千代はポロポロ涙をこぼして泣きじゃくる。

「お千代ちゃん、泣いてる暇はないわ。急いでここから逃げなくちゃ」

小雪は部屋の隅(すみ)にあった岩太郎の着物を千代の裸身に着せると、簡単に帯を締めて、廊下の様子をそっと覗き見る。次の瞬間、小雪は身をすくませた。

岩太郎の声を聞きつけた志乃が、こっちへ向かって廊下を歩いてくる。
「どうしよう？　困ったわ」
部屋を見まわしてみても、逃げ道はおろか、隠れる場所すらない。
「お千代ちゃん、泳げる？」
「えっ？……あたし、カナヅチで……」
「岩太郎、どうかしたのかい？　まだ団子屋の娘と遊んでいるの？」
廊下から志乃の声がして、襖が静かに開きはじめる。
「お千代ちゃん、息をとめて！」
小雪は小声で叫び、千代の手をつかんで窓へ走る。同時に襖が開いた。
「あっ、なんだい、おまえたちはっ!?」
小雪と千代は、志乃の声に追われるようにして、窓から外へ身を躍らせた。
屋敷の裏手は川に面している。ザブウッと水柱があがり、ふたりの姿は淀(よど)んだ水の中にかき消えてしまった。

第7章　フレフレ団の正体は…

小雪と別れた卓は、突然往来の真ん中で立ちどまり、閻魔さままでもビビッてしまいそうなほど怖い顔で後ろを振りかえる。
「ったく、おまえのせいでロクなことがねぇや」
いい気分で卓の後を歩いていた子象パオパオは、目をみひらいて立ちどまる。
「いいか、もう二度と軽業団から逃げだしたりすんじゃねぇぞ。今度オレんとこに現われたら、ケツの穴に火箸を突っこんで、ぐりぐりかきまわしてやるからな」
言葉の意味は当然わからないが、卓がカンカンに怒っていることだけは察したらしく、パオパオのつぶらな瞳に涙がぶあっと盛りあがってくる。けれど涙をこぼすまいと必死になってまばたきをし、そのままプイと背中を向けてしまう。

「あーっ、ウソウソ！　おまえなぁ、象のくせにいじけるなよぉ」
卓はうんざりしたが、急にかわいそうになってパオパオの背中を撫でる。
「わかったわかった。それじゃあ、今度もしオレに会いたくなったら、ルリ大夫か他のやつにちゃんと断ってから出てくるんだぞ。できれば一緒についてきてもらったほうがいいけどな。……さてと、こんなところでぐずぐずしてる暇はねぇんだ。さっさといくぞ」
「ぱふ〜ん♡」
機嫌を直した子象パオパオは、歩きだした卓の後ろをトコトコついていく。
ほどなく、子象を連れた卓は見せ物小屋の木戸を叩いた。
「おぉい、誰かいるかい？」
しかし返事はない。中を覗いてみようとすると、ようやく木戸が内側から開いた。抜けるように色の白い女が顔をのぞかせる。
「あっ！　おまえ、あのくの一じゃねぇかっ！」
様子を見に出てきたお鈴は、小屋へやってきたのが卓だと知ると、血相を変えて中へ駆けこんだ。
だが、卓は数秒早くその腕をぐいとつかんだ。
「待て、おめぇに聞きたいことがあるんだ」

「マサのことなら知らないよっ！　その手を離せっ」
舞台で使う薄布を身にまとったお鈴は、卓の手から逃れようと金色の髪を振り乱して身もだえる。
卓は女忍者お鈴の腕をねじあげて、見世物小屋の奥へと踏みこんでいく。
子象パオパオはよほど腹が空いていたらしく自分専用の小屋へ藁を食べにいってしまった。
「今度は絶対逃がしゃしねぇぜ。おまえが知っていることを洗いざらい白状してもらおうじゃねぇか」
「いやだっ、やめてぇ」
お鈴はなんとかして逃げだそうとしていたが、舞台と床の段差にかかとを引っかけ、その場に尻餅をついてしまった。
卓はすかさずお鈴の上に馬乗りになる。自分を見あげている奇妙な藍色の瞳を目にすると、なぜか心の奥から征服欲が湧きあがって、ついでに股間の息子もムクムクとそそり勃ってくる。
「おまえなぁ、本物の忍者なら、もっと忍者らしい技を使ってみたらどうなんだ？　昨夜からオレに犯られてばっかじゃねぇかよ」

卓はお鈴の蜘蛛の糸を編んでつくったような薄い衣装をビリビリ引き裂き、抜けるように白い柔肌に唇を這わせはじめる。
「あっ、いやあ。や、やめておくれ……」
日に灼けた遊び人は、きめの細かい肌ざわりの、丸い乳房をしぼるようにつかみあげ、プクッと充血してくる乳首をしゃぶりはじめる。尖らせた舌の先で転がし、軽く歯を立てて刺激する。しなやかな女体を嬲れば嬲るほど、剛直は硬く大きく充実していく。
「な、なにも知らないって言ってるだろ。あうっ！」
乳首を嚙まれたお鈴は、ビクッと身体を震わせる。はずみで開いた太腿の間に卓の手が押し入り、あっと言う間にクリ×リスをつねられ、「ひいっ！」と悲鳴をあげる。
「なんでぇ、抗うわりには、もう濡れてるじゃねぇか。ほら、オレの指がおまえのマ×汁でぐちょぐちょになっちまったぜ」
卓の指が肉厚の秘唇を割りひろげ、粘り気のある液をまぶして割れ目を撫であげるたびに、お鈴は裸身をヒクヒクさせる。
「あっ、ひぃいっ。や、やめっ……あ〜っ」
女忍者は若後家キラーの指技だけで、一気に昇り詰めてしまった。全身がくたっと弛緩すると同時に「はっ、はっ」と短い息を繰りかえし、藍色の瞳を涙で潤ませて卓の顔を見

あげる。
「ひとりで勝手に気をやっちまうとは、ずいぶんとワガママな女だぜ」
卓はお鈴の身体をかかえて舞台へ歩き、舞台の真ん中に置かれていた台に彼女のヒップを乗せる。ぐったりしているお鈴の裸身はブリッジをするように弓なりに反りかえった。
「それじゃ、まじめに拷問するとするか」
遊び人の卓は完全に勃起した太竿の先端をくの一の菊門にぶちこんだ。
「ひぎぃぃーっ!」
排泄専門に使用している紫色のすぼまりは、身にあまるほど巨大な肉棒を挿入されて無残にも裂けてしまった。白い内股に鮮血が飛び散る。
お鈴は反射的に上半身を起こし、四肢を引き裂くような激痛に顔を歪め、肛門を凌辱する男の体を押しのけようと必死に両手を突っぱらせる。
しかし卓はお鈴に抵抗されても蚊に刺されたほどの痛みしか感じない。叫び声をあげて裸身をひくつかせるお鈴のアヌスを犯しつづける。
「どうだ、こいつをやめて欲しかったら、菜美をかどわかすよう命令したやつの名前を言うんだ」
「いっ、言えないぃぃっ! ああーっ。やっ、いやぁーっ」



卓はお鈴の乳房を両手でつかみ、腰を突きあげるようにして極太魔羅をピストンさせる。女の菊門は生娘のヴァギナよりも狭あいで抵抗感がある。それでも、挿入されたこわばりがもらす潤滑液のおかげで、だいぶ出し入れが楽になってきた。

「オレがイクより先に、おまえのケツの穴が使い物にならなくなるかもしれねぇな。それでもいいのかよ?」

「いやあっ、あっ……ひぃいー」

豊満な乳房をわしづかみに揉まれ、アヌスを突きあげられるうちに、お鈴は大切な場所がモヤモヤと熱く燃えてくるのを感じた。性交の悦びを知っている牝壺は、菊門から伝わってくる振動を受けて透明な本気汁を吹きだしはじめる。卓の体を押しのけようとしていた両手が、逆に男の着物の襟をつかんで自分のほうへ引きつけようとする。

「あっ。はひいっ……。ああっ、ああんっ」

卓は、苦痛に満ちた声をあげるお鈴の顔に悦楽の表情が浮かんでいることに気づいた。秘裂から溢れだす愛液はふたりの結合部まで達し、ペニスを激しく抽送するとジチュッズチュッと恥ずかしい音がたつ。

「こいつめ、ケツの穴を犯されてよがってやがる。そんなにケツがいいのか?」

「いっ、いいっ……ああーっ」

お鈴は卓の胸にしがみついて腰を淫らにくねらせる。片手を下腹へ這わせて、自分の指で桃色の蕾を嬲ると、心地よい電流が身体の奥を突き抜ける。
「やれやれ、ケツの穴をたっぷり犯された上に自分でアソコを嬲るとは、なんてスケベな女なんだ」
「ちがうのおっ」
わずかに残っていた羞恥心がお鈴の頬を朱に染める。イヤイヤとかぶりを振り、けれどその両脚は卓の腰をかかえるように締めつけて離そうとしない。
「なにがちがうんだよ、おまえはケツの穴でチ×ポを締めつけてガンガンイキまくる淫乱女じゃねぇか。えっ？　どうだ、もっとやって欲しかったらこう言ってみろ。『わたしはケツの穴にチ×ポを入れられるとすごく感じてよがり声をあげる淫乱女です』と」
「言えない。言えません……ああ、お願い、もっと動かしてぇ」
卓が唐突にピストン運動をやめてしまったので、お鈴は自分からヒップを振って快感を求める。
「はひいっ……も、もっとぉ！」
けれども卓は女の胸を片手でつっぱね、台の上に倒れこむくの一のアヌスから剛直を一気に抜き取る。

卓は抱きついてこようとするお鈴の両手首をまとめて押さえつける。
「イクまで犯って欲しかったら、親玉の名前を吐くんだ」
「だ、大黒屋の主人、豪二郎さまです」
「本当だな？」
「ええ。ご主人がナメクジ長屋にいる15、16歳の美しい女の娘をかどわかしてこい、と」
身体の暴走をとめられなくなったお鈴は、ついにその名を白状してしまった。
「やっぱりそうか……。それじゃ、もうひとつ聞くが、岡っ引きの明日香とオレを罠にはめたやつは誰だ？」
「豪二郎さまの奥方の志乃さまが『遊び人の卓とあの女の岡っ引きは目ざわりだ』とおっしゃって、わたしにふたりを罠にかけるよう指図をしたのです」
「よし。白状したご褒美ってことで、もう一度ケツの穴に入れてやるとするか」
「父が誰をかどわかしたんですか⁉」
卓の背後で、唐突に鋭い女の声があがった。
いい具合になってきたお鈴のアヌスをもう一度楽しもうとしていた卓は、身を強ばらせて客席へ目を向けた。するとそこには町娘風の着物を着たルリ大夫が立っている。

「なにっ⁉　大黒屋豪二郎が大夫の父親だぁ？」
大黒屋豪二郎はうっかりするとガマガエルとまちがえてしまいそうなほど醜悪な顔をしている。それを知っている卓は、似ても似つかぬルリの美貌を見て、あ然となる。あまりにもびっくりしたので、股間の太魔羅が一気にちぢみあがってしまった。
「ええ。わたし、表向きには父なし子ということになっていますが、本当は大黒屋が愛人に生ませた子供なのです。卓さま、今の話ですけど、父は抜け荷の他にもなにか悪いことをしているのですか？」
「抜け荷？」
ルリはこっくりうなずいた。
「お鈴、おまえ、奥で身なりを整えてから、アレを持っていらっしゃい」
「はい、お嬢さま」
お鈴は素直にうなずいて、舞台裏へとよろめきながら歩いていく。
ルリはふたりきりになると、大きな瞳を涙でいっぱいにして卓に訴える。
「卓さま、お願いです。どうかわたしをお助けください」
「助けるってなにを？」
と聞きかえしつつも、卓の股間の息子はすっかりその気になっている。お鈴の胎内で暴

れきれなかったうっぷんを晴らせるという期待で、ワクワクしながらルリの次の言葉を待っている。
「父は表向きは呉服問屋の主を装いながら、裏では外国から徳×ご禁制の品をこっそり運ばせているんです。わたしがパオパオにしかけたアレも……」
「お嬢さま、アレをお持ちしました」
そこへ着物に着替えたお鈴が声をかけて入ってきた。その手には明日香から取り戻した乳白色の『淫乱振動誘発機』、すなわち徳×ご禁制のバイブが握られている。
「卓さま、先日パオパオが暴れたのは、わたしが父のところから内緒で持ちだしたこれの存在を誰かに知って欲しかったからなのです。ああして騒ぎを起こせば、岡っ引きかあるいは同心のかたがたがご禁制の品の出所を調査してくれるのではないかと思って……」
「そうだったのか」
卓は事情を悟って深々とうなずいた。股間の息子も美少女の身体は味わえないと悟り、残念そうに深々と頭をたれる。
「こいつは酷な話だが、大夫の親父はよほどの悪人らしいな」
「かもしれません。お願いですから卓さまのお力で父を改心させてください。必要とあらば、ルリはこの身を張ってでも父に悪事をやめさせたいのです」

ルリの脳裏には処女を奪った実父の醜悪な肉茎とその顔がくっきりと浮かびあがっている。狭間に残る疼くような破瓜(はか)の痛みに涙をこぼし、ふと思いだして唇を開いた。
「卓さま、わたし、風の噂で聞いたのですけど、卓さまは3年前の捕り物で、フレフレ団の首領に怪我を負わせたそうですね？」
「ああ。それがどうした？」
「つい最近気がついたのですが、父の左の二の腕には松の葉のような形の刀傷があるのです。もしかすると、卓さまが首領に負わせた傷と同じなのでは……」
「なんだって、大黒屋の腕に刀傷が!?……そうか、わかった。今の話は黙っていろよ。すべてはこの遊び人の卓さんにまかせておけ。いいな？」
卓は震えている小さな肩をそっと胸に引き寄せて、ぎゅっと抱きしめた。

☆

見せ物小屋を出た卓は、まっしぐらにナメクジ長屋へ戻ってきた。
一番奥の千代の部屋を覗いてみたが、誰もいない。八百屋の総助も自分の店へ戻ってしまったようだ。
卓はきびすを返して自分の住まいへ歩いていく。
「いま帰ったぞ」

声をかけて表の障子を開けると同時に、薄茶色の塊が顔面めがけて飛びかかってくる。
「コケーッケッケッケ！」
「わわっ！　弥太郎、オレだ、卓だっ！」
「ケケーッ、ケコ……。コケッ？」
鋭い爪で襲ってきたのは卓と小雪が『風見鶏の弥太郎』と呼んでいる闘鶏だった。血の気の多い弥太郎は相手が時々自分に餌をくれる卓だと知ると、とたんにおとなしくなる。
「あっ、卓さま、お帰りなさいませ」
奥の部屋から菜美が飛んできて、ニコニコしながら板の間に三つ指をついて迎える。
「よかった、無事だったか」
「菜美のことでしたら、ご心配無用ですわ。ここにいる弥太郎さんが一緒でしたもの」
弥太郎は自分が褒められているのを悟って、偉そうに胸を張ってみせる。
卓はその横をすり抜けて部屋にあがり、開け放たれた窓の側にどっかとあぐらをかいて座りこむ。
「卓さま、お茶でもお飲みになる？　それともお酒がいいかしら？」
「菜美、おまえ、輿入れが決まってたそうじゃないか」
勝手口に立って茶にしようか酒にしようか思案していた菜美は、ドキッとして持ってい

た鉄ビンを取り落としてしまった。慌てて拾って水がめの蓋の上に乗せる。
「城を抜けだしてきたのはそのせいなんだろ？」
菜美は卓に背中を向けたまま、吐息混じりの返事をする。
「……ええ」
「菜美、ちょっとこっちへこい」
美しいお姫さまはうつむき加減に部屋に戻ると、着物の裾をきちんと整えて卓の前に正座をする。卓の顔は見ようとせずに、組んだ両手をじっと見つめている。
「いいか、菜美。自分に都合の悪いことや困ったことが起きても、絶対に逃げちゃいけないぜ。そんな時に逃げだすのは弱虫のすることだ。弱虫になりたくなければ、困難には立ち向かえ。問題は解決しろ。わかったな」
菜美はその言葉を心で噛みしめた。真っ正面から卓を見つめて可憐な唇を開く。
「そうですね、菜美は困難から逃げようとしていたのかもしれません。卓さまなら菜美の危機を救ってくださる、そう思って、ただ助けていただくことばかりを願って……」
「わかりゃあいいんだよ」
「でも、もし自分の力でどうにもできない時は、どうすればいいの？」
「そういう時は知恵を貸してくれそうな人に相談するんだ。『3人寄れば文珠（もんじゅ）の知恵』と

言うだろ。どうすれば問題を解決できるか、知恵を借りればいい」
聡明な菜美姫は卓の助言を理解して、黙ってうなずいた。
「菜美はもう逃げたりはしませんわ。城へ戻って問題に取り組んでみます。でも、その前に、ひとつ質問があるのですけれど」
「なんだ？」
「ねぇ、卓さま。卓さまは菜美がおきらい？」
「いや、きらいなもんか」
「それでは、どうぞ昨夜のつづきをしてくださいましな」
言うと同時に、菜美はなよやかな身体を卓の胸に投げかけていく。幼なじみの卓の肩に両腕をまわし、長屋に現われた時と同様に唇を押しつけてキスをする。
「あっ！　おいおい、なにを真っ昼間から……」
「安心なさって。こうしていれば、すぐに夜になりますわ」
菜美は真剣な表情で卓の着物の裾をまくりあげ、白いふんどしに包まれた股間に片手を当てて、ふっくらと盛りあがったこわばりを揉みしだく。
「よせやいっ！　徳×の姫君がそんなところを触るんじゃやねぇ」
「よいではありませんか。菜美が城へ戻ってしまえば、もう二度と卓さまに、『気持ちの

よくなる拷問』をしていただけなくなるかもしれませんでしょう。ですから、今のうちに……。ね？」

菜美に「ね？」と言われると、卓は断る気が失せてしまう。見せ物小屋で1発しそこねたことも影響して、股間のものはたちまち硬く勃起していく。

お姫さまはそそり勃ってくる極太ペニスを撫でながら、卓の着物を脱がせようとする。

「もうそれくらいでよさねぇと、痛い目を見ることになるぜ。それでもいいのか？」

「ぜんぜんかまいませんわ」

怖いもの知らずの姫は白い木綿を素早く剝ぎ取り、とうとう卓の分身を剝きだしにしてしまった。太幹を片手でしごきながら自分の帯を解き、着物の裾をはだけていく。

卓の股間の剛棒は、姫の柔らかな手で刺激されて完全に屹立してしまった。もうこれ以上はこらえきれそうにない。

「菜美っ、怒るぞ」

「どうぞご自由に。ねぇ卓さま。ほら、菜美のココはもうこんなに……」

菜美は卓の大きな手をつかんで秘部へと導く。男のシンボルを愛撫するうちにすっかり発情してしまったらしく、高貴な姫の秘花は甘い蜜を帯びてしとどに濡れそぼっている。

卓は眉根を寄せ、しかつめらしい顔で言った。

「菜美、言っておきたいことがある」
「なんですの？」
「男ってぇのは、空きっ腹をかかえた狼と同じなんだ。うまそうな獲物が目の前にいれば、十中八九、本能のままに襲いかかっちまう。つまり、好みの女がいればどうしても手を出さずにはいられなくなるんだよ」
「それでは、うかがいますけど、菜美は卓さまの『好みの女』ですの？」
可愛い問いかけに、卓はこっくりうなずいてみせる。
「もちろんだ。はっきり言って、オレはもう抑えがきかねぇぞ。それでもいいのか？」
「ええ」
という返事を聞いたとたん、卓は素早く身を起こして菜美をその場に押し倒していた。
乱れた着物の裾を大きく開き、柔らかな恥毛に覆われた秘部をあらわにする。真昼の陽光の中で見る菜美の下半身は妙に青白くて生々しく見える。
「いいんだな？」
「お願い、早くなさって」
菜美の上ずった声にせかされて、卓はほどよく脂の乗った太腿を割りひろげる。
お姫さまの秘孔はたっぷりと淫蜜をたたえ、花びらのような秘唇まで濡れそぼっていた。



卓の指が包皮を剝いて肉芽を軽くつまむと、膣口が収縮してぬるぬるした透明な液が菊門のほうへトロリと伝い落ちる。

「はふっ、た、卓さまぁ」

卓の股間の絶倫棒はビクッビクッと脈打ちながら、先端から透明な汁を溢れさせる。

「痛くてつづけるのがいやになったら、ちゃんとそう言うんだぞ」

「だいじょうぶ。菜美は卓さまが大好きですもの」

卓は大きな手で姫の美乳をやさしく揉みあげながらもう片方の手で秘唇を割り、きれいな朱色をした秘孔に亀頭を押しつける。

「あっ……」

菜美はピクッと裸身を震わせる。

「いくぞ」

「いやぁあああーっ！」

突然聞こえてきた木戸をぶち破りそうなほどの叫び声に、卓と菜美はその身を硬直させた。慌てて目を向けると、表の障子がいつの間にか開いていて、そこに千代が立っている。

「うわぁあぁーん。そんなことしちゃいやだぁぁーっ！」

大声で泣きだした千代は全身びしょ濡れだった。

「千代っ、その格好はどうしたんだ?」
卓は腰のあたりにまとわりついていた着物の袖に腕を通して立ちあがる。菜美の処女臭を吸収して完全に勃起していた太幹は、ちょっとやそっとじゃ静まりそうにもなかったが、卓は偉そうにそっくり返った息子の頭を両手で無理やり押さえこんだ。
その後ろにいる菜美も、千代に背中を向けて乱れた着物を直しはじめる。
「おい、千代。泣いてちゃわかんねぇだろ」
千代はひっくひっくとしゃくりあげつつ、卓をにらむように見つめて答える。
「たっ、卓さん、この菜美って人の身体をずっと、な……舐めてたのね。千代にはいっぺんもしてくれたことがないのに、どうしてこの人のは舐めてあげたの? やっぱりそれってこの人がお姫さまだから?」
「いや、そういうわけじゃ……なにぃ、どうして菜美がお姫さまだと知ってるんだよ?」
「だって、大黒屋の息子の岩太郎っていうやつがそう言ってたんだもん。千代は菜美姫とまちがわれて、かどわかされてたのよ。小雪さんがきて助けてくれなかったら、殺されてたかもしれないんだからねっ!」
千代はひと息に説明して、また「うぇ~ん」と泣きだしてしまう。本当は命がけで逃げてきたことを卓に話して慰めてもらい、ついでにたっぷり甘えようと思っていた。けれど



も、そのもくろみがはずれてしまった上に、卓と菜美がしっぽりずっぽりやっていたのが悔しくて泣いてしまったのだ。
「そうか、大変な目にあったんだな。ごめんよ、オレが守ってやれなくて」
卓は泣きじゃくる千代の頭を胸に抱き寄せ、やさしく肩を撫でる。
「千代さん、わたしとまちがわれたせいで怖い目にあわせてしまってすみませんでした。おわびを申しあげます」
着物を直した菜美がやさしい言葉をかける。
「ううん、怖くはなかったけど、でも……」
説明しかける千代の頬がパアッとホオズキ色に染まる。さすがに「見知らぬ男に全身を舐めまわされてとっても気持ちがよかった」とは言えなくて、口ごもってしまう。
「あのね卓さん、小雪さんから伝言よ。『フレフレ団が復活し、今夜どこかの大店（おおだな）を襲撃する模様。標的がわかりしだい連絡します』って」
「そうか、そいつはまずいな」
「千代さん、着物が濡れてるじゃありませんか。いったいどうなさったの？」
「大黒屋の別邸から逃げだそうとして裏手の川へ飛びこんだの。あたし、泳げないから、小雪さんが助けてくれなかったら溺れて死んでたかもしれないわ。ヘタすりゃもうちょっ

とで土左衛門になってたとこよ」

真顔で答える千代の言葉に、卓はついプッと吹きだしてしまった。

「卓さんってば、笑いごとじゃないんだからね！」

「それは大変でしたこと。とにかくまずは着替えをなさいましな」

根がやさしい菜美は千代が恋のライバルであることも忘れ、タンスの中からお光が用意してくれた町娘用の着物を千代に選んであげる。

「ほらほら、卓さま、ボーッとつっ立っていないで、ちょっとの間、外に出ていてくださいな。卓さまがそこにいたのでは、千代さんが着替えをしづらいでしょう？」

「ん？　あ、そうか。それじゃあオレは、夕めしの菜でも買ってくるとするか。……おい弥太郎、オレが戻ってくるまで、ちゃあんとここを見張ってるんだぜ」

卓は血の気の多い闘鶏に念を押して、長屋をぶらりと出ていった。

第8章　どんでん返しの大捕り物

あと一刻もすれば夜明けがくる。
草木もすべて寝静まった江戸の町を、黒装束に身を包んだ一団が足音を忍ばせて道を急いでいる。
3年ほど前に卓の手によって一網打尽（いちもうだじん）になったはずの殺人強盗フレフレ団は、今夜復活を果たしてある大店（おおだな）の裏口に集結した。中のひとりが指笛でふくろうの声をまねる。
「ほうっ……ほぉ～う」
その合図を待ちかねていたように、木戸が中から開かれる。月光に青白く照らされたのは、大黒屋の主・豪二郎の後妻である志乃の顔だった。
志乃は無言のままフレフレ団を大黒屋の邸内へ招き入れた。約10名のフレフレ団はあら

かじめ大黒屋の見取り図を入手していたらしく、薄暗闇の中を平然と歩きまわる。
蔵の錠前はすべて志乃が前もって開けておいた。
フレフレ団のメンバーは、お頭が決めた役割分担に従って動いていく。ある者は蔵から千両箱を、ある者は別の蔵から舶来の絹織物を運びだす。
志乃はグラマラスな女忍者に姿を変えた実妹みやびとともに縁側の木戸を開けて、奥の座敷へと向かう。その途中、小便をしに起きてきた丁稚(でっち)と廊下で出くわした。
「あっ、曲者(くせもの)っ！」
叫ぶ丁稚の胸にみやびの握る短刀が深々と突き刺さる。肺をやられた丁稚は、声もあげずにその場にくず折れた。
みやびは倒れこんでくる丁稚をいったん抱きとめ、音がしないよう気をつけて廊下に骸(むくろ)を横たえる。
志乃は無表情のまま豪二郎が眠る部屋へとみやびを導く。襖に手をかけ、目くばせで合図してから静かに開ける。
大黒屋豪二郎は鼻のあたりまで布団をかぶり、気持ちよさそうに寝息をたてていた。
廊下に立つ志乃の目前で、みやびが短剣を逆手に構える。ついで、素早く布団を剝ぎ取って左胸に短剣を突きたてようとしたとたん、

「そいつはちょっといただけねぇな」
庭のほうから男の声が響き、ふたりはハッとして木戸の向こうへ視線を投げた。
淡い月光に照らされて、背の高い男の姿がくっきりと浮かびあがっている。
「誰だっ⁉」
「フフン。おまえらなんぞに名乗るほどのもんじゃねぇぜ」
「なんだって？」
問いかえす志乃の声が静かな空気をかき乱す。
その声を聞きつけた強盗たちが音もなく集結した。しめし合わせていたようにバラバラと男の周囲を取りかこむ。青白い月光を浴びて、何本もの短剣がギラリと光る。
だが男は、四方八方から短剣の切っ先を突きつけられても少しも動揺を見せずに、のんびりとふところに手を入れて立っている。
殺人強盗フレフレ団を指揮する志乃は、ついに大声を発した。
「何者だいっ⁉」
「しょうがねぇなぁ。二度も聞かれたんじゃあ、答えにゃなるめぇ」
「言っておくけど、三度目はないと思っときな」
短気なみやびが口を挟む。

「そうかい。そいじゃあ名乗ることとしようか。……月に代わって悪ふざけ。ビー玉使いは日本一。遊び人の卓さんたぁ、オレのことだ！」
ご存じ遊び人の卓さんの名を聞いたとたん、一味の間に動揺が走る。
粋でいなせな遊び人、やんごとなき生まれの卓は、素早く着物の袖から両腕を抜く。屈強な筋肉に包まれた両肩から背中にかけて彫りあげられた紅椿が完全に露出する。
双肩に浮かびあがった紅椿は月光を受けてきらきらと輝いて見えた。
「背ナで震える紅椿、茜の花は悪人裁く……てめえら、観念しやがれ！」
「ええい、殺っちまいな！」
志乃の声を合図にフレフレ団の刃が踊る。
けれど、黙って串刺しになるのを待っているような卓ではない。素早く身を沈めて躍りかかる敵の下腹に拳を放つ。ゲハアッとうめいて覆い被さってくる体をかわし、新たな敵の眉間にビー玉を撃ちこむ。
「ギャアッ！」
「チイッ！　みやび、殺っておしまい」
卓は敵の肩越しに、志乃の隣にいたみやびが豪二郎に襲いかかるのを見た。瞬間、目にもとまらぬ速さで、目ん玉ほどの大きさのビー玉をみやびめがけて投げつける。

ギヤマンのオモチャは、豪二郎の寝首を掻こうとする女忍者の手首にビシッと命中した。
「あつっ！」
短剣を取り落とした女忍者の手首を豪二郎がつかむ。
と思いきや、それは豪二郎に扮したちゃっかり六兵衛だった。小心者の六兵衛は、ともすればカタカタ鳴りだしそうな歯をぐっと食いしばって起きあがる。
「ええっとなんだっけ？　そうだ、やいやい、てめぇらみんな御用だ、御用だあっ！」
やや震えを帯びた声が夜闇を貫く。そのとたん、
「御用だ！」
「御用、御用！」
突然夜が明けたかのように屋敷の外一面が明るくなる。表通りに面した木戸を押し開け、垣根を飛び越えて御用提灯を掲げた捕り物方が次々となだれこんでくる。
一番乗りは岡っ引きの明日香だった。緋色のハッピをひるがえし、すらりとのびた太腿を踊らせて庭先へ飛びこんでくる。その右手には銀に輝く十手が握られていた。
明日香は卓の姿をちらりと目にし、一瞬動きをとめる。けれど処女を奪った男のことは無視して、少しも動揺を見せずに声高に叫ぶ。
「殺人強盗フレフレ団め、今度こそ神妙にお縄をちょうだいしやがれ！」

捕り物方は必死になって抵抗する強盗たちを次から次へと地面にねじ伏せていく。
「お、親分っ！」
みやびを捕らえたはずの六兵衛は、揉み合ううちにいつの間にか形勢が逆転して、女忍者に馬乗りで首を締められている。その顔は息が詰まって真っ赤にふくれあがっていた。
「六兵衛っ！」
子分思いの明日香は顔色を変えて座敷に突進した。美しい切れ長の目の大きな瞳に気魄をみなぎらせ、十手を振りかざしてみやびに飛びかかっていく。
「食らえっ！」
明日香はくの一の肩先に銀の十手を叩きこんだ。
「あうっ！」
肩をしたたか打たれたみやびは、苦痛の叫びをあげて畳の上に転がった。転がりながら、隠し持っていた手裏剣を明日香の胸もとめがけて投げつける。
次の瞬間、ビシイッ！　という激しい音とともに、銀の十手が手裏剣を弾き飛ばす。
「もう勘弁しないよ！」
明日香は声高に叫んでみやびに飛びかかっていく。
「神妙にしろっ！」

「ええい、この小娘がっ」
ふたりの美女は互いの身体をつかみ合い、隙あらば相手をねじ伏せようと腕力をふるう。激しく取っ組み合ううちに着物があちこち裂けて、柔肌があらわになる。
部屋の隅で見物していたちゃっかり六兵衛は、みやびの乳房が剥きだしになったとたん、両目をまん丸に見開いて歓声をあげた。
「こいつはいいや、女同士の濡れ場なんて、めったにお目にかかれねぇぞ。もっとやれっ。乳剝きだして、揉みもみしやがれ。マ×コをいじってやるんだよう！」
その声を聞いた明日香とみやびは、そのまんまの格好でピタリと静止した。勝ち気そうな四つの瞳がジロリと六兵衛のほうをねめつける。
「六兵衛、今なんて言ったんだい？」
「えっ？　いや、その……オイラは別に……」
小心者のちゃっかり六兵衛はオロオロとうろたえはじめる。明日香と目線を会わせないようにしながら、よっこらせ、と立ちあがる。
「さてと。小便でもしてくるかな？」
「バカっ、こんな時に小便してる場合じゃないだろっ！」
「やっちまえっ！」

今の今まで敵同士だった明日香とみやびは、覗き魔六兵衛を懲らしめようと呼吸を合わせて飛びかかっていった。

一方、卓はひとりで2階へ逃げていく志乃を追っていた。

「待ちやがれっ！」

試しにビー玉を投げつけてみたが、卓本人も走っているのでうまく命中しない。

そうこうしているうちに、志乃は逃げ場を失って大黒屋の屋根によじ登り、瓦ぶきの屋根の上を猫のように身軽に駆けていく。

「おいおい、猫じゃあるめぇし、なにも屋根に逃げなくたっていいだろうが」

志乃は苦笑する卓には返事もせずに走りつづける。だが、とうとう屋根の端まで追いつめられてしまった。隣家に飛び移りたくても、その屋根までは遠すぎる。くるりときびすを返して、真っ正面から卓と対峙する。

「オレは役人じゃあねぇが、悪いことは言わねぇ。ムダな抵抗はやめて、おとなしくお縄をちょうだいしやがれ」

「うるさいよっ！　あたしは、おまえらなんかに捕まるようなチャチな玉じゃねぇんだ」

血相を変えた志乃は、ふところに隠し持っていた舶来の短筒を構える。徳×ご禁制の品である飛び道具は月光を浴びてギラリと冷たい光を放つ。

卓は両手を体の両側にぶらりとたらしたままで、蒼白な志乃の顔を見つめた。

「オレを殺るつもりか？」

「もちろんさ。あんたを殺って、あたしも……」

「残念だが、おまえにゃあ、そんなことはさせられねぇな」

「なんでだいっ？」

短筒を握りしめた志乃は、引き金にかけた指に少しずつ力を入れていく。

ところが、双肩に紅椿をしょった遊び人は命の危険などみじんも感じていない様子だ。

フッと微笑をもらして頭上を見あげる。

「見てみろよ。男のオレでもうっとりしちまうくらいきれいな月じゃねぇか。こんな月夜に人なんか殺めたら、お月さまが悔しがって涙を流すぜ」

「フン。そんなバカなことがあるわけないだろ」

反論しつつも、志乃の双眼は美麗な月に吸い寄せられている。

「志乃、おまえには、もっと他にしなきゃなんねぇことがあるだろ？」

「あたしに？」

問いかえす志乃の目の前に、いつの間にか卓が立っている。卓はハッとして短筒を握り直す志乃の手首をつかんで、その腕ごと胸に抱きこむように引き寄せて女の唇を奪った。

「むうっ……んっ」

志乃はつかまれた手を振りほどこうと必死に抗った。けれど、舌に舌を絡めて濃厚なくちづけをされると、身体から不思議と力が抜けていく。

卓は女の抵抗が少しずつ弱まっていくのを感じると、志乃の股奥にそっと右手を滑りこませて、下着をつけていない狭間を指で嬲りはじめる。もう片方の手は着物の襟から侵入してたっぷりとした乳房を揉みあげていた。

「やめっ……。やめてっ」

「どうして？　女は男に愛されるようにできてるんだ。そしてオレは……いや、男は女を愛するようにできてる。だから……」

卓は低い声で志乃の耳朶（じだ）にささやく。瓦の上に女体を横たえ、不安定な姿勢のまま志乃の艶めかしい首筋にじりじりと唇を這わせていく。

「あっ、はあぁっ……」

軽くいじられただけで、志乃の秘部は潤いはじめる。卓の指が行き交うたびに、淫蜜にまみれた秘唇がこすれ合って、くちゅっ、ちゅるっと淫らな音をたてる。

若後家キラーは敏感に反応しはじめる秘孔の縁を指腹でえぐるように愛撫する。

「およしっ。こんなとこで……。ああっ、ひ、人に見られたら……」



「安心しろ、志乃の身体を見てるのはお月さんだけだ」
「でもっ」
口では反論しつつも、志乃は卓の指技から逃れられない。包皮をめくられ、剝きだしになった肉芽を転がされると、身体の奥からゾクゾクするような官能の疼きがこみあげてくる。
「ねぇ卓さん。卓さんはあたしを愛してくれるの？　一度はあんたの命を奪おうとしたのに……」
「言っただろう。オレは女を愛するようにできてるんだ」
「本当かい？……うれしい」
殺人強盗フレフレ団のお頭、志乃は目に涙を浮かべて卓の胸にすがりつき、両手を男の首にまわして引きつける。その指の下で紅椿が咲き乱れていた。
「ああ、きれい……んくっ……。はぁあっ」
志乃は潤んだ瞳で月光に輝く紅椿を見つめ、半開きになった朱唇から甘いあえぎ声をもらす。秘孔に剛直の先端を押しつけられると、期待で裸身をわななかせる。
「あはぁんっ。卓さん、たくさんしてぇ」
「いいとも。たっぷりしてやるぜ」

卓は志乃の乳房を片手で揉みあげながら、極太魔羅を膣口にねじこんだ。
ぬらぬらした液をたたえている熱い蜜壺は、一瞬恥ずかしげに抵抗するそぶりを見せた。けれど、すぐにうれしそうに根元までズップリと受け入れて、ぐいぐいと肉茎を締めつけはじめる。
「はひいっ。す、すごいっ。た、卓さぁんっ」
志乃はその頬に妖艶な表情を浮かべ、乳房を突きだすようにして裸身をのけぞらせる。青白い月光に照らされた豊満な肉体は、じっとりと汗ばんでいる。
「志乃、たくさんたくさん愛してやるからな」
卓はカチカチに勃起させた剛棒で、熱く燃える花奥を深々と突きあげる。牝壺が噴きだす秘液を掻きだすようにカリ首で肉壁をこすりたてる。太幹の侵入角度を変えようと両膝の位置を直した拍子に、瓦が1枚ずれて下へ落ちていった。
「あっ、上に誰かいるぞ！」
捕り物方の声を耳にした卓は、あせりを感じて太竿の抽送をさらに加速させた。こんなところでケツ丸だしで犯ってるところを見られては、股間の息子の沽券（こけん）に関わる。
「ひぃいっ。イクぅっ、イッちゃうよぉ〜っ！」
志乃は切なげな声をあげると同時に絶頂に達した。

ギヤマン使いの遊び人も、ひときわ強く締めつける肉壺の奥深くに雄汁をぶちまける。
「はっ、はあっ……。よかったぜ、志乃」
「あたしもよ。今まで、こんなに感じさせてくれたのは、卓さんだけだわ」
「そいつはよかった」
卓は絶頂に達してうっとりと仰臥している志乃の唇に唇を重ねた。キスは短めにすませて、志乃に着物を着せかけ、自分も辛うじて腰にまとわりついている着物をきちんと身につけはじめる。
「ここだっ、ここにいたぞ！」
ざわざわと人声が聞こえ、ふたりの背後がさあっと明るくなる。
「卓さん、どうしよう⁉」
志乃は密会現場を親に見つけられた箱入り娘のように怯えて卓にしがみつく。
「そこにいるのは遊び人の卓さんだろ？」
卓は聞き覚えのある声に振りかえった。志乃を後ろにかばって問いかえす。
「明日香親分か？」
「ああ。親分と呼ばれるほどのもんじゃないけどね」
御用提灯を掲げた明日香は、卓の顔を見た瞬間、ドキッと胸が痛むのを感じた。知らず

しらずのうちに頬がカアッと熱くなってくる。その脳裏には番屋の牢で自分を凌辱した男の太竿が想い浮かぶ。なぜか花奥にジィンとしびれるような感触がよみがえってきた。

（いやだわ、どうしてこんなに胸が痛むの？　まさかあたし……）

明日香は胸の内からこみあげてきた卓への思いを無理やり揉み消そうとかぶりを振る。冷静を保とうと努力しつつ、もう一度卓を見る。

「後ろにいるのは誰なんだい？　顔を見せてもらおうじゃないか」

「おいおい、そいつはいくらなんでも野暮(やぼ)ってもんだぜ。これからここでしっぽりずっぽりやろう、ってぇ時によう。女の覗き屋なんざ、見たことも聞いたこともねぇや」

ウブな明日香は卓の誤解を解く言葉を見つけられずに、真っ赤になってその場から退散した。

身なりを整えた志乃は、髪を振り乱して卓の胸にすがりついていく。

「卓さん、本当にありがとう」

「いいってことよ。……と言いたいとこだが、いったいなんだっておまえがフレフレ団のお頭なんかになったんだ？　前のお頭はオレとやり合った時に二の腕を斬られて這々(ほうほう)の体(てい)で逃げだしやがった。あいつは絶対男だったが……」

「そのとおりよ。あたしは二代目なの。でも、初代のお頭はこのあたしがフレフレ団を再

結成したことは全然知らずにいるわ。今夜まではね」
「初代の居場所を知っているのか？」
志乃は卓の瞳を見つめてこくっとうなずいた。
「こうなりゃ、全部白状するわ。あたしがフレフレ団を再結成して大黒屋を襲ったのは、豪二郎のせいなの。あたしはもともとは豪二郎の妾で、正妻のお富さんが亡くなった2年前に後妻にしてもらったのよ。だけど、豪二郎は最初からあたしに愛情なんか感じてはいなかった。好きな時に好きなようにもてあそべるオモチャか犬猫のようにしか思ってくれなかった。そして、あげくの果てにはあたしをうなぎ屋の女将に据えて、大黒屋のひいき客たちの慰み者にする始末……」
志乃ははらはらと溢れてくる涙を着物の袖で拭き、また話をつづける。
「フレフレ団を再結成したら、大黒屋の金品を奪って豪二郎を懲らしめてやろうと思っていたの。でも、そうこうしているうちに、豪二郎はあたしとの間に生まれた実の娘のルリまでも手ごめにして……」
「大黒屋がルリ大夫を⁉」
あまりにもむごい話を聞かされ、卓は二の句が継げなくなった。
「ルリから一部始終を聞かされたら、もうこれ以上我慢ができなくなって、いっそ豪二郎

を殺めてしまおうと、妹のみやびに相談をしたんです」
「よくわかったぞ、志乃。おまえが娘を思う気持ちは充分よくわかった。このオレにすべてまかせてくれないか？」
「ええ、でも、卓さんがなにを……」
卓はすっくと立ちあがり、2階へ通じる木戸のほうへ目線を投げた。
「明日香、そこにいるんだろう？」
木戸の陰でハッと息を呑む音がし、つづけて明日香が顔をのぞかせる。
「話は全部聞いていたな？」
「えっ？……ええ」
「それじゃ、正真正銘の捕り物をするとしようぜ」
卓はニヤリと笑って志乃の手をつかみ、明日香を連れて3人で庭へ降りていく。
殺人強盗フレフレ団の盗賊全員、そして黒装束のみやびは、縄を打たれて庭の隅にまとめて置かれている。
鯉が放たれている池の前には、明日香の指示を受けて別の部屋に隠れていた大黒屋豪二郎が立っていた。志乃の姿を見つけるとガマガエルのような顔を怒りで真っ青にして、誰にともなく怒鳴りつける。

「あいつがフレフレ団のお頭だ。捕まえてくれ！　江戸追放……いや、打ち首獄門にして死んでからも懲らしめてやってくれ！」
だが、豪二郎がいくら叫んでも、その場に居合せた者は誰ひとりとして微動だにしなかった。捕り物方に岡っ引きの明日香、そしてそれらの上司である同心たち、全員が遊び人の卓に注目している。
卓は端正な顔に微笑を浮かべて豪二郎に歩み寄る。
「大黒屋豪二郎、すまねぇが、左の二の腕を見せてもらおうか」
「なっ、なんだって？……おい、こいつは誰だ、フレフレ団の仲間じゃないのか？」
「大黒屋さん、卓さんの言うとおり、左の腕を見せてごらんよ」
岡っ引きの明日香も口を添える。
「バカなことを言うな。そんなことより、志乃を捕らえて……」
卓は後ずさる豪二郎の腕を素早くつかんで、着物の袖を肩までまくりあげる。するとそこには長さ約10センチ、V字に斬りこまれた刀傷がくっきりと浮かびあがっていた。
「ほほぉ～う。こいつは奇妙だ。今からちょうど3年前、オレがフレフレ団の初代のお頭につけてやった刀傷に、こんなところでお目にかかれるとはなぁ」
「こっ、これは子供の頃遊んでいてつけた傷だ。だから……」

「てやんでぃ、いい加減に観念しやがれ！」
遊び人の卓は怒声を放つと同時に背中を向けて、目にも鮮やかな紅椿を見せつける。
「背ナで震える紅椿、茜の花は悪人裁く……。大黒屋豪二郎、いや殺人強盗フレフレ団の初代首領よ、おとなしくお縄をちょうだいしやがれ！」
気魄に満ちた卓の声が、あたりの空気をビリビリと震わせる。
大黒屋豪二郎はさあっと顔色を変え、きびすを返して脱兎のごとく駆けだした。警備が手薄なところを狙って突破しようと、垣根のほうへ突進していく。
だが、遊び人の卓は黙っちゃいない。すぐ脇に立っていた明日香の手から十手を取って投げつける。
ずっしりと重みのある銀色の十手は、真っすぐに飛んで豪二郎の後頭部を直撃した。
「うわあっ！」
豪二郎の体は風に舞う木の葉のようにくるくるまわり、庭石を踏みはずして池の中へドッボーンと落ちてしまった。
「あーっ！　助けてぇっ、おっ、泳げなっ……あぶあぶあぶぶ……」
「六兵衛、助けておやり」
「へぇ」

明日香とみやびにしこたま殴られて頭にコブをこしらえた六兵衛が、いやいや池に踏みこんでいく。

「なんでぇ、ぜんぜん深くねえじゃねぇか」

六兵衛は、膝までの深さしかない池の中でアップアップしている豪二郎を助けだした。それからまるで自分が大物をとっ捕まえたような偉そうな顔つきで、豪二郎の体に縄をかける。

「さてと。明日香、あそこの畳を剥いでみな」

卓は豪二郎が寝所に使っている座敷を指で示した。

明日香は不思議そうな顔をしつつも、捕り物方の手を借りて畳を剥がしていく。畳の下に敷き詰められた板を剥がすと、その下に木箱がいくつか並んでいる。ふたを開けると、中には見覚えのあるものがずらりと並んでいた。

「あっ、これは……」

床下に隠されていた乳白色のものを見たとたん、明日香の白く美しい頬に、ぱあっと血の気が昇ってくる。

「そいつの使いかたはよぉ～く知ってるな……おっと、そうじゃなかった。そいつがなんなのかはよぉ～く知ってるな？」

明日香は真っ赤に染まった顔を見られまいと、床下を覗きこみつつうなずいてみせる。深呼吸して心を静め、パッと背後を振りかえる。ふてぶてしい態度で地面に座りこんでいる大黒屋をねめつけながら、ぽってりした美しい唇を開く。

「こいつは徳×ご禁制の品、『淫乱誘発振動機』さ。大黒屋豪二郎、おまえの罪はこれだけでも充分重罪だ。自分の過ちを素直に認め、おとなしくお上のご沙汰を待つがいいぞ」

卓が目で合図をすると、脇に控えていた同心たちはそれぞれ罪人たちを引ったてていった。その中には志乃の姿も含まれていた。

志乃は双眸に涙を浮かべて、卓にペコリと頭をさげた。

罪人がすべて連れだされると、騒ぎが静まるのを待ちかねていたかのように東の空が明るくなってくる。

明日香は御用提灯のロウソクを吹き消し、背後を振りかえった。

「さてと。それじゃあ、お次は遊び人の卓さんの素姓を聞かせてもらおうか？」

ところが、卓の姿はいつの間にか大黒屋の庭からきれいさっぱり消えている。

「んもう！　卓さんったら、いつもあたしの鼻先からまんまと姿をくらますんだから」

岡っ引きの明日香は悔しそうな表情でつぶやいて、朱唇をキュッと噛みしめた。

第9章　これにて一件落着!?

めでたく一件落着を迎えた卓は、早苗の家に転がりこんだ。
事件が解決した満足と捕り物を終えた興奮が、女への欲望に火をつけている。
「邪魔するぜ」
たったひとこと言っただけで、卓はもう早苗の身体を押し倒していた。着物の裾をまくりあげ、妖艶な艶をにじませている太腿を割りひろげ、水に飢えた野良犬のように女の狭間を舐めあげる。
「ああっ、卓さん、やめてぇ」
早苗は目にもとまらぬ卓の早業(はやわざ)に悲鳴をあげた。両手で男の肩を押し戻すようにつっぱねつつ、大きくひろげられた下肢をもじもじと動かす。

「だめよ、こんなとこを誰かに見られたら……」

障子の外は人が出入りする小路なのだ。つっぱり棒もかけていないので、ご近所のおかみさんがミソを借りに突然入ってくるかもしれない。

そう思うと早苗はいてても立ってもいられなくなって、なんとか卓の攻撃から身を守ろうと四肢をくねらせる。

「いいじゃねぇか。ほら、こんなに濡れてきやがった」

卓は愛液でじっとりと濡れてきた早苗の秘部を指で嬲る。早苗の狭間は指が往復するたびに、くちゅっちゅぷっと卑猥な音をたてる。

「ひはぁっ……。だめっ、お願い、奥の部屋で。ねっ？」

「ダメだ。こんなに水がもれてくるんじゃ、栓をしておかないとな」

若後家キラーはニヤリと白い歯を見せて微笑(ほほえ)み、早苗の陰口に中指を突き立てる。

「ひはあっ！」

ぬらぬらと淫蜜を帯びた割れ目の中央を深々とえぐられ、早苗は甘い声をあげる。

「これでよし、と。……それにしても、ずいぶんとスケべなマ×コだぜ。ぐにぐに動いてオレの指をずっと奥まで咥(くわ)えこもうとしてるじゃねぇか」

「はうんっ！……ひいっ」

卓は体をずらして女の上半身にまといつく着物を剝ぎ取りにかかる。強引に引っぱられた袖のつけ根が、ビッと裂ける。

「ああっ、乱暴にしないで……ひあぁっ」

早苗はなんとかして着物を守ろうと自分で帯を解きはじめる。潤んだ両目で卓を見あげて、身もだえしながら裸身を包む布地を脱いでいく。両肩から襦袢をずり降ろすと、雪のように白い乳房が剝きだしになった。

「こんなにうまそうなもんを見せつけられたんじゃ、黙ってなんかいられねぇぜ」

卓の目はイタズラを企むガキ大将のようにキラキラと輝いている。巨大な大福を思わせる早苗の乳房をわしづかみにして揉みしだくと、柔らかな肉球はまるでつきたての餅のようにプルルッと揺れて卓の手に吸いついてくる。

「あひぃっ……。な、なんだか、いつもの卓さんじゃないみたい」

「はっはっは。いつもと同じじゃ、つまんねぇだろ」

早苗の太腿に押しつけられた剛直は、みるみるうちに硬くなっていく。

(岩のように硬くて凄く大きいものがアソコに入ってくる)

と思っただけで、甘美な興奮が早苗の背筋をゾクゾクっと震わせる。

「乳首をいじるのが好きだろ。自分で慰めてやんな」

卓は自分の肩にまわされた早苗の両手をつかみ、プルプル震えているたわわな乳房へ導いた。そして淫らな液を噴きだしている女の秘部がよく見えるように、形のいい桃尻の下に折り曲げた座布団を押しこんだ。
胸が敏感な早苗は自分の指で乳首をつまみあげた。指の間に挟みこんでコロコロ転がすと、肌が泡立つように震えてすごく気持ちがいい。
「あっ、ふぁあんっ」
「なんでぇ、オレの指が1本くらいじゃ、細すぎて栓になんねぇってか？　淫水が溢れだしてケツの穴まで濡れちまってるぜ」
卓はうまそうな若後家の太腿をかかえこんで、秘部を下から上へと舌で舐めあげる。菊門を舐められた瞬間、早苗の裸身がビクビクッと痙攣した。
「ひぃぃいっ！　だっ、だめよ、そんなとこっ……。ああっ、恥ずかしい」
早苗は羞恥を感じて両手で顔を覆ってしまった。太腿を閉じて卓の攻撃を封じたいのだが、遊び人の舌は若い女の下半身をすっかり蕩(とろ)けさせていて、もはや抵抗しようにもできなくなっている。
「ひはあっ。……お、お願い、もうっ。ああんっ」
早苗は甘いよがり声をあげながら、とうとう卓におねだりをしていた。

「早苗、これがなにかわかるか？」
卓ははだけた着物のふところからギヤマン製の水鉄砲を取りだした。中にはどろりと白濁した液が限界ぎりぎりまで入っている。
「それ、なあに？　どうするつもり？」
「こいつは上物のドブロクだ。早苗のマ×コにたっぷり流しこんでやるぜ」
「ええっ!?　そ、そんな……ひいいっ！」
卓は四つん這いになって逃げだそうとする早苗の丸いヒップをかかえこみ、ぬらぬらした液をたたえた膣口に水鉄砲を差しこんだ。白いドブロクを半分ほど流しこみ、残りはアヌスに注入する。
「ひぃいっ！　は、入ってくるううっ」
早苗は熱く燃えるヴァギナに冷たい液を注ぎこまれ、思わず背筋を震わせた。秘部を覆う薄い粘膜にアルコールが染みて膣全体がさらに熱くなってくる。
あお向けに転がされた早苗は、おしめを取りかえる赤ん坊のように両脚を開いていて、花芯と膣口を同時にくじられる心地よさにぼうっとなっている。
卓は包皮を押しあげるようにして、勃起した肉芽を指腹で撫でまわす。
「あひいぃっ、ダメよぉっ。そんなにいじられたら、お、お腹がギュルギュルして、出て



しまいそう」

「なにが出るんだ？」

「う、ウ×コ……。ああっ、ダメぇ」

早苗は恥ずかしい言葉を思わず口にしてしまった。その羞恥で美しい頬をさらに朱に染める。

「しょうがないな。ビー玉はさっきの捕り物で使い果たしちまったし……。マ×コの穴はオレの息子で塞ぐとして、さて、早苗のケツのほうはどうしたもんかな？」

卓は周囲を見まわし、勝手口の水がめの上に鉢植えのホオズキがあるのを見つけた。その枝には真っ赤な実が鈴なりになっている。

「じゃあ、こいつで栓をしてやろう」

早苗は卓がもいできたホオズキを見るとサアッと顔色を変えた。イヤイヤとかぶりを振るが、逃げだしたくても身体の芯が疼いてしまい身体に力が入らない。

「そんなのいやあっ！」

卓は目の前でぷるぷる震えている菊門を指でひろげて、その中にホオズキをめりこませた。軽い抵抗感のある薄紫色のすぼまりに、ひとつふたつと挿入していく。

「ああっ、ひいいっ……」

直腸に異物が侵入してくる身の毛がよだつような感触に、うら若き後家は叫び声を放つ。
卓は結局、早苗のアヌスにホオズキを6つも押しこんでしまった。
「ひいいっ」
早苗はかすれ声をあげ、畳に爪を立てて裸身をのけぞらせる。蜜壺と直腸に注入されたドブロクは粘膜を通して秘部全体を熱く燃えあがらせている。
「それじゃあ、そろそろワカメ酒でも味わうとするか」
卓は若後家の狭間に顔を寄せて、どろどろした液をたたえている秘孔を音をたてて吸いあげはじめる。
「ひいっ！　そ、そんなあっ、吸わないでぇ。はひぃぃっ」
早苗は花奥を吸われながら大きな乳房を両手でわしづかみに揉みしだく。はあっはあっと短い息を繰りかえし、ガクガクと裸身を震わせてよがり声をたてる。
若後家キラーは陰口から溢れてくる淫蜜混じりの美酒をじゅるっじゅるっと吸いあげていたが、眉根を寄せて忠告した。
「おいおい、あんまりケツに力を入れると、尻の穴からホオズキが飛びでてきちまうぜ」
「いやあっ！」
早苗は（お尻の穴に力を入れてはいけない）と思うのだが、牝壺を吸いあげられると底

抜けに気持ちがよくてヴァギナが勝手に収縮し、それにつられて括約筋も異物を押しだすようにすぼまってしまう。

「だめえっ、もう我慢できないいっ」

卓はチイッと舌打ちをし、ヒクヒクわなないている陰口に勃起した極太魔羅をズップリ突き立てた。片手をのばして乳房を揉みあげながら、ゆっくりと腰を使いはじめる。

膣内は愛液と酒が混ざり合ってどろどろになっている。太竿を出し入れするたびにドプッグプッと白っぽい液が結合部から溢れた。

「ああっ、あはあんっ」

アナルに挿入されたホオズキを割らないようにゆっくりと律動する卓の攻撃は、早苗にはあまりにももどかしかった。太く硬いものでヴァギナのずっと奥まで突きあげて欲しくなり、とうとう自分から積極的に腰をぐいぐい押しあげる。

「ひあっ！　卓さぁん、そこよっ、そこがいいの」

上ずった声をあげると同時に、早苗の菊門がポコッとホオズキを産み落とす。

「あ〜あ、1粒出ちまったぜ」

「いやあっ、恥ずかしいっ」

早苗にしがみつかれて卓の着物がずり落ち、両肩が剝きだしになる。がっしりとして筋



肉の盛りあがった双肩には、朱に燃え盛る炎のような紅椿が美しく咲き乱れている。
早苗は椿の花びらを十指で掻きむしり、見事なカーブを描く裸身を震わせる。まろやかで女らしい全身からじっとりと汗がにじみ、牝の芳香が室内に漂う。蜜壺は絶倫棒の抽送に合わせて収縮し、貪欲な生き物のように快感をむさぼりつづける。
「いいっ、ああーっ」
ついに早苗は完全に気をやってしまった。
パシャッと音がして、菊門の中でホオズキが押しつぶされる。小さな薄紫色のすぼまりは、ところどころがつぶれてへこんだホオズキをポコッ、コロンと吐きだしはじめる。
卓も「うむっ」と小さくうめいて、ドブロクとよく似た白い雄汁をたっぷりと牝壺にぶちまけた。心ゆくまで女陰を味わいつくした興奮で息を荒く弾ませながら、早苗の横にゴロリと身を横たえる。
双肩の紅椿は霧雨を受けたようにうっすらと水滴を浮かべていた。
気絶していた早苗が「ふうっ」と息を吐きだして目を覚ました。目尻をほんのり茜色に染めて、色っぽい表情で卓に話しかける。
「卓さん、今まで、いろいろありがとう」
どことなく思いつめた表情で天井をにらんでいた卓は、「え?・」と問いかえした。

「どうしたんだよ、オレに黙ってどこかへいくつもりなのかい？」
「いいえ、そうじゃないけど……」
早苗は言葉を詰まらせて、紅椿の花びらの輪郭を指でなぞる。
「なんだか、卓さんの心はもうここにはないような気がするの。ちがう？」
今度は卓がなにも言えなくなってしまった。静かな呼吸に合わせてやさしく隆起している乳房を片手ですっぽり包みこみ、まだ尖ったままの乳首をやんわりと転がす。
「まいったな。早苗には全部お見とおしってことか」
「そうよ。お願い、心の中にあることを正直に言ってみて」
「実は、オレに好きな女ができたらしいんだ」
早苗はふっと唇をほころばせる。
「あら、どうしてそんな他人ごとみたいな言いかたをするの？」
「だって、信じられねぇんだよ。ついきのうまでは早苗が一番好きだったのに、今日になってみると、別の女をもっと好きになってたんだ。こんなことを言うのは早苗に悪いとは思うんだが……」
「気にしないで。卓さんにはわたしみたいな後家よりも、もっとふさわしい人がいるはずよ。そのことはこうなる前からわかっていたんだから」

早苗は微笑みを浮かべてそっと上半身を起こし、慈しむように片手を卓の頬に当てて、唇に唇を重ねる。

「誰にでもやさしくて男気のある卓さんが好きよ。ほんのわずかなひとときでも、卓さんとすごせて本当によかった。とても幸せだったわ」

卓は涙ひとつ見せずに別れを承諾する女をじっと見つめた。

「早苗……」

身勝手な自分の行為を反省しつつ、遊び人は早苗の裸身をもう一度抱きしめた。

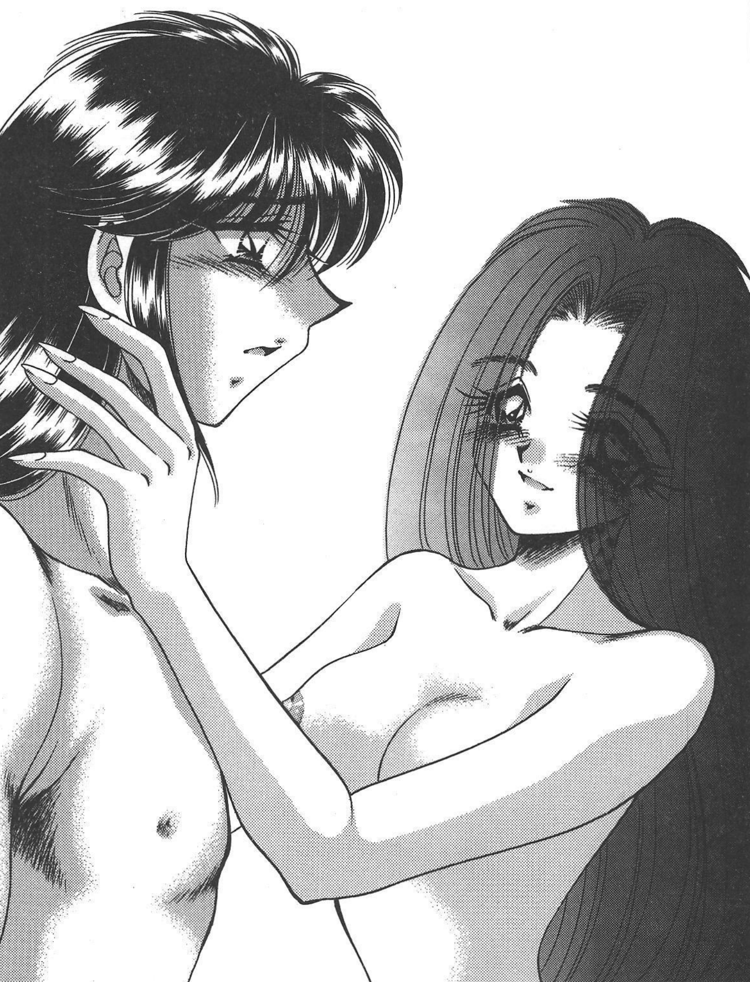
☆

卓は早苗との様々な思い出が残る家を出ると、『またこい橋』のたもとで欄干にもたれてぼんやりと川面を眺めた。

「なぁ小雪。オレってやつは、いったいどうしちまったのかな？」

卓の足もとにチョコンと座っている三毛猫の小雪は「にゃあ？」と聞きかえして小首をかしげる。

「きのうまでは、どんな女でもオレがその気になればたいていすぐに手に入ったし、1発犯れば、誰でもオレになびいた。でも、あいつだけはちがうんだ。人前でオレに犯られても、ぜんぜん屁とも思ってない。媚びもせず、何事もなかったかのようにオレに向かって



きやがる。……あんな女は初めてだぜ。あ～あ、これからどうしたもんかなぁ？」
遊び人の卓はため息をつきながら、欄干にもたれて抜けるような青空を見あげる。
「卓さぁあーん！」
けだるい調子で振り向くと、舟見町のほうから千代がバタバタと駆けてくる。千代の後ろには町娘に変装した菜美姫もついてきていた。
ふたりの美少女は、ハァハァ息を弾ませながら卓の前まで駆け寄った。
「卓さぁん、どこいってたのよぉ？　千代、すんごくさがしちゃったんだからねっ！」
「わたしもですわ。ルリ大夫が使いをよこして、『卓さまとご一緒に軽業をごらんにいらっしゃいませ』と文をくださいましたのよ。せっかくですから、菜美と一緒にいきませんこと？」
「ダメダメ！　卓さんはあたしとふたりで舟和の芋ようかんを食べにいくのよ。あそこの芋ようかんは卓さんも目がないんだから！」
「そんなの、いつでもよいではありませんか。ねぇ、卓さま？」
「ダァメ！　千代なんか、今日はもうお店を閉めてきちゃったんだから」
千代と菜美姫の舌戦をうんざりしながら見ていた卓は、ふたりに気づかれないように、後ずさりをはじめた。

橋のたもとまでくると、あとはくるりときびすを返して逃げだすだけ……と思っていたのに、振り向いたとたんに灰白色の物体にドンと胸がぶつかった。

「ぱおぱふぅう〜ん♡」

危うく尻モチをつきそうになった卓は「ゲッ！」と叫んで、その場に硬直してしまった。目の前に、またもや軽業団を脱走した子象パオパオが立っている。

パオパオは生き別れの母に再会した幼子（おさなご）のように、満面に笑みを浮かべて長い鼻を卓の腰に巻きつけてくる。

「あっ！　おい、やめろって！」

身動きの取れなくなった卓は、パオパオの鼻から逃れようと必死になる。だが、パオパオは「もう二度と離さないゾウ！」とばかりに卓の体をギュッと締めつける。

「あーっ！　卓さんってば、また子象に絡まれてるーっ！」

「卓さまって、女子供だけじゃなく子象にも愛されてしまわれるかたですのね。菜美は、そんな卓さまが大好きですわ」

「なによ、あたしだって卓さんが大好きなんだからっ！」

「あーもう！　おまえら、どうでもいいけど、ルリ大夫を呼ぶとかして、こいつをなんとかしてくれぇ！」



口論していた千代と菜美は、パオパオに甘えられて悲鳴をあげる卓を見て、どちらからともなくクスクス笑いだした。

騒ぎを聞きつけた物見高いやじ馬たちが、『またこい橋』のふもとに集まってくる。その輪のずっと向こうから明日香が憂(うれ)いを帯びた顔つきでやってきた。

明日香はいつもの岡っ引きらしい扮装ではなく、若い女の子らしい華やかな花模様の着物と似合いの帯を身につけている。つやつやした黒髪も町娘らしく結(ゆ)いあげて、べっこうの花かんざしを差していた。

「こんな着物を着るのは久しぶりだけれど、卓さん、気に入ってくれるかしら？　ううん、それより、うまくあの人に会えるといいけど……」

普段は気の強い明日香だったが、今日は心配そうにつぶやきながら歩いてくる。

頭上で輝くお天道さまは、恋に落ちた遊び人と岡っ引きの姿をやさしく見守っていた。

【おわり】

あとがき　ごちそうさまの、そのあとは♡

はいっ、ごちそーさまでした。
けっこうイケる味だったでしょ。じゃあ、くりすのほうは気に入ってくれた？　ん？
「味わってる暇がなかったよ」
ですって。それじゃ、ここでちょっぴりつまんでみる？
んーと、くりすねぇ、このあいだ、とっても素敵な黒のパーティドレスを買ったの。
身体にフィットするボディコンタイプで膝上20センチのミニ。胸のところがハート型に深く切れこんでいて、バストの谷間が見えそうで見えない仕組みになってるのよ。
あなたのために、そのドレスを着てあげる♡
ジャンジャジャーン！　どぉ、オーダーメードみたいにピッタリでしょ？

おろしたてのドレスを一番最初に見てくれたのが他の誰かじゃなくてあなたで、くりす、とってもうれしいわ。うれしいからホッペにチュウしてあげちゃう♡

「キスだけじゃ我慢できないよ」

や~ん。ホントはその言葉を待ってたの。デザートの代わりに、くりすを食べてね。ドレスの下はノーブラで、レースのパンティとストッキングしかつけていないの。ファスナーは背中側よ。あせってドレスを破かないように注意してね。

あなたはやさしい手つきで黒いドレスを脱がせていく。くりすを裸にしたら、尖らせた舌で胸を舐めはじめるの。あなたの片手は脇腹を伝って狭間のほうへジリジリのびていく。もう片方の手で乳房をつかんでモミモミされるたびに、ハートが弾んできちゃうわ。

正直に言うとね、そんなふうにあなたの指で大事なところを触られるのって、好き。だって、くりすのピンク色の真珠はとっても感度がいいから、円を描くように転がされるとすごく気持ちがよくなってしまうんだもの。身体中が快感でしびれてきちゃうわ。

気がつくと、どこからともなく、くちゅくちゅくちゅっていう水っぽい音が……。

ああん。くりすのアソコ、濡れてきちゃったよぉ。やだやだやだぁ。

指でいじられただけでエッチな液がもれてきちゃうなんて恥ずかしい。まるで下のお口があなたの硬くて太いものを欲しがってるみたい。

でもでも、今日は「入れて」なんて、絶対言わないからね。その代わり、あなたの元気クンをお口にパクッと含んで、逆襲しちゃうの。

むせちゃいそうなほど喉のずっと奥深くまで咥(くわ)えこんだら、裏筋を舌の先でチロチロ舐めあげて、白いマグマがいっぱい詰まった袋を両手の指でサワサワ揉みしだくの。

「おっ、上手だね」

なんて笑わないで。くりすがこんなことをできるのは、あなただけなのよ。

ふたりとも胸がドキドキしてきたら、もっと気持ちよくなれることをしましょ。

くりすがテーブルに両手をついてお尻を差しだすから、細くくびれたウエストをつかんで、濡れぬれのアソコに硬くそそり勃ったあなたのものをゆっくり入れてね。

ああ～ん。お腹のずっと奥のほうに、凄く大きなものが入ってきちゃう。お次は後ろから両手でくりすの乳房を揉みながら、極太クンをズチュッズチュッて出し入れしてね。

そうしたら、お尻をクネクネくねらせて、甘い声をたっぷり聞かせてあげる。

ふたりともイッちゃうのは一緒よ。イッちゃったあとも、ずっとずっと一緒にいてね。

いつでもどこでもどんな時でも、あなたと一緒が幸せなの♡

紅　くりす



——必殺あそび人——
花の大江戸捕物帳

著　者　紅（くれない）くりす
挿　画　猫島（ねこじま）　礼（れい）
発行所　株式会社フランス書院
東京都文京区後楽2-23-7　〒112
電話　03-3818-2681（代表）
03-3818-3118（編集）
振替　00160-5-93873
印刷　誠宏印刷　製本　宮田製本

ISBN4-8296-2079-X C0193



ISBN4-8296-2079-X

C0193 P540E

定価540円（本体524円）





紅椿の彫り物を背負った
遊び人★卓を取り巻く
お江戸の花たち!
エッチな若後家・早苗、
美人岡っ引き・明日香、
可愛い菜美姫に
団子屋の看板娘・千代。
そして子象のパオパオ!?
人情の町を舞台に
てんやわんやの大さわぎ!!



フランス書院
ナポレオン文庫